

平成27年度 函館市民文芸 第55集

巻頭特集:

追悼 宇江佐真理さん



函館市中央図書館 指定管理者 TRC函館グループ

幼き頃・・・・・・・松 下 邦 夫 52	【佳作】 指毛・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【小説】おげんきな女達・・・・・・安 東 璋 二 1 【小説】おげんきな女達・・・・・・・・・・・・・ 26 【評論】反面文学としての林真理子・・・・・・・ 26 【対馬 俊明 選)	函館市民文芸──宇江佐真理へのステップ── 函館市民文芸──宇江佐真理さん 国館市民文芸 第5集
	【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【入選】 (大選】 【大選】 サンタは見ている・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【入選】大滝洋子・圓山洋子・竹田光彦・・・・・・ 152◇短歌(山県 庸美 選)	【選評】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【佳作】 (も)消しゴムなんかいらない)・・欠端一機9 (も)消しゴムなんかいらない)・・欠端一機9 (番門の嵐・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	◇ノンフィクション (竹中 征機 選)【入選】「デイサービス・・・・・・・・・・・・・ 地 政 義 121
◇審査員紹介・あとがき・・・・・・・・・ 163	 ◇川柳(池 さとし 選) 【 入選】浜口豊子・本間総子・岩本真穂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	 ◇俳句(熊澤 三太郎 選) 【選習吟]・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	【選者詠】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

巻頭特集 追悼 宇江佐真理さん

伊藤香さんと市民文芸―宇江佐真理へのステップ―

られているが、それは作家として世に出た時

からの

る。 い。ご本人にとっても好ましい話ではなかったはずであ 人気作家の習作時代の作品を公けにする理由も必要もな はありえない。 だった。 集し、その解説を書くことになる事態は、 彼女の習作時 機会あるごとに触れてきたつもりだが、 宇江佐真理は市民文芸ゆかりの作家だということは、 むろん彼女が健在で活躍中なら、 練達の時代小説作家として、 市民文芸に投稿入選 した作品を追 市民文芸が こういう事態 想像外のこと V まが 旬 淖 \mathcal{O}

れたことをお互いに納得するしかない。 ためて認識したいということで、こういう機会がつくら して市民 いまは宇江佐真理という作家を理解し、 しか 感想をまとめたい。 Ļ した立場から、 文芸という場が、 思いがけない早さで作家はこの世を旅立った。 2多く、 筆は その習作時代について、 調 わ 相応の意味を持つことをあら ないが、 彼女の市民文芸作品 しのぶよすがと いろいろ思 とりあえ 巡

1

た。 れる。 この名前 習作時代は伊藤香という本名で作品を発表して

二つの部門とも私が選を担当していたので、 作品に接することになった。 後5年つづけ きりこれを習作時代の作品として意識してい 伊藤香という本名でなければならなかった。 であったことがその頃の作品からもうかがわれる。 - ロニーとその 伊藤香さんの習作時代の作品を辿ってみたい。 - ムは世に出るまで封印され がら聞いたことではないが、 伊藤香さんは昭和 そういう意味も含めて、市民文芸に投稿した作品 別にいえばそれはひそかに用意された名前であ 別の使い . て 評論 不機 分けは習作時代からかなり意識 嫌 57 5篇 の周 年、 小 評論 説2篇を市民文芸に寄せた。 辺」を市民文芸に投稿し、以 た名前であったように思わ 宇江佐真理というペンネ 「富岡多恵子におけるア 彼女は 親しくその 的なもの 0

 \mathcal{O}

うで、 民文芸の 応募数が最も限られていた。 長い 歴史でも評 論 部門は 作者は私 ハー F の担当した ル が 高 11 ょ

宇江佐真理という名前はペンネームだということは知

女性 もう一人 · 入選 囲 出 は 恵 /村岡 てい ほ が二 とん 圭子 る。 が 一作並ん 初 どが さん 中 8 国 男性 7 であ で入選するのは後にも先にもな の作家巴金をとりあげたもので、 0 評 つ 女性の 評論 や偶然にもこの 光を待つ人びと」 は 伊藤 香さん 年

は \mathcal{O}

<

さん その

歌

人としての

活

. 動が

知られ

ており、

市

民文芸では

は

説

が

が不作だ

ったので、

余計に目立った。

村

出 \ \ \

説

の部

門ですでに高

いレベルの作品を寄せていた。

B

はり市民文芸の歴史に残る作者である。

論 やエッセイ 焦点を当てて、 盛名を得ていた富岡多恵子は当時、詩人から作家に移行 したことでも話題に \mathcal{O} さて伊藤香さんの富岡多恵子論 印象を私は次 を中心に自由 富岡 のようにまとめた。 の詩 なっていた。 と小 な語り口で論じ 説の評判 であ 伊藤さんはそのことに るが、 作 ている。この 「冥途の 作家とし 家族 評 7

を持 ては不 る自 解 面 いわ で、その詩の魅力と小説へ移行する事情を推考してい 白さと ゆる研究的 在させ 備 0 思 から作家 ŧ る こてい · を語 П Ď \mathcal{O} も多い で、 な評論というものではなく、 0 実感が るのもよい。 るというも 単 移行した富岡に不満 が、 なる愛着 あ る。 一方借品 Ď で、 で 対 は 象に自己の読 見気儘に書 り物でな 評論 なく 一定 あ の手 りという立 対象に ・モチー いてい \mathcal{O} つづきとし 説みと視. 批 判と 対す ż るよ る 理 点 \mathcal{O} 場

意

味がもうひとつわからない、

と言いつつ、

次の

ように

面 うで構 白 読 成 W や文章に だ。 ŧ 固 有 0 才 気とセン ス を感じさせ

ずることが理解されるはずである。 論 以後の印象である。 作者の持ち味の魅力として気にならなくなるというのが 書き方が洗練 ては不備 でも 少 シし長い 基本的 のものも多い」という正 引用 されてきて、 12 変ら E な な ったが、この そのエ 今号掲 ッセ 攻法的 載 印 評 象 0 1 林 論 は な私 的 真 以 0 な 手 理 後 スタ 0 0 つづきとし 不 論 彼 1 潚 女 ル ţ 0 が

わ っているところが目をひく。 富岡多恵子 論に . 戻 っていえば、 作者 が 富 岡 の詩

エッセイや小説を書き始めた。

物語 伊 に書き、うたうことでなく、 もりが、 を、 を語っている。 過去形に言 の詩が好きだと言いながら、もとい、 る。もとい 家である。 藤さん 「詩というかたちでウタをうたうことを拒 (小説) に は /しか こその ・、好きであった」とい かしコトバはうたってし 直しているところが、こ .向かったという意味 富岡多恵子自身は詩から小説 エッ ľ セ 私は、 イを引用 何 より コトバ L 、 う 一 も彼 のことを書 ま 富 に語らせ 節が 好 出 0 \mathcal{O} 女 かきであ た」とエ 評 \mathcal{O} \mathcal{O} 論 あ 詩 たい う ん へ移る理 る が 0 で が 7 モ 0 好 ために ッセイ きた チ た、 \vdash ĺ 彼 由 女 あ フ 0

は

作

今や富岡多恵子

7 11

には 彼女 詩 \hat{O} で 詩 は \mathcal{O} やれ 中 \mathcal{O} な 部 1 分 、 と 語 が、 次第に形を変えて行 り出したことは、 私に 0 も納 て、

得できる。

ま小説 途の 市民文芸五作 多恵子に重ね 論をまとめ 富 家族 岡 を書くことに 0 詩 を成功作とし そい は好きだとい ている。 目 る。 \mathcal{O} 評 ここで作 論 向 カン 伊藤香さんもかつて詩 て高 V 7 っていた。 ながら 1 ナ 者 く評価するところで Ì には 自分 結 *(*) その 誇 局 ŋ \mathcal{O} 思い 辺の 富 岡 を作 マ 事情を後 を書き、 0 チ 小 家 作 ユ 説 ア 者 \mathcal{O} 出 年 V は 冥

50

遠吠え-1 詩 私自身であ で表現するもの 「かつて遣ったことの かつて詩を書くことを辞めたのは私の意志であった。 私の読書 は私に ノート ない から―」の中でこう書い はないと判断し . 言葉 0 レトリックを たのは ア 誰でもな 7 駆 いる。 使 す

私は るあ 別 ħ であった」 _ 私』を明 り、 私は本来、最も自 確 に持ってい 分ら なかった。 ĺ V ス タ それ 1 ル を忘 が 私 \mathcal{O} れ 詩 た。 \mathcal{O}

限らず に 富 别 モ 以 岡 れ 公後どの 多恵子 チ 7 ĺ 私 作 ラ が (D) :者の 論 作家を語 11 面 ま 0 切 言外 白さと語 書 実 きた な カ 0 思 7 5 V り口 11 ŧ É \mathcal{O} の察せら が は \mathcal{O} 彼女 小 貫 実 説 の評 感がある」 れ で て る。 あ 11 論に る る。 は 0 と とい 借 論 0 い V) ね う に

江

ブ 行

ムになってい

ここではその

向 邦

 \mathbb{H} 子

邦

子

機

で亡

0

7

兀

年

貝

向

田

は

ち

ょ

0

た

でも うの て、 \mathcal{O} きたくな は 構 焦燥の美学―ウイリアム・アイ 造 その後ズッコケた三文役者のように」と自 ゎ はそういうことである。 カン 0 るが、 ١, 富岡多恵子 」を市民文芸に寄せる。「カッ į そう書きながら 書くこともないだろう」 論で、「今後私 その 伊藤香さん リッシ は 本 誰 命 コ \mathcal{O} が ュの と断 ょ 作 小 は く見栄を切 品 ミステ 캪 で 0 朝 ī 評 あ 年、 た る 論 IJ t こと 書 0

寄る余学 も体裁が と文学 るも く窺 11 をとめ、 る。 い思いをしたと、 分でも腑に 作品 佐真 のが高 乱歩やポ カン わ う三 自も 裕 が \mathcal{O} れ 魅力 この それ 0 は 整 角 伊 時 な カン 落ちない っている。 い を焦燥の 関係 · ま読 評論 藤 代 と価値を語 いが、 ーにまで及ぶ作 ったせい 香 亦 らん 次の向 は、 説 W を寄せ、 が、 でも評 ア \mathcal{O} の美学とし しか 1 か は 作 ア こった作 ミステ 品 ij 田 1 た ッ 邦 L 論 ij 評 世 11 さささ 論 界 シ 者 私 とし ッシ 子 てなみ 昭 É 者 \bar{o} 論 IJ は ユ 和 向 推理 通 0 1 ては \mathcal{O} 佳作として扱っ 独 か ユ 巡ずるも 美意識 辛 56 特 中で彼女は . フ 田 \sim 0 邦子 年に 0 \mathcal{O} 小 口 ア 富 推 詩 説 \mathcal{O} ンとし 出 愛着と勉 向 E 理 情 論 私 多 は \mathcal{O} 恵 お を 小 لخ 0 田 書い 4 思 後年 説 T 子 け 叙 邦 る映 ではな 、 ま 立 た。 情 言 期 論 わ 強 子 が せる。 \mathcal{O} 7 が 痛 É 目 11 す V) ょ

Ē ていて興味深 い評論になっている 作者 の文学への 崽 V が 端 的 に 語 ら

その以 がらまた、 と見事なものに感じた」と、その作品 いたという。あらためて目に触れた向田作品は、「ずい 前 はラジオやテレビドラマの作者としてなじん 次のように書いている。 に伊藤さんが触れたの への感動を書きな は 彼女 0 死 後 で で、

ではな は口をきわめて私をののしるだろう」 家であるので数多くの文学の形をした作品がある。 「彼女は文学を書きはしなかった。もちろん直木賞作 、と断言してしまったら、多くの彼女のファン

時 の選評で私はこう書いた。 これは向田邦子をおとしめて言ってるのではない。 当

辛口 るとき、それは欠かせない視点である」 見ではない。そこにはいわゆる純文学とは何か、 「彼女の作品が文学ではない、というのは否定的な意 の反語がある。 向 田邦子の魅 力 とは何かを考え とい j

いる。「私は文学とは何か 文学伝習所で井上光 いのかを教えてもらいたかった。その為に山形くん った。「もちろんそうだろう。何を書けば良いのかなど、 た」しかし この評論の中でかつて若 晴 の講義を聞 を知りたかった。 井上光晴 1 は何も た時のことを 語ってくれな 何を書けば V 頃、 Ш だり 形 い 7 \mathcal{O}

> 書く理 装した会話」そして夜の飲み会の 達の集まったあの 局彼女はこの伝習所から 由 がな こったられ 独特 書かなけれ の鼻持ちならない雰囲気や理論 「文学青年や文学お ば 「節操のなさ」などに 良い 0

ば

はさん

いことを書けなくなる自分を恐れたのである」彼女がど 「以後どんな文学上の集まりも拒否してきた。 書きた 方を選ぶことを学んだことになる。 疲れきって帰ってきただけだった。

いや次のような生き

に詰めこんで、 たまっている文学や小説 に充ちていた時である。 も派生し、全道的にも函館という地域が最も文学的 館に興味を持ってこの後文学伝習所を開 たあたりで、 発表場所として書いている理由が、ここで語られて んな文学グループにも加わらず、 ちなみに当時の その 市民文芸に書きつづけていた、 函館は、文学学校が開校十周年を迎え 記念講演に井上 それを横眼に見て、彼女は への思い . を、 光晴を迎え、 市民文芸をいま唯 評論というか 所いた。 一 、井上 というこ 同 活気 は 雑

ただろう。「向田邦子を評論に選んだら、ずい分下世話な 真面目に語 こととして、函館文学学校や派生している同人雑誌でも、 その彼女の意識の中では井 の中心になるのは純文学で、 られることはないだろうとい 上光 晴 向田邦子の作品などが 0 うも 習所

とになる。

いている になるだろうなあ、 と今から少し気が 重 い と彼

自答しながら次のような結論に辿りつく。 それは文学ではないのか、 一方で向田 しかし、「彼女は 邦 子の小説 文学を書きは やエッセイに感動する自分がいる。 では文学とは何なのかと自問 しなかった」と言いつつ、

る種の った」 あらためてうなずき、共感したはずだ。それはやはりあ ても言葉に 話、それ等はいったい何んだったのだろう。人は気づい った。 日本人であること、親兄弟のこと、彼女の 〈文学〉、他の追従と模倣を許さない独特の世界だ 田邦子は しなかったことを言葉にしてくれ 〈文学〉という形で、 読者に た。 提 宗 読者は 苦 i V な 逸 か

さらにこの文章のあとがきで、この先私はどうしたら のか 自問自答していると書き、その思いをこう結ん

せっている今日この頃である」 のなさを知っているからだろう。 だろう。なかなか、そこに立ち直れない とだと思う。 文学評論を書く心得としては、作家に嫉 を 私は嫉 V やすには、 か 5 妬 ない。だけど、 ばかりで真っ赤に 自分も小説 (略) いつまで評論 を のは自分の 書 つか書こうとあ 焼けただれ 1 妬 てみること 元しない 才能 で回 7

0

11

であることも。 由であることも。 であることも、それが同人雑誌などを求めない一つの の小説がいわゆる純 ここではっきり彼 そして評論がそのために必要な回 女は 文学という概念にとらわ 小説 へ の 志 向 · を語 0 -れないも 理 \mathcal{O}

て同時入選する。三年つづけて彼女の私評論を読んできな女達」と評論「反面文学としての林真理子」を書 っていた。 比べて「おげんきな女達」はこの頃の市民文芸では珍 作りが陥りやすい固さや単調さを脱けきっていなかった。 2作はいずれも力があり、感動もあったが、 面白さでは伊藤さんの作品が際立っていた。 が、これだけ選んだ年は他にない。し る作品が揃った。中から小説3篇評論2篇を入選とした た私にとってもそれは至極必然的なことに思われた。 物語 選評を抜き書きしてみる この年は市民文芸も当り年で、小説評論とも内容の 伊 藤香さんは次の年四年目、 的構成を持った読み物風 んでもその感想は変らない 本号掲 0 小説としてよく仕上が かし小説 載 の小 小説 純文学風 評論 の他 お んでき あ \mathcal{O}

クルで奮闘する姿が中心になっている。(略) 主人公の視 W 「保育園から小学校と、子育て 主婦 たちが、 社会学級のバ の一時期をようやく進 ドミント ・シサー

逆に甘 ぞれ が とつの目標に日常を燃焼しようとする女達の生に、 げ な 絡 な を V りやす い等分の Ņ い感動を誘う物語 こくも描 のだろう。 が け よくできて な 理由 が かな 5 代の ひとつ [を認めようという視点が成功してい 女達 \ <u>`</u> 母 V . る。 人間 の物 の世界を必要以上 に仕上げてい 親 達 0 0 語 下手にすれ 世 平凡さを見越し に 1界を、 集約してゆ る。 あ ば安手な風 一に意 る共 作者 た上で、 (感と、 地 \bar{O} その 悪く 目 \bar{o} 俗俗 Ŕ 位 る。 それ さり 展 物 層

点

を通

L

て小

集団

0

主婦達

を応分に

描

きわ

け、

場

面

に

開 脈

試合

この場面・

など描写の

巧さも目立ち、(略)

動

動から静

話

S

をシンミリしめくくるあたりの手際も鮮やかである」

仕上が く書 わ 論と併せて、 ってい にちょっと注文をつけただけ 作者 れ いた彼女 ってい る 0 \tilde{O} 小 林真理子 説 0 あらためてその への強い志向を知っていただけに、ようや これ 亦 論 説 また彼女がどん 0 ま には期待 選評の一節を抜き書く。 で 0 評 思い で、 論や今号に と危惧を感じていた。 、が納得 な小説を書きたい 予想以上に作品は 載 できるように せ た林 真 理子 と思 よく 修 思 辞

ころに作者の視点がある一方、林真理子は 読 ませる。 「とらわ . う。 エッセイと作品が対応しているところも肯ける。」 『文学作品を教養にしてはいけない』とい ない 心 得た目くば 多 面 的な考察と文章の軽妙さで りで、 略) 今回 『反面文学』 は 小 説 面 、うと でも 白

> 値を認っ とい 林真理子の作品 は 林真理子の作品をとりあげ は 反 るところ しなかった」 1 映 ゖ う言葉を使い \mathcal{O} てい な めているように、 か 論 . る。 5 は 作者が という。 始まる。 向田邦子の作品に、「ある種」 その一 の魅力を作者は語っている。「反面文学」 ながら。 捨 その教 方で彼り こてら そこに 向田ほど好きでないと言いつつ、 ている。 れ 養 女 日 た E は文学作品 頃 小 は 説 0 彼 しかし「文学を書き ならな 女 を 0 何 読 ₩ い作家とし を教養に の文学的 書 t 家ぶ 拾 0 L ŋ てく Ē 7

究や評 ん立派 L 域 ンタテインメント系 L ならない。 っていた純文学か大衆文学かとい てい ボ 般的な傾向 の作家であ かし文学青 Ì た 論 な ダレスの現 の対 文学であ 大衆文学という言葉も だっ 象として難しく論じられ 年達が志望し 伊藤 代文学では、 る。 \mathcal{O} ものではな ただ多く さんはその 向田 語 邦子や林真理子 る文学というの 当 Ò 領域 人に V, ほ · う垣 時 とんど使 伊 愛読 ることの というの で小 根 藤 は 香 ž が作 Ξ 説を書こうと あ れ は わ ま W 少な ŋ 品 る が ま れ が こだわ が、 ず、 間 は な 題 む 時 11 領 ろ 研 \mathcal{O} 工

を書きたいというのは勇気の 11 で てい 「文学作 、 る。 れば 品 読 者と けな を教養としては L 1 て言う · と 私 は 思 \mathcal{O} いることだ。 は っ V てい け 簡 ない。 単 、 る _ だが と伊藤・ それ 「おげ そう は 'n さ 娯 たきな女 Ñ う 楽 作 は 作 品

達 はそういう覚悟 0 中 -で書 か れ た作 品 ということに な

ける 伊 ので今後が 林 心心 :真理子が 配になる」 小 とも書い 説家としての下 次 $\widehat{\mathcal{O}}$ 地 を踏 ように W で

文というものは書けないような気がする 体 の嗜好が 辺 自 分の 語 中ででき上 るように様 一がっ 々な人間 てい る人間 の文体、 でなけ 作家 ń 0 ば 文

たも として書き記 を若い頃から数多く読み、 さんはよく心得ていた。 決して安易なレベルのものでは 私 教養ではなく娯楽でなければ の読 ての下地を踏む」ということであった。 のの表現であり、 後 書 0 評 フー 論 してきたことか、 トから―」 「マイナー それがたぶん彼女のいう「小 彼女がいかに多方面 その内容や感想を読 にはその辺の事情がよくうか の誇り・ 評 ないということを伊 いけないという文学が 論 アマチュアの遠 は その読 み重ね 彼女の の文学作 書 説 吠え 市 5 ĺ 藤 家 民 n 1 香

な 0 時女学生 感想が 一の読 や作 並 とら んで書かれ 純 み物とされ 文学 わ \mathcal{O} れな 名 作 が 品 れている。 いくつも カン 知的 6 たコバルトシリー ノ 1好奇心、 *、*ンフィ あ 正 直選者 げら ークシ ħ 「であ 間 てい 彐 氏や物語 ズ (までの) た。 る私 そ ここに 0 へ の L 知 作 7 興 当 6 品

がわれ

る

味 が満 5 あ Š てい

方こ 周 期 の年も伊藤さん は評論とともに小 説 「サー

チラ

で要約、 が、 している。「サーチライト周期」 品を入選とした。この年は村岡圭子さんの小説も かちのある町」を書いた森愛さんが久しぶりに書い は作風は異なるが、それ以前最も印象に残る小説 その頃すでに作家として活動していた今井泉さんなどと 選から外した。この年は、伊藤さんや、数年前に入選し、 白さに乏しく、作者の個人的情感らしいものが前に出 という評言もあるが、「おげんきな女達」に比べ造型の面 人公が、 うな場面があ 「人生に 「おげんきな女達」 している。「ときどきエッセイ風になる筆の運び」 来し方を顧み、いまを考える作品 おけるサーチライトが る。 そんな思いで中年にさしか を書いた作者の は入賞レ 自分 E ベル ŧ ル 回 」と私 ではあった かった女主 ってくるよ 選を外 は 「さい た作

書 前記最後の評論の て休筆を宣言 Ĺ 末尾 てい る。 で伊 藤さんは次 のようなことを

の中に物語を持

ってい

な

者は、文章

Ò

テクニ

ツ

V

気持ちもあった。

小 もまた禁文 クがどんなにすぐれていても作家には 説が苦痛 にな 0 った頃 期を迎えていることを意識 私は迷わず禁文する。 V なり得な てい る。 切 私

であろう』と問いかける声がこだまのように響くことに からフツフツと、『文学とは何んであろう、小説とは で一度お別れさせていただく。(略)しかし、 を読まず、一切の文字も書かない。 『市民文芸』の投稿者が常連化する傾向を苦慮し、ここ あえてそうする。 私の 胸 何 \mathcal{O}

だろう。

相変らず耳をすましている私は、

いったい何者であるの

 \Box が N 中

投稿 さん 館は、 はそういう効用 香さんが選んだのは市民文芸だった。さきに書い き手がその選択肢に恵まれた時代であ 在を必要とした作者であった。みて来たように当 理由であることがわか いるが、 していた。 作者は市民 文学学校、 長い さいかちのある町」も、 かかけて完結したものだった。 目で見ればそれが市民 .文芸の投稿者が常連化する傾向を苦慮 があることを、 文学伝習所 る。 伊藤香さん自 たくさんの同 伊藤香さんはたぶん意識 市民文芸に連作 文芸 った。 身が のひとつの しかし 市民 人誌など書 最 ŧ た森愛 文芸に どし その 時 伊 \dot{o} 存 L 藤 7 函 存 在 7

こらで一服、 くことへの欲求を筆力十分に ずれに を市民文芸に寄せた。 会うことは L Š という思いは私にも自然のことのように思 足が 選者 け 6年にわ $\bar{\mathcal{O}}$ 私 あふれる文学への にも 表現してきた。こういう作 たり彼女 異例 のことだった。 は 評 湛い 論 5 . ك 書 説

0

た わ のである。 れ た。 市民文芸という舞 台 は、 それ な りの 役割

ず耳をすましている私」がいると書いている。書きたい かと問 で「私の胸の中でフツフツと」、文学とは かあ を求めているように思われた。 ずの小説はやっと2篇、 L った。 カン し彼 いかける声が「こだまのように響くことに相 彼女の 女 \hat{o} いう禁文というの 筆の勢いを考えるとそれは 公けにしたばかりである。 はどうか、 彼女自身が 何 カン 小 まだまだ出 説 び くう思 とは 0 三変ら 文章 何

は

文芸詩 けて貰 い記憶 った。 えた。 ご近所で個人的 ったので、 通じているつもりだった。ただ当時は授賞式に出 のキャッチボ 知っていた。 意思を聞 当時私達が拠っていた同人誌「表現」に誘うことを考 伊藤さんが文学集会的なものに拒否感があるの 文学的 え の中で小説の書き方に迷っている気持 の選者でもある鷲谷峰雄さんが、伊藤香さん て 鷲谷さん 面識の機会がなかった。 。しかし5年間作者と選者という立場で批 て貰い、 る。 ?雑談で和やかにすごしたが ールをしてきたので、彼女の立ち位置に な知り合いだった。鷲谷さんから声 日を置い の 二 伊藤さん 階の て鷲谷 書 から応諾とお礼 斎で初めて伊 Tさん 表 から 現」 、さだか の 藤さん , を 聞 仲 蕳 7 で市 たこ をか とは でな 加入 な か は 評

0 た の木 卞 順 お互いに見知らぬ さんや、 表 現に その は 市 他人ではなかった。 後 民 0 文芸 選者 0 にであ 選者でタウン る対 馬

明

家宇 行がとま 表 集 江佐 21 人の なさんは 私にとっても不本意だったが、 真理への転機を十分にうかがわせるものであ ってしまう。 21号から参加したが 22号に書いた伊藤香さんの作品 市民文芸最終投稿 せっかく伊藤さんを誘 0 表現」は次の22号で 翌年、平成 しか は、この後の作 しこの 元年 なが -発行 表 刊 0 \mathcal{O}

まりよ が 窺わせるも は なか VI 江 が、 市 戸下 [が 前 った。 民文芸 それ 町 後 悪いものではなかった。 \vec{O} するが、「 のは全くなかった。「 二重 0 が 時 代 彼女の作品歴の中で時代 時代小説 一の意味 小 「表現」 対説だった。 で驚 だったことに 22号に伊藤香さんが たが 表現」同 11 ま詳 作 何 L 小説 品 ょ 人の作風とも縁 とし ŋ 触 É れ への嗜好 る余 書 7 驚か は い ž まと た ば を n \mathcal{O}

は か 現 し作者は 1 21 号 中 及 り―」ですでにその気持ちを書いて 不意打ちをしたわけでは Ď ばば デ ´ ビュ なかったのである。 1 てい 「グラ ッ な 1 伊藤さんは、こ ア 1 伊 ス に 藤 ながん 罅を

「近頃、文学界は江戸ブームである。多分、その理由

そうな 代物を読んですごした。 地 11 私 雑 は (上・下で一万円もした。 は吉 は江戸に飛ぶ。 \mathcal{O} に 現 な 部分をロ 代 一本ばな 0 1) 小 たの 過 説 ぎ 0 7 なを読り カン 中] で 明 L ソンで拡大したものと、 (略) /この夏、 ま 描 確 いったかり んでも仕方が に カン 私 れ は る人 いちまんえんも)を片手に 指 らだろう。 間 摘 は 達 ない。 江戸の が できない 荒 それ 廃 切絵図 時代考証 0 は だが、 きお 折 深川 V) つから 辞 今の 典 思 \mathcal{O}

した、 江 深 戸 |||博子 ĴΪ アルキ帖」 略 戸の時代小説を書くことを予告していたのだ。 の切絵図と一万円もする時代 したところでは、 の時代 というの 小説 の魅力を語る。そしてこの夏は である。 の名が多く書か 今まで 伊藤さん 0 読 は /考証 れ、 書ノ 次号に、 杉浦 ートに 辞典を片手に H 満を 向 は 拡大 子 な 0 けずご ĺ Ē

考委員 に吉川 る宇江 深川 Ш 佐真理として世に を舞台に 表 (芸者お文を主人公とする人情 英治 Œ 現 作 ぼ 新 全員 が した時代小説で 止 人賞を受賞 0 中 |まって3年後伊藤さんは 出た。 で代表的 致でオー この作 $\widehat{\mathcal{O}}$ あ · ル 読 深 な Ĵij 気 品 物 恋物 捕物 シリー 新人賞を受賞 は廻り髪結い伊三 語 小説とし ズとなる。 幻 0 声 むろん深 て、 さら 次 数あ 宇 で 選 江

求めて、 読書ノート。 経路を辿ってみてあらためて思い返している。 れたものであることを、 富岡多恵子、 W.アイリッシュ、 いま、 曲りなりにも彼女の作品 向田邦子、

とを考えずにはいられない。 ての下地」 ントへ、現代から江戸へ、伊藤香さんは自己の着地点を 評論という「回り道」をしながら、「小説家とし を周到に踏んで、作家宇江佐真理に到ったこ 詩から小説へ、純文学からエンタテインメ 林真理子、

追悼・宇江佐真理さん

市民文芸第二十六集 小説部門 入選

おげんきな女達

られている。 保育園の遊戯室には螢光灯の光と、さんざめく人の声があ

窓の外の景色は何も見えず、かわりに愛想のないオカッパ頭窓の外の景色は何も見えず、かわりに愛想の外に目を移した。窓の外にはまだ薄汚れた雪の残骸があるはずである。しかとれはインク色の闇が綺麗にカバーしている。 しかしそれはインク色の闇が綺麗にカバーしている。 しかと保母の謝恩会が開かれていた。 不後八時の時間帯は普段は終夜灯だけになるのだが、その

「飲んでる?」

の自分を認めた。(いやだな。)と言うように広恵は目をそら

カラ揚げや刺身が並んでいる。の上には真美達役員が手作りしたイカの酢味噌和えやトリの一戸崎真美が広恵のグラスにビールをつぎ足した。テーブル

広恵はイカの足を指先で口に運び、指をしゃぶっている真「今日、少し泣き過ぎて頭がボンヤリしているの。」

「アタシも。」

真美はオシボリで指をぬぐう。そのしぐさが女っぽいと広

恵は思う。

ない。ゲイの少年のようだと時々思う。は小柄な身体つきなので、なまめかしさやいやらしさは感じそのしっとりと赤いルージュの口びるが笑っているが、真美

自宅で化粧品屋を営む真美は少し派手な化粧をしている。

午前中は卒園式だった。

たかが保育園の卒業ぐらいでどうしてあれほど涙が出たの

う。卒業式や結婚式で親達が流す涙の理由を広恵は初めて知ひと区切りついた安堵の気持ちが広恵達を泣かせたのだろ子の圭太を一人前にするには、まだまだこれからである。か不思議だった。広恵は自分で自分の感情を持て余した。息

を流したのだと。

そうだ、親は自分に対するほめ言葉のかわりにひたすら涙

ったようだった。

のマニキュアをしていた。少し太り気味の広恵は女学生のよ薄茶色のブラウスを着ている。耳のピアスの真珠と同じ光沢真美は白いスラックスの上に大きく斜めにリボンのついた

が少しうらやましかった。うに野暮な紺のブレザー・スーツで、真美のアカ抜けた感じ

宴会の始まりである。
役員の男性がカラオケの機械をテーブルの前に運んで来た。

をバサリとたらしているだけだった。
お決まりの演歌を歌う者が五、六人続いた後で、真美の隣お決まりの演歌を歌う者が五、六人続いた後で、真美の隣お決まりの演歌を歌う者が五、六人続いた後で、真美の隣お決まりの演歌を歌う者が五、六人続いた後で、真美の隣

しニヒルな歌をあだっぽく歌った。た。すごくうまいのである。『酔っぱらっちゃった』という少た。すごくうまいのである。『酔っぱらっちゃった』という少アップテンポのイントロがノリを感じる。歌い出して驚い

「大島さん、飲んで。」

スリッパは、はいていた。で広恵はブレザーの上衣を脱いで白のブラウス姿になった。グの足を見せて広恵の腕を引っ張った。真美の気持ちをくん真美は、つっかけていたスリッパを放り出し、ストッキン「踊ろう、大島さん。」

真知子の歌が終わると大きな拍手が沸いた。真知子はうれにつられて二人、三人と中央に出て来る者が続いた。回りの母親達は少し驚いたようだが笑って見ている。真美られていた縄をいきおいよく振りほどくような激しさだった。真美は真知子の歌に合わせて夢中で踊った。まるで、しば

しそうに笑った。

、Mとないでで、 てテカテカと光っている。大きな動作で煙草に火をつけ、深てテカテカと光っている。大きな動作で煙草に火をつけ、深重美は額にうっすら汗をかいて、それが電気の光に反射し

かりこの三年間つき合って来た。 いうこの三年間つき合って来た。 いうこがして、深い接触は避けていた。もっぱら真美とばない予感がして、深い接触は避けていた。広恵は性格の合わらしい。いかにも勝気そうに見えるので、広恵は性格の合わらしい。いかにも勝気そうに見えるので、広恵は性格の合わらしい。いかにも勝気を迫いためよ。」

グラスを持ち上げていた。いける口ではない広恵が思わず半分ほどビールが入っているけられて少し驚いたのとそのアルトの声が圧倒的で、あまり珍しくみどりがビールのびんを広恵にかたむけた。声をか珍しくみどりがビールのびんを広恵にかたむけた。声をか

ように中央に出て行った。またアップテンポの曲が流れた。真美はほとんど飛び出す子供がそばにいない。身軽な気分だった。子供がそばにいない。身軽な気分だった。長いこと育児に幽閉された生活をしいられていた女達が、

のを広恵は認めた。
日尻にクッキリとシワができている

の八代がお開きの合図をした。まだ九時半だった。 ささか、しっちゃか、めっちゃかの様を呈した頃、園長代理 やがる妻がそれを拒み、小さな夫婦ゲンカまで起きて宴はい る者もいた。夫婦連れで来ていた夫にダンスを強要され、い 保母達の余興が間に入り、それからはチーク・ダンスを踊

飲み足りず、騒ぎ足りない広恵達は真美の強いすすめで、

真美の家で二次会を開くことにした。

だ。手がつけられていないオールドのびんとビールを二、三 本もらって広恵は手さげ袋の中に入れた。真美の家にあまり 広恵とみどりはテーブルに残っている料理をラップに包ん

迷惑をかけたくないという気持ちがあった。

いがすっかり醒めているような気がした。そのまま帰ってし 保母達と後片付けをすませ、別れのあいさつをすると、酔

まっても、それでもいいような気持ちでいた時

「行きましょう?」

のだ。 と電機屋の林律子がいた。真美は先に帰って準備をしている みどりが当然のように広恵をうながした。後ろには真知子

に不思議に寒さは感じなかった。少し前も行ったのに、また トイレに行きたかった。 外に出ると星が見事だった。気温は下がっているはずなの

真美の家と店舗がある。 連れだって歩く。保育園から海岸よりに十分位歩いた所に

> ドアがあり、その後ろにある窓から明かりが見えた。 消され、シャッターが閉められている。横に小さな出入口の チャイムを鳴らすと真美の笑った顔が現れた。白い布がか 『メタモルフォゼ・戸崎』の看板が上がっていた。照明は

けられているショー・ケースの間を通って茶の間へ通じるド

アから中へ入った。

それ以外はいっさいの生活臭のない家だった。具体的に言っ どっしりとして深いレノマのソファが目に入った。しかし、 床、緑の観葉植物、大画面のテレビとコンパクトなステレオ、 せられている写真をみているような気がした。木目の美しい てティッシュの箱すら見えないのである。 一歩足を踏み入れて、広恵はどこかのインテリア雑誌に載

えなかった。 スと氷の用意をしている。こちら側からはキッチンの中は見 真美は広恵等をソファにうながして、キッチンの中でグラ

なにスッキリするのね。」 律子はため息まじりに言った。

「結局、全部いらないものを目かくししているから、こん

「クロワッサンの世界ね。」

広恵は雑誌の名前をつぶやいた。

「さあ、飲むぞ。」

ね、素敵な家、と口々にほめると真美は眉間に少しシワを寄 真美は、グラスを運んで来て、テーブルに並べた。いいわ

ど、これを維持するのがなかなか大変なの。子供達も神経質 になるし、昔のお家の方が良かったなんて言うんだもの。」 そこに真美の連れ合いがパジャマ姿で現れた。二人の男の 「ぜえんぶ借金なの。自分の好みで作ったのはいいんだけ

「いやだカズオさん、何んか着てよ。」

真美があわてて言った。

こうよ。 「いいじゃない、私達だったら気にしない。誰でも家では

広恵は言った。カズオさんは照れたように笑った。日に焼

ず、真美の横で水割りのグラスを口に運ぶだけだった。もっ ぱら広恵達のおしゃべりの聞き役に回っている。 に優しい目をしている。「カズオさん」と恋人みたいに呼んで けた顔に申し訳ないようなひげをはやしている。ヤギのよう いる真美が可愛らしく思えた。カズオさんはあまりしゃべら

イソなんて肩を抱いてやっている。真知子がポロポロ泣き出 り出したので広恵はせつなくなった。真美はカワイソ、カワ した。カズオさんは相変わらず無表情だ。 一番酔っていた真知子が離婚したいきさつをポツポツと語

律子は言った。

「不完全燃焼みたいな気分。」

ーブルの上の料理が白けた表情をしていた。 広恵もみどりも同時につぶやいた。もう飲めなかった。

う気持ちがあった。けれど、何をしたらどんなことをしたら よいのか広恵はわからなくて途方にくれていた。 んなことではなくて、もっと身体を動かして燃焼したいとい もっと何かで発散したいと広恵は思った。セックスとかそ

ーラス。 学級の案内が届いた。卓球、バドミントン、書道、料理、コ かけて、女達はまことに忙しい変身をしいられたのである。 セル姿にうっとりしなければならなかった。三月から四月に それぞれの子供達が入学して一息ついた頃、学校から社会 卒園式で流した涙もかわかぬ内に、女達は我が子のランド

チャーセンターに通ったって五千円や一万円はかかる時代で 社会学級では月五百円から千円の出費で済む。どこかのカル そろそろ何かしてもいいのではないかという気持ちがあった。 足を感じていた。子供が小さかったので何もできなかったが、 広恵は何かスポーツしたいと思った。結婚してから運動不

広恵は真美に誘いの電話を入れた。真美はすぐに乗って来

んに電話してみる。大島さんは林さんに電話して。」 「ショウちゃんのお母さん(みどりのこと)や真知子ちゃ

「うん、そうする。」

あの夜集った四人の女達の意見はすぐにまとまった。

こなっと。 新人は広恵達四人の他に三人いて、一挙に二十二人の大世帯 T小学校バドミントン部はOBを含めて十五人。その年の

ある。
広恵達がターゲットに定めたのはバドミントンだったので

置いていたのだ。 はいかにも鮮やかだった。その雅代がバドミントン部に籍をの時に議長をつとめた岩田雅代だった。理路整然とした弁舌の時に議して人の女性に注目していた。第一回のPTAの総会

部長の宮田順子はモデルがするようなくどい化粧をしてい月はまだ素足を見せるには寒過ぎるような気候だった。胸を突き出すようにラケットを振っていた。春とはいえ、四人、真白な短パン姿になり、形の良い足を見せ、張り切った、三ーティングの後の練習でジャージィ姿の女達の中で只一

何年も前にスーパーで買った九八〇円也のラケットが使い

| 広恵りたまたLをしていた。俗品であるまずがない。パーの出費があった。広恵はおしいとは思わなかった。| ウェアー万五千円、ポロシャツと短パン。すぐに三万円ほど| ラケットが一万円、シューズが四千五百円、トレーニング・ものにならないことがすぐにわかった。

の動きは素晴らしかった。

女達は少しばかり無理をしているようだったがバドミント

女達は少しばかり無理をしているようだったがバドミント

ョート・サービスは広恵が思うずっと前に石のようにコトンけぞる広恵はそのシャトル(羽)が受けられない。反対にシのではないかと思われる堂々とした体格の山田多喜子がいた。の広恵と律子がペアを組んだ向う側に雅代と八十キロはある広恵と律子がペアを組んだ向う側に雅代と八十キロはある一ヶ月ほどたつと、広恵達と先輩とのミニ試合があった。

ドで床に鋭く突き刺さるように落ちた。 の身体を使ったすごいスマッシュが時速二五〇キロのスピー と落ちた。それも受けられない。かろうじて返しても多喜子

相手にならなかった。紅潮した広恵に雅代は「大きいサー

勝負がついた。十分、いや五分も時間はかからなかった。 も受け止めることはかなわなかった。十五対○であっさりと ブよ。」「今度は小さいの。」と手の内を教えてくれた。 それで

それを表情に出さないのは広恵がすでに十代の小娘ではなか たようだった。強くなりたい、勝ちたいと思った。しかし、 湧き上がった。広恵の中で眠っていた闘争心がその時目覚め ったからだ。九月には全市の小学校のバドミントン部との交 雅代は婉然と笑っていた。哀しいような憎いような感情が

今年の新人はすごい、熱心だと言われるようになった。部

歓会がある。 それまでは…。

長の宮田も広恵達に一目置くようになった。

八月に入っていた。夏休み中の体育館をいっぱいに使って

早朝練習が続けられた。

家から五分の所にある。 った魔法びんを持って自転車に飛び乗る。T小学校は広恵の ポロシャツと短パン姿になる。圭太はとっくに遊びに行って いない。昼食までは帰って来ないのだ。ラケットと麦茶の入 亭主を送り出し、朝食の後片付けと洗濯を済ませると白い

> シャトルを打った。 ランニングと準備運動を済ませると、ただただひたすらに

比ではない。 だろうか。体型はずっと悪くなっているし、身体のバネもな ながら思う。どこかで異性の目を常に意識していたせいなの どうしてこれほどスポーツに夢中になれなかったのかと今更 る。しかも飽きさせない不思議な魅力があった。学生時代に バドミントンはサッカーに匹敵するほど激しいスポーツであ くなっている。なのにフツフツと沸き上がる情熱はかつての 広恵は就寝前にはバドミントンの手引書を熱心に読んだ。 ハイ・クリア、ドライブ、ドロップ、ヘアピン。

じようなものだった。 て何年になるだろう。広恵にとって夫の達彦は今や戦友と同 夫の存在は足かせにはならない。夫に男を意識しなくなっ

とした枯葉のような音しか出ないが、本格的になると手を打 シャトルがラケットに当たる時、ガットとこすれ合うカサッ 強く、ハイ・クリアを飛ばす音に迫力が出て来た。初心者は ったような固い音が出るのだ。 真美は小柄だったがバスケットをしていたせいで腕の力が

にも二十九才にも、とても見えなかった。 真美の細く形の良い足は伸びやかで二人の子供がいるよう

気な性分らしく熱心だった。打ち勝った時は、いかにもほこ みどりはスポーツとは無縁で学生時代をすごして来たが勝

らし気だったし反対にミスをすると必要以上に落胆した。

すると小太りの体型は四キロの肉がこそげ落ちて引き締まっ一番若い真知子の進歩はめざましかった。ものの二ヶ月も

うな顔立ちなので、真美より大人びて見えた。子は真美と同い年だったが、日舞でもしている方が似合いそ格で、スマッシュを決める形がすでにでき上がっていた。律高校時代、只一人のバドミントン経験者の律子はやはり別

スを出せることと変形のドロップが時々、決め技になった。広恵は身体の動きがもう一つにぶかったが安定したサービ

北海道の夏とは言え、準備運動をしただけで滝のような汗ンを出せることと変形のトロップカ眼々、沙はおになった

が胸の谷間を伝わった。

浜風が心良かった。

昼頃まで二時間ほど練習し、帰宅してシャワーを浴びる。

とがあったが、広恵は充実している自分を感じた。 広恵の活力は涌き上がった。 足首の筋肉が少し痛くなるこ

囚恵は学校行事の折に雅代との接触が少しずつ増えていた。 バドミントンと同時に薦められてPTAの役員もしている

方の学校にも出入りしている忙しい身だった。正確な年齢は心人物だった。教師達とも懇意にしているし、中学生の娘の心人物だった。教師達とも懇意にしているし、中学生の娘のいかという警戒心が常にあった。雅代はいつもグループの中いかという警戒心が常にあった。雅代はいるしずつ増えていた。広恵は学校行事の折に雅代との接触が少しずつ増えていた。

た。人の意見はていねいに聞いたが、少し高い所で自分の意おかしいことやおもしろいことには声高にオーバーに笑っ知らなかったが四十は過ぎているはずであった。

かなわないなァと広恵は思う。見、決してひるまない意見を持っていた。

分ほどの短い時間しかない時でも。と練習日が重なっても必ず雅代は練習に現れた。たとえ三十と練習日が重なっても必ず雅代は練習に現れた。たとえ三十そういう席でバドミントンの話はしたことはないが、会合

いたのだと思う。決して美人とは言い難いが良い顔をしていあの自信に満ちた顔、その行動力と説得力。そんな女性が

広恵はすべてに自信のなかった、かつての自分を振り返っると広恵は思っていた。

ある。 ていた。そして広恵も少しづつ、少しづつ変わって行くので

を放り上げるだけで良かったのである。
真美の若さに嫉妬することもない。高い、より高いサービス一個のスピードのついたシャトルを落とすだけで気が済んだ。みどりの断定的な強い口調にも平気になった。彼女の前に

広恵は軽く頭を下げた。「どうも。」「おなた、うまくなったわ。」

「皆もすごいわ。今年の新人はなかなかね。」

ナーと組んで新旧入り混じってコートに入る。 交歓会が近づくと、試合形式の練習が多くなった。パート

めて雅代と対戦してから、すでに四ヶ月がたっていた。 広恵は久しぶりに雅代のチームと当たることになった。 怖い、怖い、と律子と冗談を言いながらコートに立った。 初

てスマッシュで打ち込んだ。それは多喜子の脇の下を通り抜 クリアで返す。多喜子の甘い返球を律子が身体のバネを使っ やはり雅代の深く鋭いサーブが来た。少し後ろに下がり、

けた。ゆっくりとシャトルをひろう多喜子の眼鏡が少し光つ

にらんだ。 空振りしてしまった。腰に手を置いた雅代が無言で多喜子を 広恵はロング・サービスを放った。多喜子は偶然にそれを

るようにすばやく反撃された。 続く雅代に放ったショート・サービスはハエたたきでもす

雅代がそれをひろうには、あと半歩ほど足りなかった。 た。広恵のシャトルはドロップになって雅代の手前に落ちた。 ランスが少し崩れたが思いっきり手を伸ばし手首を強く返し が掬い上げるようにして広恵の後方に返球された。 身体のバ した顔色になった。それから手ごたえの違う反撃が始まった。 続けて三点を広恵達が先取した時、さすがに雅代はムッと セカンド・サーバーの律子のショート・サービスは多喜子

> に釘づけになった。 腕をつっついた。そこにいた四人ほどが広恵と雅代のコート が律子の顔めがけて打たれた。律子の額が赤くなった。 そうなるとやはりキャリアの差が出た。多喜子のスマッシュ 真美は煙草に火をつけようとしてその手を止め、みどりの

どりも目でうなづき合うだけで何も言わなかった。 広恵は少し足がふるえていた。律子は無言だった。真美もみ 宮田の皮肉な声に雅代と多喜子は聞こえないふりをした。 結局、十五対五と、広恵達は五点を取ったに過ぎなかった。 「あんなに本気で打つことないのに。

心である。 (あんた達新人なんて、およびじゃないのョ。)

広恵は雅代の正体を見たと思った。あれだ、あれこそが本

そんな声が聞こえるようだった。 一週間後は交歓会だった。

主婦とは思えない伸びやかな足をしている。学生と違うのは がら、その集団はフラミンゴの群れを見るようだった。皆、 れる。半袖のポロシャツに短パンやスコート姿である。さな ドミントンの正式なユニフォームはあくまでも白が基調とさ 化粧をして、ピアスや首に細いネックレスをしている者が多 ンに所属している三〇〇人ほどが市民体育館に集まった。バ H市の社会学級生は四千人に登ると聞く。 内、バドミント

今年、T小学校チームは六人一組で三チームが出場した。流行の細かいカールをした髪を波立たせている者もいた。いことだろう。それが彼女等の唯一の特権とでも言いたげに、

新人はすでに会場のムードに飲まれて胸をドキドキさせてい今年、T小学校チームは六人一組で三チームが出場した。

「上がってる?」

真美は広恵の胸のあたりに掌を当てた。

「そうでもない。」

「年の功かな。」

「何ョ!」

「うそだって。」

品を使っているのは、さすがに商売柄だった。口紅はさすがにブルーではなかったが、汗に強い専門の化粧ている。その色と同じピアス、マニキュアまでブルーだった。真美の白い歯が笑った。薄いブルーのヘアー・バンドをし

その朝の四時まで手製のスコートを作っていて、寝不足だと真知子は吐き気がするなどと言い出す始末である。彼女は育館と異なり、広恵達を落ち着かなくさせていた。この明かった工小学校の体育館は床もしっとりと艶があり、目に反射しない天井の

コートは八面張られていた。

「岩田さん達の試合が始まるから応援に行きましょう?」「岩田さん達の試合が始まるから応援に行きましょうので、ゾロゾロと体育館の一番端のコートみどりが言ったので、ゾロゾロと体育館の一番端のコートを広恵は決めていた。

ともと多喜子は身体が動くほうではないので、決定打を打たた。多喜子のあのスマッシュでさえ、安々と返球された。もたK小学校のレベルが上だったのだ。二人のミスが目につい雅代と多喜子が硬くなっているとは思えなかった。対戦し

ほとんど動かないのも同然だった。十五対七で雅代のチームほとんど動かないのも同然だった。十五対七で雅代のチーム、彼女等に比べたら雅代の動きは鈍く、多喜子にいたっては、

は破れた。

によって最強のC小学校と当ってしまったので、試合の形に新人達の第一試合と第二試合はお話にならなかった。より差で破れた。広恵達は実力の違いにため息をついた。続く宮田のチームも破れ、最年長の小坂と原のチームも大

も取らなかったので試合後は腰がのけぞっている感覚がいつ開き直ってサバサバした気分だった。広恵は前傾姿勢を一度を打つだけでこっちは勝手にミスをして得点を与えていた。すらならなかった。相手側がコーナーをついてハイ・クリア

M小学校の新人チームということで、ようやくふさわしい対昼食の後の第三試合は時間を置いて三時頃から始まった。

までも残った。

戦相手のような気がした。

持ちが広恵にも律子にもあった。 特ちが広恵にも律子にもあった。 という気に違うのではないかと広恵は思い出した。どうせ、という気に違うのではないかと広恵は思い出した。どうせ、という気に違うのではないかとは関して八点まで得点できた。しかし、そどりは硬い身体がほぐれず、いつもしないミスが続いた。ペリカで勝負を渡してしまった。み真美のチームはあと一歩の所で勝負を渡してしまった。み

相手側のコートにたたき込んだ。

相手側のコートにたたき込んだ。

本法を取っただけでチェンジ・コートした時も、まさか勝三点を取っただけでチェンジ・コートをすることになっていた。

本法取するとチェンジ・コートをすることになっていた。

本法取するとが、たいれてしまうので、徹底してロング・サービンは打ちたたかれてしまうので、徹底してロング・サービンは打ちたたかれてしまうので、徹底してロング・サービスでコーナーをついた。

本語のカートにたかが八点

ペースが広恵達に戻っていた。相手側が十二点を取った所で

体勢が崩れても、とにかく返球しようと努力した。

試合の

った。

律子も少しあせった。
マッチ・ポイントはなかなか決め技にならなくて、広恵もコート内を小踊りした。そのジェスチャーに皆が笑った。広恵達は逆転した。広恵は思わず大きくVサインを出して、

る律子の背に広恵は言った。ようやくサーブ権が回って来た時、サービスを出そうとす

「勝つわョ。」

手側のコートに進んで行った。
スピードを失なったシャトルはフニャフニャとたよりなく相切り振り込んだつもりが、ラケットの縁に当ってしまった。律子のシャトルの返球が広恵に大きくやって来た。思いっ振り向いて広恵の顔を見た律子の顔が笑っていた。

(打たれる!)

ある。

大手を握り合い、肩を抱き合った。決ったのだ、勝ったのでく手を握り合い、肩を抱き合った。決ったのだ、勝ったので切ったラケットに乗り切らずそのまま床に落ちた。切ったラケットに乗り切らずそのます床に落ちた。

みどりと真知子は目をぬぐっていた。広恵は最高の気分だである。
T小学校は昔から応援だけは華やかで、隣りのコートの審

「初めての一勝ネ。」

宮田は優しい表情で労をねぎらってくれた。

はあるらしいが、今は独身だった。 十を一つ二つ過ぎたくらいの年齢だった。 過去に結婚の経験 雅代の次女は五年生だった。担任は羽鳥一郎と言って、五

えず、労務者のようだと陰口をたたく者もいた。 紺色のズボンをはいて、たいていは裸足に茶色のサンダルを つっかけている。その端正な顔を除けば、とても教師には見 アパートで一人暮らしをしている。いつも煮しめたような

ろうか。

羽鳥は生徒達に人気があった。羽鳥のクラスの子供達は生

支度を手伝っていた。 に二、三人の子供達がいて、女の子はそうじをしたり食事の き生きしていると評判だった。日曜日も彼のアパートには常

手に解釈していた。クラス替えには問題児を羽鳥に押しつけ 少なくなかったが、所詮、一人身の気軽さからくるのだと勝 他の教師達の中には羽鳥のやり方に反発を感じている者も

「こういう生徒を教育するのは、あなたの趣味じゃないで

たがった。

羽鳥は心の中で舌打ちしながらも、むしろそういう生徒を

羽鳥のクラスに木下という男の子がいた。母子家庭で、母

と回りほど年が違う。 親は病院の賄い婦をしている。三十七、八だから羽鳥とはひ

た。クラブ活動も熱心になったという話も聞いた。 サが立った。木下君の成績がこの所、どんどん良くなってい 最近羽鳥は木下君の家に頻繁に出入りしているというウワ

て、木下君がすることになったと決ってからではなかっただ 年生の劇で、ナレーターの役を朗読の上手な雅代の娘に代っ 雅代が羽鳥に対して口火を切ったのは、多分、学芸会の五

代は気にしている様子もない。羽鳥がちょっと席をはずして うな顔をしている。非難めいた目つきで雅代を見るのだが雅 の尾崎に羽鳥のことを言った。 尾崎は苦虫をかみつぶしたよ バザーが終って、その反省会の席で、雅代はとうとう教頭

「そうですかね。」 「それは少し教師としておかしいんじゃないでしょうか。」 いる時だった。

は、この頃先生が冷たいと言って泣くんですから…。」 羽鳥を買っている尾崎は歯切れの悪い返答をしている。 「子供達だって、うすうす感じているんですョ。うちの娘

口飲んだビールの味がやけに苦く感じられた。そこへ羽鳥 広恵はみどりと顔を見合わせた。気まずい空気が流れた。 尾崎は腕組みをして考え込んでいるふうである。

であるのを広恵は感じた。羽鳥は敏感に悟ったらしい。まっ鑑の方をチラッと見た。取りつくろうための意味のない動作羽鳥は黒縁の眼鏡を左手の中指で押し上げ、図書室の中の図が戻ってきた。居合せた五、六十人の目が一斉に羽鳥を見た。

「岩田さん、何かおっしゃりたいことがありましたら、どすぐに雅代を見て、その良く響く声で言った。

うぞ直接、僕におっしゃって下さい。」

るいです。ただ子供達のことを考えて下さいと申してはないのですョ。ただ子供達のことを考えて下さいと申して「私は別に羽鳥先生の私生活のことを、とやかく言いたく羽鳥がしゃべる度に頬に深いたてのシワが寄った。

「そうでしょうか。一人の子供にことさら御熱心じゃない「僕はいつも子供のことを第一に考えているつもりです。」

ですか。」

「木下のことを言っているのですね。」興奮した雅代はいつもとは違う皮肉な口調になっていた。

·············

言葉を続けた。 一挙一動を息をひそめて見ていた。羽鳥は飛代は黙った。図書室の中は水を打ったように静かになっ

岩田さん、あなた想像できますか。」 るんです。四年生の時です。その時の彼が受けたショックを「木下は父親が交通事故に会ったのを目の前で直接見てい

<u>...</u>

「それから自閉症にかかり、言葉をしゃべらなくなったのです。無理にしゃべらせようとすると吐きました。母親からものの、今度はどもる癖が出て来たのです。僕はさらにそのものの、今度はどもる癖が出て来たのです。僕はさらにその方面の指導を続けているわけです。その効果がようやく出て来ているんです。思い切って今度の劇のナレーターにさせよっと決心したのです。冒険なんですよ。失敗したら後が怖い。うと決心したのです。冒険なんですよ。失敗したら後が怖い。うというわけです。岩田さん、それがいけませんか?美智子れば木下にとっては大きな自信となり、僕の苦労も報われるというわけです。岩田さん、それがいけませんか?美智子は代の娘の名)には納得してもらいましたよ。」

尾崎は深くうなずいた。娘の名を呼び捨てにされたせいか、

雅代は黙らなかった。

もそれは木下君のお母さんに特別の感情があるからなのでし「先生の行為は大変にごりっぱです。頭が下がります。で

羽鳥はやってられないと言うように煙草に火をつけた。そょう?」

して低い声できっぱりと言った。

雅代はそれごらん、と勝ちほこった顔をした。「そんなことは、あなたに言う必要はないでしょう。」

「不倫な関係は教師として困ります。」

た。誰も助け舟を出さなかった。 羽鳥は何もそれ以上言わなかった。広恵はジリジリしてい

「あ、あのですね、不倫と言うのはちょっと違うんじゃな

いですか。」

蚊の鳴くような声で広恵は言った。

「聞こえません。はっきり言って!」

雅代は怒鳴るように広恵に向かって言った。

「教師という立場でですよ。」

追いかぶせるように雅代は言った。

教頭先生、奥様とはお見合い結婚ですか?」 「そんなこと言ったら、教師は恋愛一つできなくなります。

「いや、大恋愛です。」

分がそれで吹き飛んだようだった。 爆笑になった。拍手が涌いた。羽鳥は苦笑した。白けた気

「大島さん。」

ような響きがあった。みどりは雅代の肩を持ちたいのだ。調子づいてる広恵にみどりが腕を突っついた。声になじる

てこう一言多いのかしらね。」

「ああ、又、つまんないこと言っちゃった。私ってどうし

ではずうスのご─レシ欠みこし!!。!! できぎ一言多りのかしられ 」

ど感じていた。 広恵はグラスのビールを飲み干した。雅代の視線を痛いほ

やはり広恵は後悔した。少し酔っていたのだと思った。その日、雅代はとうとう広恵とは一言も口を聞かなかった。

(羽場)がつい。 後片づけを済ませて、みどりと一緒に玄関から出ようとし

て羽鳥とぶつかった。

「大島さん、さっきはありがとう。」

「いいえ、つい口がすべって、つまらないことを言って申虫歯一つない白い歯が笑った。広恵の名前を覚えていた。

し訳ありません。」

広恵は頭を下げた。

言えないもんで。でも彼女は実に真面目な人なんです。そこ「いやいや、うれしかったですよ。岩田さんには皆、何も

「はい、わかっています。」をわかってあげて下さい。」

「でも、僕は木下の母親とは何んでもないんですよね。ま

あ、先のことはわからんですが。」

「え?あ、そうなんですか。あらあ、いやだ私。」

広恵は顔が赤くなるのがわかった。

ても変でしょう?だから僕は何も言わなかったわけです。大「いやいや、あそこでそうじゃないとムキになって否定し

なったって世間的に不都合なことは全くないわけで、ハハハ島さんの意見は至極ごもっともで、僕と木下の母親が一緒に

ハ、初めて気がつきましたよ。ハハハハハ。」

た。

ないのでは、
ないのでは、
ないのでは、
ないでは、
ないではいいでは、
ないでは、
な

と一つどやした。(調子がいいんだから、全く。)みどりがうっとりして言った。広恵はみどりの背中をバン「羽鳥先生って素敵ね。」

その夜、広恵はなかなか眠れなかった。羽鳥のことを考えていた。羽鳥は木下君にとって確かに良い教師である。が、でいた。羽鳥は木下君にとって確かに良い教師である。が、でしまった教師のことは広恵にも覚えがあるからだ。つくってしまった教師のことは広恵にも覚えがあるからだ。つくってしまった教師のことは広恵にも覚えがあるからだ。つくった。子宮癌であった。

勤め先で倒れ、すぐに手術になったが、もうすでに手遅れ暇がなかったのだろう。生活に追われて身体の不調は感じていたものの病院に行く

きく響いた。歩く度に床のほこりが午後の光の中で、おびたを投げる。誰も居ない体育館に下校のチャイムが驚くほど大

つきそうだった。遠くなった太陽が窓から、たよりなげな光

っ気なく亡くなった。の状態だった。高熱が続き、意識不明のまま三日後には、

あ

に立ち働いていた。も何んのこだわりも感じられなかった。雅代はただ一生懸命も何んのこだわりも感じられなかった。雅代はただ一生懸命で一番働いたのは雅代だった。もはや木下君にも羽鳥先生に母親達は木下君のあまりに不幸な運命に泣いた。葬儀の席

下君のお見舞いの品だった。

下君のお見舞いの品だった。

大雨の中をしかも深夜に十キロほどの道のりを走って羽た、大雨の中をしかも深夜に十キロほどの道のりを走って羽て、大雨の中をしかも深夜に十キロほどの道のりを走って羽た木下君が、心労と風邪で学校を休んだ羽鳥先生を心配し大達がさらに泣かされたのは、いったんは親類に引き取ら下君のお見舞いの品だった。

てきた。」
「先生、なんも持って来るものなかったから、りんご持ってきた。」

木下君は紫色にふるえる口びるで笑ったそうである。木下君は紫色にふるえる口びるで笑ったそうである。木下君は紫色にふるえる口びるで笑ったそうである。木下木下君は紫色にふるえる口びるで笑ったそうである。木下

だしい雪虫のように舞い上がった。

いたいからだった。未来と過去が見え隠れする。広恵は昨日、るのである。誰もいない体育館のひそかな静謐を一人で味わを重ねている。広恵はいつも早く来て、こうしてネットを張トンの練習日だった。ジャージィの上下に厚手のジャンパー広恵は黙々とネットを張る。その日が今年最後のバドミン

り身体を動かしたいと思った。明日からは正月の支度で忙しい。その前にせめて思いっ切

三十七になった。

を受り。 と準備体操。アキレス腱を伸ばすストレッチング。後ろ走り、と準備体操。アキレス腱を伸ばすストレッチング。後ろ走り、やがて一人、二人と部員が集まって来た。 軽いランニング

美や真知子は半袖だ。 ィの上衣はいらなくなる。長袖のポロシャツ一枚である。真く飛ばすハイ・クリアの打ち合い。もうその頃にはジャージ」広恵は律子と打ち合う。肩がほぐれてくると、思い切り高

ちゝ。 止。中学生や高校生のようにあまり無理はできない。ケガが止。中学生や高校生のようにあまり無理はできない。ケガがドライブ、ヘアピン、スマッシュ。ひと通り練習して小休

宮田が言った。部員はほとんど揃っていた。す。じゃ、ジャンケンでコートに入る順番を決めて下さい。」「今日は最後の練習日なので新旧部員、混合の試合をしま煙草で一服する者が二、三人。広恵は練習中は喫わない。

ョート。広恵はラケットを持って身構える。雅代の怖いくら今しも広恵に向けてサービスを打とうとしている。きっとシまぶしそうな表情をしたが、すぐにこちらを向いた。雅代は広恵と宮田の向こう側に雅代と真美がいた。西日に雅代は

となくつぶやいた。 ・ネットの支柱の所に立ってカウントを取る松田先生は、何い真剣な目が広恵を見る。

となくつぶやいた。

それを聞いて真知子はキョトンとした表情をした。「かなわねェな、全く。」

ある。
T小学校バドミントン部の母親達は本日もすこぶる元気で生は、いやいや、と言うように頭を左右に振った。

追悼・宇江佐真理さん

市民文芸第二十六集評論部門入選

序

四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。
四冊は何んと箱入りだった。

状を如実に象徴していると思った。持っていると思う。もっと大げさに言うなら現代の文学の現を非難する気にはなれないのである。こういう宿命を文学は私は本を捨てることはできないが、これ等の本を捨てた人

『城壁』は衝撃的な小説であった。南京事件の概要を私は

はなく、川のようにただ流れ、あるいは春を待つ冬のように

読んで笑いに笑ったせいなのだ。

さがなら昨年から今年にかけて、さんざん林真理子の作品をけで十五冊の本が読めた。それはある種の反動であると思う。けで十五冊の本が読めた。それはある種の反動であると思う。
古体和子は読んでいたし、他は趣味に合わなかった。
有初めて知った。まあしかし、読んだのはそれだけだった。有

林真理子を読み過ぎたら、真面目に文学と対面した作品を求めていた。いや欲していた。林真理子が真面目ではないと求めていた。いや欲していた。林真理子が真面目ではないと求めていた。いや欲していた。林真理子が真面目ではないと求めていた。いや欲していた。林真理子が真面目ではないと求めていた。いや欲していた。林真理子が真面目ではないと求めていた。いや欲していた。林真理子が真面目ではないとれりの私は無然となり猜疑心が生まれる。本当にそうなのか。もしかしたら違うのではないだろうかと。

ない。少なくても今はそのようなものである。 次第にゆるんで行くようなものなのである。十年後はわから

の尾ひれを今はさぐってみたい。 一時期、林真理子の文学を認め、そこから発する様々な形

としては未完成である。 林真理子が直木賞を受賞した。それが日本の文学にとって としては未完成である。 が、まえがき、あとがき、解説がないようでは売り物の作品 で別はそれほどの作品とは思わない。あとがきも解 で別はそれほどの作品とは思わない。あとがきも解 としては未完成である。

いかにもいいかげんのような気がする。そろ(賞を)あげてもいいだろうということで決定したのは、林真理子はもう四回もノミネートされていて、それでそろ

と今でも思っている。いらなかった。マスコミが彼女を無理矢理、作家に仕立てたいらなかった。マスコミが彼女を無理矢理、作家に仕立てた罪がなかった。そこには文学の本質をさぐる何ほどの理由も林真理子のエッセイをワッハッハと笑って読んでいる内は

また。 私の言いたがりの鉾先は角度を変えた。九十度、いや百八十私の言いたがりの鉾先は角度を変えた。九十度、いや百八十私のしまらない笑いは彼女の受賞によって硬直した。当然、

る。もしかしてエッセイは小説よりも気が抜けないのではな

エッセイの怖さを知らないと言ってしまえばそれまでであ

を横目でながめつつ、『星に願いを』と『葡萄が目にしみる』いかと常日頃考えている。私は傍若無人な彼女のエッセイ集

と、歯がみしている無力な読者の前に『ルンルンを買ってと、歯がみしている無力な読者の前に『ルンルン』は彼女のオリジナルな造語ではない。少女漫画の世界から思わずこぼれ出た耳ざわりの良い言葉である。の世界から思わずこぼれ出た耳ざわりの良い言葉である。「ランラン」と言うほど小学生のようにはしゃがず、少し大人になった女の子が口ずさんでみるのには調子が良く便利大人になった女の子が口ずさんでみるのには調子が良く便利大人になった女の子が口ずさんでみるのには調子が良く便利する場話語である。ここに目ざとくアンテナを働かせて、あたな操態語である。ここに目ざとくアンテナを働かせて、あたな操態語である。ここに目ざとくアンテナを働かせて、あたなりに帰ろが、あたいと思う。

思うのも人情である。

好きなものだからである に思いをはせる。この二つの作品が彼女の全作品の中で最も

なければ、 された表情をされなければならないのだろう。 めずおくせず「林真理子」と答えて、どうしてあんなに軽蔑 何が良くて何が悪いかなど一概に言えないと思う。そうで しかしながら、人に何を読んでいるかとたずねられて、お あの捨てられていた本には正当な理由が必要にな

って来る。

のではなかった。 し本当に夢中になった小説というのは、あまりメジャーなも ない。昔、それ等を読んで確かに悪くはないと思った。しか ちゃん』、ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』、『デーミアン』、 かけたことがあったが、何んとなく女々しい気がしていた。 なかった。一度、ヴェルレーヌの詩集を読んでいた級友を見 時の彼等が何を読んでいたのか知らなかったし、聞くことも りの差があると想像される。私は少年ではなかったので、当 この時期、男子と女子では読書傾向とその嗜好にはまだかな モンゴメリの『赤毛のアン』のシリーズetc……。悪くは 結局は自分の少女期を振り返ってしまう。夏目漱石の『坊 思春期の少女に何を読ませたいか。あえて少女と書くのは、

> ある。 冊のために他の何百冊の名作をふいにしてしまったようで 私は若杉慧の『青春前期』と心中したつもりである。その

ぎているのに私の根底には、まだ『青春前期』が息づいてい にもなった。甘い小説ではなかった。しかし若さが躍動して いてヒロイズムがあった。読んでから二十年以上も時間が過 この小説の中の主人公椎ノ木武志が私の男性観を握る人物

めぐって両親は揺らぎ、担任の教師は困惑する。 ら三十年の時代。一人の女生徒が強姦された。この女生徒を ストーリィは戦後の混乱が少しおさまった昭和二十八年か

人の行動は奇想天外であった。大人の計算づくの思惑に武志 行くつもりが、ついに彼女を連れ出してしまう。その後の二 去を持つ。青戸の命令により、彼はその女生徒の様子を見に するような少年だった。戦争中は浮浪児の集団の中にいた過 師青戸に助けてと手紙を書いた。青戸の担任のクラスに椎 激な環境の変化におののき、高校でひそかに慕っていた女教 愛し、本を愛し、瑞々しい感性を持っていただけの少女は急 ら遠く離れた親類の家へ彼女を預ける。人生も何もわからな のストレートで若者らしい感情が交錯して、うっとりするよ 木武志がいた。広島から転校して来た、まるで原爆の匂いの い少女、自分が何者であるかもわからない少女、ただ絵画を 両親は女生徒の意志に関係なく転校させようとして学校か

うな名台詞が彼の口からこぼれた。

回りの男生徒が阿呆に見えた。コにする要素をたくさん持っていた。私は彼に恋こがれた。サルトルの好きな不良少年だったから、十六歳の私をトリ

つけて、それでどこかに行ってしまったらしい。ない。のぼせ上がった私が友人に片っ端から読め読めと押しるんなにのめりこんだ作品ではあったが、手許に残ってい

けないのである。と思う。高尚な文学はすたれないとタカをくくっていてはいに通じるものでなければ若者の心をとらえることはできない弁するものなので、いかに過去を語ろうとも、それが常に現代弁するものなので、いかに過去を語ろうとも、それが常に現代なぜこんなことを書くのかといえば、文学もまた時代を代

いけないと私は思っている。
文学作品を教養にしてはいけない。それは娯楽でなければ

チェッカーズに文学は勝てないのだ。活字離れと言われる風している。言葉では救えないのかも知れない。ファミコンや持っていないだろう。彼等は痛々しいほど傷つきやすく屈折ん』のユーモアに素直に笑える感性を今の中学生や高校生は明治はもうあまりにも遠い過去である。もはや『坊っちゃ明治はもうあまりにも遠い過去である。もはや『坊っちゃ

彼等が書くためには、その手本となる作品が必要になる。もっと言うなら彼等こそ書かねばならない。彼等を救う文学は彼等の中から生まれなければならない。

潮になげく大人は方法論からまちがっているのだと思う。

ではないかと思う。 した小説――『葡萄が目にしみる』は今、それに最も近いの、ホ川次郎や新井素子ではなく、もっと本格的に文学と対面

じるとき』を認めるなら、『葡萄…』は充分にその価値があるの小説は軽視されている観がある。だが中沢けいの『海を感『ルンルン…』のイメージが先行して、いささか林真理子

だろう。

『葡萄が目にしみる』は作者の林真理子が自らも言うように、いとおしく貴重な青春小説である。作者の分身のようなに、いとおしく貴重な青春小説である。作者の分身のようなのである。岩永君はその才能のために傲慢なふるまいが多かった。色々な女の子とも浮き名を流す。乃里子は彼を軽蔑しながらも、どこかで彼の男らしい魅力にひかれていた。ある方里子は大沢美弥子という女性を介して岩水と再会する。かだが、岩永らしいと乃里子は思った。そんな時、彼からである。岩水方しいと乃里子は思った。そんな時、彼から覧いたが、岩永らしいと乃里子は思った。そんな時、彼から覧いたが、岩永らしいと乃里子は思った。そんな時、彼から覧いたが、岩永らしいと乃里子は思った。そんな時、彼から覧いたが、岩永らしいと乃里子は思った。そんな時、彼から

《その電話は三日後にかかってきた。

をとった。 編集テープを聞いていた乃里子は、舌うちしながら電話

「はい、第四スタジオ・・・。はい、岡崎ですけど」

「岡崎さん、オレだよ。わかる?岩永だよ」

りかる。 岩永の声は全く変わっていなかった。なまりもはっきり

「あら、本当にお久しぶりね。お元気ですか」

に気づいた。アナウンサーらしい美しい発音は、一種の照「乃里子は自分が必要以上に明瞭に喋ろうとしていること

れだと自分でもわかる。

「あら、岩永さんこそ、ご活躍の様子、よく雑誌で拝見したいしたもんだよな、ラジオに出てるんだもんな」「あんたの番組、聞いてるよ。朝、会社へ行く車の中でね。

サラリーマンだよ。どうってことないよ。それより、美你「いや、オレなんかもう現役を退いたから、いまは一介のてましてよ」

子さんの話、聞いてくれた?」サラリーマンだよ。どうってことないよ。それより、美弥サラリーマンだよ。どうってことないよ。それより、美弥

「おい、あの人のこと、誰にも言っちょな」

聞こえた。 それは他人行儀で話そうとする乃里子をなじるようにも不意に岩永は故郷の言葉で喋り始めた。

てるらな。あんまりペラペラ人に喋っちょな。わかってる「おまんは昔からおしゃべりだったからな。おい、わかっ

宮本輝の『二十歳の火影』は随筆集である。随筆、いや、その意味で灰谷健次郎を語るのは、私には難しいのである。

暖かいものが次第にひろがっていくのを感じた。》

『葡萄が目にしみる』より

めにしてほしいと切実に思う。
「ジベ」というのは種なし葡萄を作る時に使われる薬品でいジベ」というのは種なし、新萄を作る時期、家の手伝いをしている生徒たちの指先は薄ある。その時期、家の手伝いをしている生徒たちの指先は薄ある。その時期、家の手伝いをしている生徒たちの指先は薄めにしてほしいと切実に思う。

の『二十歳の火影』のことが頭に浮かんだ。深い意味はない。『葡萄…』を考える時、私は小檜山博の『雪風』と宮本輝

『雪嵐』を読んでいると、そのドッサドッサの北海道弁に簡単に言えば方言の効用である。

故に小檜山の作品は小説になり得たと思う。といからんで来ることがある。ここまで虚飾を取り払い、貧額が赤らんで来ることがある。ここまで虚飾を取り払い、貧額が赤らんで来ることがある。ここまで虚飾を取り払い、貧額が赤らんで来ることがある。ここまで虚飾を取り払い、貧額が赤らんで来ることがある。ここまで虚飾を取り払い、貧

30

理子の反動なのだろうか。

地子の反動なのだろうか。

で考え出したのは、ごく最近のような気がする。それも林真を考え出したのは、ごく最近のような気がする。私が文体のことからした一がかった色調なのに妙な明るさがある。私が文体のことがに安々と変化できるような、不思議な肌合いの作品集であいま風にエッセイと言おう。エッセイにもかかわらず小説のいま風にエッセイと言おう。エッセイにもかかわらず小説の

(=

男の作家のエッセイは彼女ほど笑わせてはくれない。感心い子のエッセイもおもしろいと思う。もしろいのと同時に上坂冬子、佐藤愛子、田辺聖子、中山あえば本音を語っているからである。私は彼女のエッセイがおれ真理子のエッセイはおもしろい。なぜおもしろいかと言

真理子は決心したことがあった。あくまでも本音で行こうと。『ルンルンを買っておうちに帰ろう』を書くにあたって林することは多いが。なぜなのだろう。

マスコミの世界に深くかかわると業界の建て前の物言いに彼

アウンで、 『ルンルン・・・・』は彼女が予想した以上に女子供に受け入ことにもなるのだが、彼女はそれを恐れなかった。 女はハッキリと嫌悪の感情を持った。本音で行けば敵を作る

案の定、マスコミの中からかなり批判的な言葉で彼女を攻

いか、と私はいいたい。

若い女がもっているものなんてタカがしれているじゃな

ヒガミ、ネタミ、ソネミ、この三つを彼女たちは絶対に

なにをおそれているんだろう。なにをこわがっているんだろう。

る。がら、有名になるとは、こういうことでもあるのだと述懐すがら、有名になるとは、こういうことでもあるのだと述懐すいら、有名になるとは、それ等の言葉に深く傷つきない。

《ところで、今回私がこういった本を書くことになったのい。

『ルンルン・・・・』は痛快でおもしろいのと同時に痛ましい

は、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、ひがむ一方だった女からの反撃なのである。だいたいは、女が書くということにおいては、毛糸のズロースを三枚重ねてはいている感じ。

L、 L!》 描こうとしないけれど、それがそんなにカッコ悪いもんか

『ルンルンを買っておうちに帰ろう』より

村松友視と高橋章子の解説がついている。いいねェ。ちゃんとまえがきとあとがき、それに少しだが刷されている。表紙は奥村靭正の極彩色のキンキラキン。刷されている。表紙は奥村靭正の極彩色のキンキラキン。いやはや。しかし、このエッセイ集の良さは、その中味もいやはや。しかし、このエッセイ集の良さは、その中味も

《『真理つへ、ふとどき者に屁をかます』っつーかさ。セ

- ハハは、ニュハニ)。 っこ ノ・・・ス ーナン デケン相手に含蓄の 刃 が飛びかうのだ。

ント』が舞々するからその熱気にコッチがポッポと燃えてスコーンと、一つスジの通った窓口からの饒舌は、『ホコトを喋ってる。

アタシが男だったら、クドクぜ。》

高橋章子(ビックリハウス編集長)

〇年代のマリリンでもあったのだ。

派手な文章に出会うと、私はなぜか、カルチャーショック

経済学者の栗本慎一郎は林真理子のエッセイを次のようにを受けてしまう。

分析する。

その根源的な長所は他者(相手)の論理と自己の論理のた、必ずしもそれが真理子エッセイの本質ではない。知れないが、それだけでは実は少しも面白くないのだ。まるユニークな見解で人間を斬ってゆくように思われるかも《私の経済人類学もそうだが、林真理子のエッセイは、あ

と言えば、そうではなかろう。》ることである。勿論、本人が意識的にそれが判っているか交流と必然的に起こる屈接へのこだわりを基礎に置いてい

『ルンルン症候群』より

今やどの週刊誌をめくっても彼女の近況やエッセイの一つ二私は林真理子は文学上、一時代を築いた人間であると思う。「そうではなかろう」というのが、なんだかいい。

らない。かつて山梨放送のDJのアイドルマリリンは一九八はある種の偏見を持ちながらも、この事実を認めなくてはな代表ではない。文学上のニュー・ウェーブなのである。私達代表ではない。文学上のニュー・ウェーブなのである。私達つにお目にかかる。今がピークなのかも知れない。

た一興であろう。 る。サクセス・ストーリィとして彼女の作品を見るのも、まる。サクセス・ストーリィとして彼女の作品を見るのも、ま林真理子は底辺から頂点に登りつめた数少ない成功者であ

へ入ろうとしていたアベックの会話に思わず吹き出し、男にその昔、連れ込みホテルの近くに住んでいた彼女は、そこ

としたと言う。そのマリちゃんはもういないのである。すごまれて走って逃げ、夜道におろしたてのミツワ石鹸を落

る。

(四)

で気がついた。
「気がついた。
で気がついた。
ととに驚いたこととほぼ同等のものだと後
へ出かけたということに驚いたこととほぼ同等のものだと後
その驚きは林真理子がアルトマンシステム(見合い紹介所)

人間は考えた。 人間は考えた。 人間は考えた。 がされていた。誰しもこの三つには自分なりの見解があり、 聞かされていた。誰しもこの三つには自分なりの見解があり、

ろう。

ある。主人公ヒロミはふとしたきっかけで新興宗教に入信す『紫色の場所』は新興宗教の内部をさぐった実験的小説で

なかったと、ヒロミを通じて語らせる。者の目で書き続けた。その宗教の起こす奇跡にはめぐり会えたかどうかであった。が、我等の林真理子はあくまでも第三たかどうかであった。が、我等の林真理子はあくまでも第三

読み終えて妙な感動を覚えた。誰もこのような形で宗教を

り顔に書きなぐった林真理子を恐れを知らぬ者として尊敬さ意に介さず、ズカズカと入り込み、勝手にフンフンとわけ知書いてはばかると思われていたからだ。そんなことは一向に取り扱った小説を書いた者はいない。それは暗黙の了解で、

えしたくなる。

か――をテーマにした遠藤周作の『沈黙』はその良い例であけが受け入れられると信じていた。神はなぜ沈黙しているの私は文学の世界では宗教は徹底的に調べ上げられたものだ析したが、まさにその通りだと思う。

は思っていない。どちらにも失礼になるだろう。『沈黙』の荘厳なムードの裏側でネスカフェのあの顔がペロリと舌を出しているようで落ち着かないのである。リと舌を出しているようで落ち着かないのである。をあるが、 むしろ小説の中の文学性を信用できずにいる。 余談ながら、私は彼の小説とエッセイのあまりに大きい落余談ながら、私は彼の小説とエッセイのあまりに大きい落

33

中沢新一という人は、それを「病的なまでの健康さ」と分

思う。 | 私は『紫色の場所』のような小説はもっとあってもいいと

難な小説に仕上がった。
『紫色の場所』はもう一歩の所で踏みとどまったために無面しか見なくなり、判断をあやまるという不幸にみまわれる。本位になりがちだし、それゆえ、多面多岐にわたる宗教の一しかしながら、こういう小説の落とし穴はともすれば自己

う。み出した所の部分だったというのも、また正直な気持ちであみ出した所の部分だったというのも、また正直な気持ちであしかし、読者が知りたかったのは、勇気あるもう一歩を踏

(<u>H</u>)

分に驚いている自分』という詩があったが、まさにそんな感を浴びるまでの屈折した青春が描かれている。これは私小説を浴びるまでの屈折した青春が描かれている。これは私小説を浴びるまでの屈折した青春が描かれている。これは私小説読み終えた後は感動している自分に驚いた。『驚いている自分をさらけ出した真実の重みが伝わって来る。やはり読んでいて彼女の痛みを感じてならなかった。 読み終えた後は感動している自分に驚いた。『驚いている自 読み終えた後は感動している自分に驚いた。『驚いている自 であってもかまわない。自分をさらけ出した真実の重みが伝わった。 であるだろう。彼女がコピー・ライターとして脚光 読み終えた後は感動している自分に驚いた。『驚いている自 であってもかまわない。自分をさらけ出した真実の重みが伝わった。

四〇〇枚の小説を書いたことで満足していたのだ。いなかったようだ。一つの自分の歴史をきざむつもりだった。

た問題の発展のさせ方に疑問を感じる。 た問題の発展のさせ方に疑問を感じる。 たれがどういうことなのか本人さえもわかっていないだろう。 でく最近の『女ともだち』は決してほめられるような作品で でく最近の『女ともだち』は決してほめられるような作品で が説家としての下地を踏んでいないので今後が心配される。 本記がどういうことなのか本人さえもわかっていないだろう。 をおがどういうことなのか本人さえもかってしまったのだ。 はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し はないからだ。人物をていねいに描くのはうまいが、主眼し

ものは書けないような気がする。 好が自分の中ででき上がっている人間でなければ、文という好が自分の中ででき上がっている人間でなければ、文という

らなのだろう。 しなのだろう。 こなのだろう。 こなのだのは、彼女自身も言うように本当に読んでいないか時にドストエフスキーを読破したことには感心したけれど、時にドストエフスキーを読破したことには感心したけれど、時にドストエフスキーを読破したことには感心したけれど、

はない。
「ルンルン・・・・』に大衆が浮かれたのはファッションのよ

ろう。しかし、『星に願いを』や『葡萄が目にしみる』は残る。十年後に『ルンルン・・・・』を読む人は、おそらくいないだ

彼女は、『星に願いを』以後、小説を書き続けるとは思って

が......。 文学とはそうしたものなのだ。二十年後はわからない

《「こういうのを追いつめられたっていうのかしら」《「こういうのを追いつめられたっていうのかしら」とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とキリコ自身思うほど金がないのだ。事実この何日間か、とちじょ。

者は落ち込む気分から救われたのだ。リズムとノリがある。貧しさをこんなふうに書いたことで読しまったフシがある。コピー・ライターらしい言葉に独特の馬鹿げているがこのフレーズだけで林真理子に惚れ込んで馬鹿げているがこのフレーズだけで林真理子に惚れ込んで

(六)

相を反映している気がする。 私は彼女の各週刊誌に連載しているエッセイが今一番、世

仕方に腹を立てるのだ。と肩を持ち、巨人軍原選手のフィアンセのマスコミの報道のと肩を持ち、巨人軍原選手のフィアンセのマスコミの報道のという週刊誌の書き方に対しては、松田聖子は実力で歌手にという週刊誌の書き方に対しては、松田聖子は別二谷由里恵の方が美人だ郷ひろみを袖にした松田聖子より二谷由里恵の方が美人だ

ことである

方がキタナイと非難する。誰も思っていても口にしなかった

あの一件以来、女性の中で原クンのファンは確実に増えたと歴ありを強調するのは、どういうわけなのだと。同感である。慶大卒の社長令嬢でもいいのに、ことさら六才年上、離婚

ありかをどう説明したら良いのだろう。はそういう時、ハッキリとした説得力がある。その説得力のはそういう時、ハッキリとした説得力がある。その説得力のいことなのである。文学を真面目に考えている人達は、そどうでもいいことである。本当はそれ等の事柄はどうでも

(七)

鹿児島…。そのお国なまりの端々に、遠くひそやかな人間のと思う一人である。大阪弁、京都弁、金沢、名古屋、岡山、私は作家が故郷の言葉を使って作品を物するのを好ましい

効果があるのだ。ところが北海道弁、いや函館弁でもいい。だが、それはハッキリとした個性を持った言葉であるから

暮らしを意識する

ら感じているはずである。と言葉で小説を書いたりする居ごこちの悪さは函館の人間なき言葉の上ではその違いが良くわからない。そんなあいまいしかも耳で聞くとそのなまりがハッキリとしているのに、書濁音をつけ語尾を重くしたものがほとんどではないだろうか。書き言葉にすると妙に具合が悪い。それは大かたの標準語に書き言葉にすると妙に具合が悪い。それは大かたの標準語に

だから函館を背景にする小説は、なまりを濁音にして書くだから函館を背景にする小説は、なまりを濁音にして書いた。としか、有島青少とで藤泰志という人は私と同世代で、高校時代、受験雑誌に佐藤泰志という人は私と同世代で、高校時代、受験雑誌に佐藤泰志という人は私と同世代で、高校時代、受験雑誌になるである。ただし、函が、標準語でやるか、どっちかになるのである。ただし、函が、標準語でやるか、どっちかになるのである。ただし、函が、標準語でやるか、どっちかになるのである。ただし、函が、標準語でやるか、どっちかになるのである。

ぎれ込んで、それで都会の空しさを語っても、私は感動なんた函館の風景でしかない。それ以外は、特に気のきいた会話や、昔聞いたロックン・ロールの曲の名も、醒めたような主め、昔聞いたロックン・ロールの曲の名も、醒めたような主が、が彼の作品の中に何かを求めるとしたら、それは彼の見私が彼の作品の中に何かを求めるとしたら、それは彼の見

私は山梨県には敵意に近い羨望と嫉妬を感じるのである。

てしやしない。そうふてくされているのである。

私は六年ほど前、二ヶ月ほど甲府ですごしたことがある。私は六年ほど前、二ヶ月ほど甲府ですごしたことがある。

あると思った。りそそぎ、オレンジ色に輝いて見えた。その明るさに私は思りそそぎ、オレンジ色に輝いて見えた。その明るさに私は思だったが、新宿から中央線で降り立った甲府の街は陽光が降

正月気分も抜けた雪の降りしきる函館はグレーのイメージ

汗ばむほど気温が上がる。 温度差が激しい。朝晩は底意地が悪いほど冷え込み、日中はこの地方は盆地で、いわゆる内陸性の気候である。一日の

である。 である。 この気候が良い葡萄を作り、良いワインを造るの 私は常に軽い頭痛を覚えていた。流れる空気まで違うよう

だ。いかに県の財政が豊かか想像がつくだろう。
ミレーがズラリと所蔵されているのである。あのミレーなの産業という印象を受けるのだ。県立美術館はもっとすごい。入れの仕方がまだまだその比ではない。山梨県のそれは強い 函館も近郊の農家がワインを造って売り出しているが、肩

武田信玄と成り上がりの街。大阪商人の名前にかくれてし

持つ(少しそっ歯気味ではあるが)。

大きく丈夫そうな歯をおそらく武田の血を引くのであろう、眉毛は太く濃く、大きおそらく武田の血を引くのであろう、眉毛は太く濃く、大きおそらく武田の血を引くのであろう、眉毛は太く濃く、大きおその道は函館の人間の顔を見慣れた目には異質に思えた。まっているが、甲府商人のしたたかさも確認した旅だった。

義姉は言った。「本気にしちゃ駄目よ。」

「ハッタリなんだから。」

は、あわてて車の引き取りを願い出た。ロールス・ロイスのは、あわてて車の引き取りを願い出た。ロールス・ロイスの販売会社たりの出身者が酢いかの足を売り出した。こちらでは見むきたりの出身者が酢いかの足を売り出した。こちらでは見むきもされないそれが、甲府ではバカ当りした。今では、そうともされないそれが、甲府ではバカ当りした。今では、そうともされないそれが、甲府ではバカ当りした。今では、そうとちゃんいか」と入れた。驚いたロールス・ロイスを購入する。黒塗りのドアには赤いおどけた字で「よったを開入する。黒塗りのドアには赤いおどけた字で「よったを開入する。黒塗りのドアには赤いおどけた字で「よったを開入する。黒塗りのドアには赤いた。道南の下海岸あたいか」と入れた。驚いたロールス・ロイスのは、あわてて車の引き取りを願い出た。ロールス・ロイスのは、あわてて車の引き取りを願い出た。ロールス・ロイスのは、あわてて車の引き取りを開います。

どうしようもないのである。思った。異国情緒がどうのとおだてられたって、不景気ならと思った。このての話を私はわが函館の街で聞きたいと切に品位を汚すという理由で。その話を聞いて、どちらもすごい

のだろうかということであった。 林真理子は、いちめんのレンゲ畑の中を白い自転車をこい が表うか」と彼女が漠然と思う意味は、こんなに豊かでいい がる。しかし、彼女の級友の親達はボーリング場を建てたり、 ある。しかし、彼女の級友の親達はボーリング場を建てたり、 はなの級友の親達はボーリング場を建てたり、 はいの中を白い自転車をこい

(J\)

私はもう、何も言えない。

ぼれてしまう。

林真理子を読み過ぎたら、突然、小林多喜二の『蟹工船』

様真理子を読み過ぎたら、突然、小林多喜二の『蟹工船』

てしまう作品であったはずだ。『光る女』、『黯い足音』、良かったと思う。以前ならもて余しまた、小檜山博の作品もシリーズで読んだ。『出刃』、『荒海』、

家を私は今でも好きと言える。 に乗ったこともある。芸術家を一度も気取らなかったこの画入る。キザな話をするなら、彼の絵を見るためだけに夜汽車風景』や絶筆となったベニヤ板に描かれた未完の馬の絵に見あるいは農民画家と言われた神田日勝の画集を開き『室内

つまり、これらの現象は、すべて林真理子の「浪費の文学」ただけで、背筋がピンとする気持ちになる。丸谷才一のエッセイを開いて『菊なます』という標題を見

からの反動なのである。

抑圧も制約も受けず、言いたい放題、気ままに書くという饒舌の伊藤香、饒舌のゆえに自滅す、の心境である。当化したいがための、私の苦しまぎれの造語であった。「反面文学」などという言葉はない。それは林真理子を正

ことの意味が、彼女を見てわかったような気がする。

つまり林真理子が真に試されるのは、実はこれからなのだ

(水)という。 彼女がまさに本当に作家になった時であろう。その文学を私それを引き止めるものが、まだ彼女にあるとしたら、それはと思う。私はすでに彼女に食傷し、座席を立とうとしている。

ような標題を次々と考えた。コピー・ライターあがりの作家は人々が浮かれ、飛びつく

れて生み出されたものではなく、ただただ感性の先端でのみっピーは現代の俳句である。しかもこの俳句は沈思黙考さ

書かれた。

いうことなのだから。
に思えてくる。言わば、メスのカンで世の中を泳ぎ渡ったと訴えたやり方は、新しいようで、実はずい分、原始的な行為、それも言うなら才能であろう。しかし、そのようなカンに

そろ悟ったろう。そのやり方は今後は通用しない。を読んでいると、今までの多くの作家が物したエッセイが、を読んでいると、今までの多くの作家が物したエッセイが、を読んでいると、今までの多くの作家が物したエッセイが、人々はその目新しさに一時は大騒ぎした。彼女のエッセイ

良さを示唆するものがあったことだろう。のであった。そのあいさつは、そつがなく、両親のしつけのもちろん彼女は女性の作家として、同性の土井氏を励ますももちろん彼女は女性の作家として、同性の土井氏を励ますも近では社会党の土井たか子氏の激励会にも顔を出している。最彼女は文壇の新人類として、色々な場で活躍している。最

を彼女の作品の中から感じ取る。 「市井の主婦」、「居職」 ―――古風で正しい言葉の使い方

級の母親達にその作品の回し読みをさせた功績を私は長くたこれだけで終わったとしても、我が愚妹と笑い合い、社会学のになることを祈ってやまない。しかし、仮に、林真理子が願わくば、今後、さらに作家として、その品位が不動のも

以前に評論を書いた作家たちというのは、私がぞっこん惚

終

れ込んで、どうにもおさまりがつかないので、ついに書く、

る。結果は案の定。
なので、私はいつもの「きっちりオトシマエ」つけるのであなので、私はいつもの「きっちりオトシマエ」つけるのであて気はサラサラ起きない。それでも読んでいたのは林真理子の対きなことは好きだが、林真理子の作品と心中しようなんと言ったパターンがあった。今回の林真理子は少し違う。

など読まないだろう。 文学真面目人間の安東先生や木下先生は、まさか林真理子

にふさわしい人物がいるはずなのである。 林真理子の作品があれほど売れた理由が私には、まだもう 林真理子の作品があれほど売れた理由が私には、まだもう 株真理子の作品があれほど売れた理由が私には、まだもう

はこれから新しいファッションに彩られて行くのだろうか。我等「団塊の世代」も、もはや中年まっさかりある。文学

そこの所は専門家におまかせしよう。

らしい。もちろん「正しい文学」など言えないのであるから

芥川、直木賞の性格はこの頃はどんどん変わって行ってる

39

この部分でだけは、いつまでも傲慢でいたい。たいし、読み続けたい。

函館市民文芸

平成二十七年度

第五十五集

随 筆

選

入

毛

野

 \Box

裕

子

目の発作の今回は い心臓病を抱えていた夫の、三度 0 夫が亡くなっ 残念ながら奇跡は た。 楽葬』となった。 作った歌で送る、 その、葬儀の時の事である。

ア

ット

ホ

]

起きなかった。

体は、

故人の髪の毛が必要であれば、

重

奇跡的 る事が出来た。 の時も、慌てる事なく、スムーズにや してくれていた。 いざという時に私が困らないように 葬儀の流れなど、全て考えて準備し、 れたあの日。その後、夫は、 こし、 年前 12 助からないと言われていたが、 .復活した夫!喜びに満ち溢 入院中に二度目の発作をお なので、実際の葬儀 納骨堂や

納棺の儀式だ。

く湯灌がはじまった。

少し切って、大事にしまった。

何かが降りてきたら の復活後、 突然、 きれいにし、白装束を着せ、棺に入れ 鳴らしながらする、 組ませ、 てくださった。 数珠をかけた。 最後に、 厳かな儀式。 棺の中で手を あ

こう言った。「今、指毛を切っても、

葬儀場にある一室で安置された。 ムな 夫 への遺 音 と濃くなって、「カニさんみたい と面白がって触っていた私。そんな思 白く、夏になると薄くなり、 しまったのだ。 夫の指毛は、 冬に とて

りびと」の方がお部屋にいらしての、 にお切りください。と言われたので、 鈴の音を絶やす事なく わゆる「おく 湯灌前 ほどな 夫を でも、 勇気を振り絞って、おくりびとの方に よし!と、 んじゃないだろうか。と心の中で葛藤 かなかったんだろう、 き、髪の毛を切った時、どうして気づ い出が走馬灯のようによぎった。 待てよ、まだ、今なら間に合う ここである決断をした私。 と、後悔した。

をかけたその指を見て、「あ!」と思 と悲しい気持ちになったその時。 もう、夫に触れる事はできないんだな。 った。夫の指毛に目が釘づけになって あ、これで で。 イ なので薄いフワフワの指毛だった。テ 涙を流しながら、 と。嬉しかった。本当に嬉しかった。 いいでしょうか。」 ッシュにくるんで、側のテーブルに すると、 静かな声で「どうぞ。」 指毛を切った。夏場 消え入りそうな声

L

夢中で作り、

夫婦でレコーディ

『歌』だったので、葬儀も、主人の

て、CDを完成!夫の生き甲斐

歌を作り始めた。

また、夫は、七年前

偲んだ話をしていた。しばらくして、 悲しい雰囲気ではなく、明るく故人を 居てくれた。明るい友人ばかりなので、 三人は、夜遅くまで一緒に私の部屋に 会場内の一室で休む事となった。親友 終えた夫は、その日一日、私と一緒 刀を添えられ、 無事に 灌が終わ 数珠をつけ、旅支度を り、 棺桶の中で、 達が 間違って指の皮まで切ったらどうす スで冷たくなっており、「ちょっと、 しかし、指毛を切るにも、ドライアイ 側に行って、指毛切りがはじまった。 て、そこから、みんなで笑顔で棺桶の 思うと、ナント!友達二人がかりで棺 くんじゃない?」と。そう言ったかと 桶のフタを開けてくれたのだ!そし ~ ね え、 まだ、棺桶 0 フタって開 謝した。 微笑んでいたような気がする。

なはずは・・・と思ったけれど、何度 シュを開けたら、指毛が、ない!そん 思い、確認しようと、くるんだティッ 私は、先ほど切った指毛をしまおうと か。かと思うと、かけてたメガネを外 る?」とか「血出さないように!」と イスがあたり、メガネが凍りはじめた して切った時、そのメガネにドライア

まえば良かったのに、動転してたから ぱりなかった。「その場でちゃんとし して一緒に探してくれたけれ た・・」と言ったら、友達がびっくり 小さい声で「指毛、なくなっちゃっ 見ても、ない。夏の指毛は細くてフワ フワだから、飛んでいってしまったら い。ショックでしばし沈黙。その後、 ・・」と気落ちする私。すると、友 ど、やっ 静か というような顔をしながらも、 中の夫は、「何事だ?死んだ時くらい と、友達がジッパー式の袋をくれて、 切れ、その指毛は、 騒いだ!そして、何とか無事に指毛は り・・・ワイワイキャーキャー騒いだ、 てくれて、儀式?は無事終了!棺桶 「指毛」と目立つようなメモまで書い に寝かせてくれよ、 なくさないように 頼むよぉ。

うの。昔『骨まで愛して』という歌が

は、きっとまた、歌を作ってい

ると思

いう歌を作ってくれないかしら、 あったけれど、『指毛まで愛して』と

あなた!

て、楽しくも優しい友達に、心から感 がらも、明るい気持ちにさせてもらえ な事なのかもしれないなぁ、と思いな いだろうな、考え様によっては不謹慎 恐らく、こんな事をする人なんていな

んでいると思うから、時々泣きなが 私が笑って暮らしている事を一番望 明るく、楽しい事が大好きだった夫は あと感じている今日この頃。 人になっても、笑顔で生きていけるな そうそう、あちらの世界に行った夫 こんな人達に囲まれているので、一 笑って過ごして行こうと思う。 何より、 ; 5

42

随

筆

入

選

娘

菊

拁

有

紀

そ え ごつ 11] $\bar{\mathcal{O}}$ る لح Δ K た 瞬 が 姿を 0 今か今 間 願 醸 返 日 する が L L \mathcal{O} 出 いつまでも来な 7 Ŧī. 目 想い 稜 かと浮足 す、異様 見ようと た。 郭 とが、 駅 ラ は 立 スト な 多く ーラン り乱 け 囲 け 想 ħ 11 気 <u>ک</u> れ ば を \mathcal{O} け ホ 诇 かて 11 私ンか話 な 行

るで な寒 な歓 光ととも とさえ 別れい でさだ 声 が 思わ 上 に 20 た。 立がった。 た。そんた 現れ せる た緑 ほ 色の どそれ 出 な は中、 車 眩 は ているよう さで、 体。 差し 神 Þ 大き 込 L te そでのその の呪列の列幼

む

手 た。

きか

け

た息は

つ白で、

ま

11

暖

冬にも

か

かわ

らず、 真

カゝ

じ

から、

鉄道

好

きの父は

多く

夢はに

を

話

してくれ

た。

知

日 本 ず 胸 1 が ワ でいる。番長い 熱くなっ ライトエクス 札距 札幌と大阪を結ぶ去距離を走る寝台特急 た V ス 走急

> \mathcal{O} 中に

現れ

明

え

7

トの 大

私

もの ら題 < 0 距 とな た 一でも、正のうち、のうち、 ならず多 彭 列 は 日 0 車に 約 ちの 本た。 惜 \mathcal{O} ラ 五. 1 まれ 豪華 一人だった。 ス \mathcal{O} 百 ŀ 景 ラ 色な な 口 に、事 ンは、 が 内 b ŧ 鉄 ŧ 及 され、 道 大 廃 W きなと フ車 奕 ア

を

はは、車た私をから、一般を発 姿 文車中車いそみ な見せようと二 でに 線 0 の想い 何は ま で連 時 ダ 間 1 平 -成私に ヤの れて行 繰り別 ŧ, 待 る車体のことも 乱 返格 年に っす体の美しいこともあっこともあって、停み だった。 時 し 登場 蕳 魅 t 力 多したそ かを かけ、 しったためた あ 語 まる 0 V)

> そんと 夢持を 持 た 父 つまでもだった。時間 つ叶 続 4 な カン え け 0 私 6 7 \mathcal{O} れるか ŧ は 11 憧 夢間の的 n 重 لح ままだった。 余裕 لح 想 ŧ し L こなると、 た 11 \mathcal{O} は 0 なさで کے 変わ 7 、それの実的 いう 5 0 ず、

たらせ。車体の老杯 -ライトエクスプレスピーライトエクスプレスピーライトエクスプレスピープを下ろすことが決っていたもの。 だ。予想を イライ そし 7 は想 私 0 痛 V 11 ほ 心 を ため、ため、トワのため、人のの、父のの、父のの、との、とのかの、とのからのからのからない。 決 8

と。 抱 工 て決十 ス -四歳 断 た だ 0 を ののた。 迎え よう 旅 た父に 車は、 と言うの だ \vdash け -ワイライ とっては はなく、 父

洣 $\overline{\nabla}$ もし っなど 湖 P た を 飛 体力的、解高山、 が 長 段年、夢に自信 カコ な 夢を \mathcal{O} 抱な Ì Ш ド中 < \(\) 父 な 湖

見てきた L 母 \mathcal{O} 背中を

そ

して

そ

は

P

って、

きた。

え \vdash 父 す で 工 _ ク うること かと そこ 五. 近 稜 1 ス 待 を 郭 プ か 乗 見 が駅 2 レ 6 車の る で にス 乗 き は は 車 Ĺ あ 止 ま る る 関 洞 Ĕ 1 車 爺 が郭 ワ ま \mathcal{O} \mathcal{O} 和 入 泉 歌で 夫 ま の、乗 で向 1 付 け カン

祈始も叶い笑ルーるかは車 と、今か に、 顔 を ま 0 を浮 た父 0 0 \mathcal{O} とき 達ば 事の かに、 を 進かを。 夢は年 振 る 子るわて 1) 間 父 供 父 煌いべ かの目 た。 大を見つけた。 列車が でかかないのだ。 い旅頭い抱 き \mathcal{O} がつ 続 くかけ き た。サロ 無 のな私 私 っのつは 邪 夢い気 気ビ づな Ì 力

> \mathcal{O} ち 乗 車 生 غ を な で き は 0 \mathcal{O} か点 だ。 20 阪 中 ま 下山天 車駅候汕 ま 1) 7 で

っの中 < う そたな さん だ。 が で \mathcal{O} 力 0 大 す た × パ t 1 きな大きな そ \mathcal{O} -ワイラ、 思の て \mathcal{O} 0 旅 がや 1 出を持たがで父は-良 他 き 臨 \mathcal{O} 華 思 乗 時 をち方い 停 客 ク添帰 と車 出 Þ لح 8 の中 えっ プレ てく、 な 待 12 Ŋ, 0 ち配 スれそ た 時らに だたのた ょ 間れは

ま

て感

いえ が出 短 の父 \vdash そ てく 瞬の ラ父た っすい へか 旅話 間 想 \mathcal{O} がおり 姿 れ 12 車 を してくれた。 仕事で来られ れ、私は夫としてくれた。 たいけ 手ま た、 <u>\frac{1}{2}</u> ŧ 時 L る た 間 目 大 が う見 きな .焼き 旗 終 を わ 無 言振拍 付 V) ること たとともになる。 ける る手 \mathcal{O} ま と列 W ま 歓 車た のの 夢を与 できな 立労 声がめ いな ちいが ラス 12 に 0 動 尽の上き

車

を

知

浮 は 0 かいと私 ろ 声 ŧ いを そ ろ かの と悩 け を見 やん はだ りけ後 れに か心 け \mathcal{O} る 中 直言 で に葉

謝 共 0 で 私 有 はの あ 気 で ŋ だ言 遠ざか 持ちを伝 ے きたことが が つまでも手を 00二十 とう。 葉 は るそので 六 何年 振 雄 カゝ ょ 姿に、 ŋ ŋ 2 Ę 父娘 嬉 け そ L で 1

だ

を

44

筆 入

譔

随

雷

車

か

6

降

りた人

ŋ, 降 点 点であり、 車 \Box 停 でもあ 屋根もついている近くには長塔 留 所 函 折 'n どっ 長椅 返 く前 し電 いるので、 子が置 車 は、 0 格 、 好 十 かれ 始 電車 発 この 荷物を持 利用 荷物 でするの を持 0

車

地

てあ

分おきに来る電

車

一待ちに、

は

とにかく人通

りは少ない

0

ゴト 休 たった今発車 いみ所だ。 汗をぬ ンと言う音を聞 ぐい椅子に腰をおろした。 Ĺ た 言きなが ば カ ŋ ら、私は のゴトン

額

乗り 何 走 つたが 外に 年か に出てからのこかぶりに友達さ た原因だったらし 間に あ 長 わなかった。 の家を訪ね い立ち話 () た帰 が、

シー 神 り だろうか、と思っていたら、 右手にある弁天さん(厳島 四 <u>·</u> 五 でい 台の た。こん タク

折

さんが、杖をつきながら歩いて来る。

プで、個人でやって来る。

その

いや百人以上の人がグ

くとも大変な事であろう。 坂道を歩くのは、 って、 だと聞か 小さい子を背負って され お年寄りでな て納得した。

たが 次 何 運 \hat{O} カ 何やら雑談をしているようだっ」転手さん達は街路樹の下に集ま · 楽 し 電車にはまだ大分間がある。 突然大声で笑いだした。 い話でもしたのだろうか

さな子供をつれた家族組もあった。 ぞろぞろと人が歩いて来た。 クサックを背負 ŗ りたたみ式の椅子を持ったおじい ば らと人が歩いて来た。リュッらくして、どっく裏の方から った人もいれ ば、 小

/達が 行く。 横を自家用 車がどんどん通り 過ぎて

瀧

沢

鈴

どっく会社で何

か

行

事でも

0

た

 \mathcal{O} あ だろうか。 たりを見ま わ ï て誰 か 12 て 聞 こう V

としたが皆疲れ 0 た様子で歩 (V

造船の進水式がので聞けなかっ も見たかったなあと思った。造船の進水式があった事を知 の朝刊で、どっくで新 私

 $\frac{+}{-}$ 11 時 に近 い日差し は ジリジリと

暑

からけ出 を見 向 四て来てノレンを入口門いにある食堂のおば まわ 終 がり、 Ĺ ている。 腰をたたきなが ば ながらか さん が店か あ け た。 V)

なることだろう。 ばさんが店に入るの 一時を過ぎると、 又い を同 そがしく 時

45

る

1 て入口で止まり、 の中をうかがっているその姿は こからか白い る。足をふんばり、首をのば V 猫がピョンと降 店の 中 を \mathcal{O} Ļ ぞい りて 面

 \mathcal{O} 白店 この店 か。 V) 客と一緒に中に入るつも はどっく会社の側 に あ るか りな

5 なる事であろう。 昼食どきはずい分と客足が多く W る。

その様子を見ていると、つい 客待ち顔 猫はまだ入口の横に座って で・・・・・。 笑い

もとの静けさに戻った。 たくなる。 どっく帰りの人もとだえ、 電 停 は

い人が通る。 時折、 ブックを手にしていた。 カメラを下げた観光客ら その人達は殆ん どが ガ L

側 11 たも 私 ₽ あ が だ。 うったか 小 さい 頃、 家がどっく会社 \mathcal{O} 辺 ŋ は よく 歩の

あ たり 停 いり道ので 両に 側映 に画 は館 店屋 弁 が天 び 座 が

> ろいろな店 ち W でい が くだも あった。 たも \mathcal{O} \mathcal{O} お屋 だっ 2風呂屋や金屋は勿論、い 勿論

に北洋 毎 その通 日 が お祭 漁 業 りは りの 出 V 様な賑 つ も 航する前や 賑 わいであった。 やか 帰りは、

から次へと思なんともなる。 ۲ 遠くでゴト の道 次へと思い出される。 路があ \mathcal{O} 中程 ひとときを持つこの界隈、 つかしく、当時の事が次 ンゴトンと線 ったつけ。昼も夜も不 性に、 あ の有名な遊所、 路 0

む音 少しずつ電停に近づいて来た。 もう十二分も やがて電車 がする。 はその茶色の姿を見せ、 経 った \mathcal{O} カ

きし

筆 入

選

随

カシオペアで風の盆

片 出 美 子

月二 日 風 0 盆 の観光に出か

盆と世界遺産富岡製糸場」と言う、 北陸新幹線で行く!越中おわら風の 式に は 寝台 特急カシオペア& W んだが、 相部屋でも良いですが」 駄目と言う。それ

正

九

が出 北斗に来る時 シオペアが無くなるのが決まったの ちょうどこの日、 · 呼び, ていた。 名が か? ついている。 北海道新 北海道新聞 幹線 が 新 にカ 函 館

1 ぶ前 「是非、 カ :ら私 乗ってみたい」の の念願だった。 は、 だ

今年の募集

は

JR函館発着なので

九月 ラッキー。 速申し込みに行った。 風 \mathcal{O} 盆 は

二日出発を頼む。 人一室の寝台だけは知っていた 日から三日までなので、 九月

に

が 一人参加のことを と申し込

れた友、 探しがはじまり、今まで同行してく 知人にアタック。

風 シオペアには関心が無さそうだ。 風 の盆に行って無かったっけ?」と エッ!あんなに旅行好きなのに、 の盆には大抵行ったそうで、 力

本命で、 良かった。 言われたりだ。 私 なは、 踊り歩くお祭りは カシオペアに乗りたい方が やっと見つかったのは札 どうでも

の間柄。 幌の人。 隣 アーに参加した「お一人様」同士、 の席 にな 去年札 まだ友とも言えないくら り 幌か 会った瞬間殆ど同 らのサハリンツ 時

> 「お 一人?私もなの、 宜しくね

った」を何べん言われたか。 で心細かったこと、「良か れからずっと彼女は一人旅は初 つた、 めて

から

相棒

私 ったのは、 初めてなのにどうしても参加したか 名前、 の旧姓と同じのも奇遇でこの年 年齢 サハリン生まれで十三歳 (同じ): 住所、 Z

今年こそと思いながら、やっとチャ で急遽引き揚げさせられたそうだ。

終わった時 ンスが来たと思ったそう。この旅が 「又何かあったら誘ってください」

と言う。 誘ってみた札幌のトシさんはあ 0

さり 「私も風 たので是非連れて行ってください 0 盆には行きたいと思って

ま

た

車

が

運

休

に

な

り、

談

L

た

6

 \mathcal{O}

浴

衣

歩きなが

5

 $\bar{\mathcal{O}}$

ŋ

L 込み 集合 組 みに \mathcal{O} になるこ 函 館 ま で は 白

約させら

ħ

来るか心 小 V 牧 ビで見てい で大水 配 だった。 た私 朝か が は、 浮 ら台 V トシさんを迎え 7 定時 風 世 列 \mathcal{O} 11 をテ 車 カゝ が 苫

乗って来ますから、 に 相 駅 方が に行 札 くため出 幌 から直にカシ ようとし 集合時 オペ た時 間 12 アに 来 7

だ誰 に合うようにタク 定が二十三時になる訳だか 明がよく れ < ください がよく分からない。二十です」と係からの電話。 • 0 てい 現 在 ない から のところ二 シー · で 行 いった。、 らと、 · 時半 何 時 間 で 'n か 半 間 予 遅 説

が が定 ンチで寝転 な 時 か ŋ たら待 間 他 半遅れ \mathcal{O} 機 人 が 12 って は で乗 7 連 V ħ 待 絡 た。 た列 つこと 済 4 遅れ 重 だ

1

る個

室

5

た

が、

る

自

分が で会

乗ろうと

心 直 変更 で心 乗るよ 0 せ 細 うに 11 カコ 0 指 たそうだ。 函館 示 が あ 0 っ相 ホ たそうで、 A で

]

更

出発し に二 一時間 た。 動かな この 時 \ <u>`</u> 日 朝 匹 時

乗り換えますが 遅れ た分を取 り返 青 森 す ため新 盛 出 幹線 又は

仙台になります え東京着。 結局、 盛岡で東北 初めて北 陸 新 医新幹線 幹線 E 乗 り換 乗 'n

ことない き 箇山 換えた。 に行く観光は削ら になった。この 人 それでも二つ後の は残念だっ ため富っ うれた。 たろう。 川からエ 行 八尾た 五や

ばなら 歩 バ く人に会うま 、スで、 駐 11 そう 車 場 派に着 で か な V てか 1) 歩か , 5 なけ 踊

n 1) に

直

行。

何 処で踊 4 子供 子が 四十人 かすかに が っている 先 頭 Ş で男女とも 6 聞 \mathcal{O} 聞こえた カン 11 ŧ \mathcal{O} 寸 分 お 体の カ らな で行 揃

> 売 入 Ł 単 元りかも れ $\tilde{\mathcal{O}}$ 純 たら良さそうだが、 悲 Ū い旋律。 れ お爺さんたち 真ん中に 淋 音楽隊 \mathcal{O} V 胡 が を

< ばらく歩い 、浴衣も この 寸 体 ば らば · て次 \mathcal{O} が 5 \hat{O} 行 団 0 てか 体。 5 0 た

中、 る途 ミプロか慣れた人か上 高 中の神社 りの集合に 岡 0 ホテルに で 踊ってい 遅れ な 着く。 手 11 だ た ように、 つ \mathcal{O} 夜セ 戻

うだ。二十 終点から富士山も見える時 転婆婆さん 三月 目 と見ら 分二 榛名湖 千円 ħ 観 光 たろう。 \mathcal{O} 馬 口 1 12 もあるそ プ ゥ エ 1

て。 光の 泊まりは 階段 目 玉 で温泉 カン 伊香 ŧ 街 保 に 温 上 泉。ここも が るの が 初 8

製糸 7 か 界遺 写真 は 産になっ はすごい 部 たば 袴を 履 開 カ 曜 放 ŋ た女 \mathcal{O} 日 だ 7 見 カ 5 が せ 出

た映 な?「ああ、 襷をかけている姿があるが、 とにかく無駄が多く忙しい旅だっ 「画のとはギャップがありすぎる。「ああ、野麦峠」の本や、昔見 週間過ぎて、JR から 現金封筒 本当か

らい欲しかった。遅れたのだけれど、お詫びのメモく分の払い戻しと思う。天候のせいでに千八百円お金が入って届く。遅れ

筆 入 選

随

ども 0) 領我が 家には黒 黒 1 薬 薬 0 真

ん中に置き二つ折りにすると左

Щ

形

0

郡部で育った祖母は、

と呼ばれる薬が

あった。

が

盛り 多かった。 ら当然のように腹痛を起こすことも は躊躇無く食う」子どもだった。 ときは有るだけ食う」「食えるときに もつ末っ子だったから本能的に「有る そしてこれも食べ盛りの兄二人を だった私は 後の食糧事情が悪 口に余す物がなかっ いときに育ち だか

だった。

呼ばれる薬が登場した。 こんなとき我が家では 「黒い 薬 لح

蓋を開い り付 にひとかたまりはぎ取る。 割り箸を上手遣い そう不快でもない匂いが漏れてくる。 母 が力を込めて黒褐色の広 てい ける。 、る黒い 微かに苦そうな、 、粘土状 に握り瓶の底に貼 オブラート の物を箸先 口瓶の L かし

る。 飲み込む。 くらいに丸め、 引き抜く。それを大豆より少し大きい 手の親指と人差し指で挟み、 いいの」と言いながら掌に乗せてくれ **唾を口中にためておいてごくっと** 水無しに飲み込むのは得意 そして必ず「水無くて 割り箸を

はない。 痛で売薬や医者の世話になった記 い薬と腹痛 この薬は良く効いた。少なくても腹 私は、 の原因が戦ってい 腹痛は少しの 間この黒 る痛 3 愔

用していた。 た何でも食べられる子どもに復帰 についたのである。そして翌朝 を我慢すれば治るという確信 ていた。父も重い二日酔い のときは服 で眠 E は Ĺ ま V)

ゲンノショウコである。

伊 藤 曉

母が 当に助けられた。 は函館に住むことになったが、その後 生還できた父の仕事の関係で我が家 ないほどの存在感だったに違い 混乱の引き揚げは、祖母無しには語れ に抑留されていた中での樺太から と我が家にいた。 婚すると、 私の母が樺太庁に勤めていた父と結 た警察官の祖父と樺太に 結核で長期に入院したときも本 祖父が亡くなった後は 終戦、父がシベリア 渡り、 次女の ばずっ Ō

なると、好きな山菜採りに毎日出かけ が元気になり家事をしなくても良く っとしていることのない人だった。母 ように山菜に詳しく、 口 数は少なかったがひとときもじ 山形育ちの祖母は当たり前 小さな背中一杯 \mathcal{O}

食卓 蕨、 に季節 ぜんま Ė 祖母が の物を背負って帰って来た。 採ってきた山 筍、 茸 等 々、 菜の載ら 我が家の 蕗 れ 0 たド である 口 ド 口 0

ない日は無かった。 ョウコである その中 Ó ノシ

使わ 真ん ゲンノショウコの釜が乗せられ が途切れると、祖母がたちまち現れて れられ煮出され始める。その ノショウコ ル中にあ 'n ってきてから ていたが食事などのため が古い釜に ったストー 干され 溢 ブも煮炊 れ ていたゲン るほ 頃は家の た。 がきに 0) ど入 強 鍋

火に掛けたり、 かき混ぜ続け、釜を火から遠ざけたり 煮 れ続けもっともっと黒くなりながら れる。その後も釜はストーブに掛けら らしのゲンノショウコは だろう。やがて、黒い煮汁を残し出が たことはない。我が家の匂いだったの い匂 つめられた。その間 いが立ちこめるが不快だと思っ 三分の けるので 一ほどにまで煮詰めら 祖母は あ 他のこともしな 焦がさない る。 は引き揚 そし してやっ

> 出来上がるまで一人の 採ってくるところから、 山形 瓶 出 に詰 身 0 \otimes 年 7

黒 V

薬

が

出

来

上

が

る

お

ば

あ

ちゃんには逢わ

ないで行くよ」

代償を求めない素朴さもすごく価値 込めた経験値や手間暇も、 薬である。 無く学問的な根拠も知らずに作った 寄りが水と火力だけで、 のあるものだったことに気付いたの めのように淡々とやってしまい しかし私が、 なんの装置も 祖母がそこに 自分のつと カン \sim

島牧村の教員に採用されたのは卒業 は、だらしないことに三十歳になって した年の十月だった。 からだった。 採用試験には受かったもの 祖母 は今で言う の私 が

. よう げら さな乗 認知症が重く寝たきりで長期に入院 と身の回 らといって困ったわけではない。布団 ているときの赴任支度にな していたし、母も体調を崩して入院し 甪 車 りの物を兄が借りてきた小 に 積めば 済 んでしまう支 らった。 だか である。 切な物の

度であった。入院中の母に「明日行く。

人もいなくなった黒い薬の瓶を行李 次の日、暫く飲んだこともない、飲む い薬持って行きなさい」と言い足した。 ね」と言った後思いついたように あちゃんはわ と言うと、 「なんもしてあげられなくてごめ 母は「 からないから」と言 いいよ、どうせおば

も分からないまま逝った。 に放り込むように入れて赴任した。 った。三十歳になってい 島牧で六年半勤め渡島に転勤 翌年二月に祖母は娘である母 た。 引っ 越 0

てはじめて祖母や祖母につながる大 薬は瓶の底で完全に干からびてい 出しもしなかった事に気付いた。 盲腸で苦しんだあの 出てきた。そういえば二日酔 の荷造りをしていたら黒い薬の 棄てることにした。 ることに気づかされ 痛 棄てる時になっ み Ó 時も 7) \mathcal{O} たの 恵 時 瓶 ŧ が な 顔

佳 作

幼 頃

友人達と蝉 の静岡の遠州灘にある小さな農村で、 私は六歳だ 戦後七○年となるが、 取りに夢中になって遊ん った。 その日、 疎 終戦の 開先 見つけた。真青な空に入道雲が昇り暑 色のなでしこの花が咲い る線路の土手に出ると、

辺りにピ てい

照明

弾、

夜空に交差するサーチラ

る 0

を カ

日

い日であった。 その時、 一人の友人が土手を登って

でい

きて 弾が落とされたんだって」 「戦争に敗けたぞ!!何処か で新型爆

と叫んだ。

が何な たように思う。 戦争に敗けたこと、そして新型爆弾 0 か充分に解らない年齢だっ

ていった。

斜面を下って、軽便鉄道の走 村民を守ってくれる里山 「帰ろう」と云うこと 海からの艦 面に防空 ように降る焼夷弾、 あるが、 私は遊びに熱中してい は東京に生れ育った。 この小さな農村に疎開するまで、私 その日が日本の大転換となる日に、 毎夜繰り返される空襲、 真昼のように光る 幼い頃の記憶で た少年だった。 雨の

砲射撃

があ

ŋ,

里山

の反対斜

ていた。

この村にも時折

店が固まり、その周りを田圃が広がっ

道路に沿って村役場・郵便

局

• 商 その向うに東西に砂利道の県道 出来た。麓に軍事用の軽便鉄道が走り、

が走

った。頂上に立つと村の中心

があり、

そこが子供達の

遊び場でもあ

部が

望

村

の中心部の真向いに小高

1 里山

でもあった。 壕が掘られ、

疲れて、

になり、

松 下 邦 夫

が、 翌朝、 んで火の海の中を逃げまわったこと、 の光、 くに鈍く響く砲弾の音に脅かされた になっていった。 か私の心は深く傷つきトラウマ状態 った都会の風景を見た頃から、い って徐々にその恐怖心から解放 L 友人達との自然の中での遊び かし、 そして夜中、 何もかも無くなって焼野原とな 疎開先での生活は、 母の着物の袖を掴 時 冷され によ 折 遠

食糧難 は持たない」と宣言され、「牛乳を飲 母のもとで、 に厳しく、 一人居た村の 終戦の翌年、 の生活 高齢出産の上、)医師か 妹は栄養不良とな は疎開 妹が生れたが、 5 家族にとっ この 乳の b) É ままで 戦 ない て特 後 唯 V \mathcal{O}

ませなさい」と教えられた。 当時、牛乳がある筈もなく、母は乳 な・ 鉄 橋 だ 鉄 橋 だ た 0 い に帰った。 敷に包み、大事に抱えながら急い

で家

こととなった。 牛を飼っている農家が村はずれに居 ることを聞き、懇願して分けてもらう

五合の空き瓶に搾り立ての牛乳を入 以来、学校に行く前、農家を訪ね、

なった。 れてもらい、持ち帰るのが私の日課と

の農家に辿り着くには子供の足では 楠の生い茂る森の小道を横ぎってそ 村の中心部から、 田 圃を通り抜け、

片道 街灯一つも無い か。 真冬の頃は、 四〇 分くらいはかかっただろう 道を歩いていくこと 未だ暗いうちに起き、

学校で習った小学唱歌を「尻取り方法」 は、恐ろしくもあり、寂しかったが、

で歌うことだった。

ユッポ 汽車 ポッポ ユツ ポ ポ ・ツポ シュ ポ

ポ

ツ

な・な・な

菜の花畠に 見わたす山の端 入日薄 れ 霞ふかし

夕月 か か ŋ 7 に お V 淡

叱られて 叱られて し・し・し

あの子は町まで お使いに

か・ か・か・か… こんときつね が な きゃ

めた。 もなくあっと云う間に農家に辿り着 こうして歌い 行き詰ったら、また別の唱歌から始 ながら歩けば、 寂 しさ

瓶に分けてくれ、重くなった瓶を風呂 農家の おじさん が 牛乳 缶 か 5 五. 合

> 脱し、元気になっていった。 戦後七○年、今こうして平和で豊か 幸い、その牛乳のお陰で妹は危機 を

時想像も出来ないことだった。 な生活が出来るようになるなんて、当

園にある慰霊碑に刻まれ 子がテレビで放映されている。その公 毎年、八月広島で平和記念式典の様 ている言葉

「安らかに眠って下さい・・・・

に静岡で暮している。 しみ、悲しみを味わわせてはならない。 妹は来年、 にその通り、幼い子供達にあの苦 古稀を迎える。 今も元気

せぬ

53

佳 作

日高本線・絵笛駅

替えと紙パンツの替え、

それ

K

お

ったりはするもの

概

てじ

と車 上が

一窓を眺

め、

すれ

違う列車 の、

一の愛称

な 0

叫ぶ男の子の姿は、

車掌さんや客室乗

時 四歳だった三男の、電車に 本を手に抱え、 持ち歩いている電車の写真満. スとを背中のリュックに入れ、い やつとお のいでたちであった。 気に入りの いざ出発。 紙 パ ックジ これが当 乗りに行く 載 の絵 つも ユー 時

リーン車を奮発したこと。 は、 だった。 ースー J 今回は長旅の疲れを心配して、 R パー北斗」。 日高線に初乗車 乗りこんだのは、おなじみの いつもとちがうの した時もそう グ

横になったり、 である。 に長 グリー 十分に外を見ることができる高さ 四歳 ン 車 時 「々座席の上に正座したり、 の三男がふつうに座 の座席の窓は広く、 ばしても足先の 上下 届か って

巻か

れた、軽快なデザインの車両であ

る。

な

足元の

フットレストの上に立ち

りと、 らって一緒に写真に写ってもらった こしてもらったり、 務員の方々の目をひいたようで、 乗車2時間 なかなかの人気であった。 制帽をかぶせても 抱

普通列 北斗」 すマークが小さくあしらわれた紺色 のボディに、鮮やかな桃色のラインが モテモテの時間を過ごした「スーパー 軍に乗り換える。 の車内から、今度は1両きりの で到着した苫小牧駅で、 日高 山 I脈を表

業都 岸に沿って東南に進み、襟裳岬に近い JR日高線は全線単線で、 市 であ る苦・ 小 牧市 を出 道央の て太平洋 工

のぼ

ŋ

短く尾根越えをし

て、

再び川

てくる区間では、川沿いに上流にさか

沿いに下

流

へと下る。その

いように

北

海道

一中央部にある太平洋岸に

点在

水 関 清

設され、 牧間 に並 様似 Ł 車が るようにして走 い区間である。この並走区間 ることもあり、 頻繁に車窓を横切る。千歳線の特急列 複線区間が並走しており、 しかしながらこの区間には、千歳線 の区間には駅が一つもなく、 である。 列車は海岸線を忠実にトレ 日 をつなぐ特急・快速・普通列車が ぶ工場地帯に平行して線路 町に至る。全線 た区 高線の列車を追い 苫小牧駅を出てから約 一間を、 鉄道愛好家 る。 列車 146. 5 Щ 並 + は坦々と走 ロ 4 抜いたりす が 札幌~苫小 0 0 海岸沿 人気 長 海 を過ぎる レースす 1 2 大路 に迫 へが高 が キ 敷 \mathcal{O} 口

る。 する集落を結んでいる路線なのであ

るが、視線は窓外から離さない める。時おり馬やサイロの色を口にす 上り下りした後には牧場が点在 そに、とにかくじっと車窓を眺めると に飽きるのではという私の心配をよ ここからである。 車や対向列車に興奮して、その ると、予想どおり併走して走る特 いうか、見つめるのである。海岸線を んで大満足の様子であったが、 する区 しかし、単調な 間 に 差 名を叫 間 し し始 5区間 [題は 急列 カン カン

ない。なかなか素直には答えら「葦毛」と、あらかじめそう教えてら「葦毛」と、あらかじめそう教えていたが、クイズを出す。茶色い毛の馬ならが、クイズを出す。茶色い毛の馬ならが、クイズを出す。茶色い毛の馬なら

になった。退屈

の気配を見てとった私

サラブレッドが駆け回り、駅の50

つめては、その名をたずねてくるよう

牧場、

岡崎牧場などなど。牧場の

り中を

メー

そのうち、車窓をよぎる馬の姿を見

毛色の馬も、「うま」と答えたりする。茶色い馬を指さして、「うま」。白い

三男は、

到着したこの駅の駅名標

Ò

出した。

し」。「ピン」とだけ言うと、「あしげ」。のすかさず、「ブブーーッ」と言うと、「あ

「ピンポーン」。

海岸・牧場・小規模な集落が順に現れそんな会話を楽しみながら、車窓に、

今から12年ほど前、はるか兵庫県の但笛駅に停車した。北海道浦河町字絵笛、度か繰り返されること2時間ほどで、度か繰り返されること2時間ほどで、渡か繰り返されること2時間ほどで、

れている。栄進牧場、江谷(ごうや)この駅は、まわり一面を牧場に囲また部落に設けられた駅である。

馬地方から入植してきた人々が拓い

いが、踏切の周囲に設置された回転盤 さ夕の牧舎への移動時間が来ると、馬追 娘けられた馬専用の踏切まである。朝・トルほど先には、牧場と牧場の間に設 い

とができる。を押して、馬を移動させる姿を見るこ

間、大喜びで、駅名を連呼し始めた。読みは同じであることを発見した瞬上から読んでも下から読んでも、そのを拾って声に出していった。そして、のらがなを見て、読み上げはじめた。

経笛駅。えふええき。口に出して読 という母音が二つ を吹いているような気がする。わずか を吹いているような気がする。わずか も含まれており、上から読んでも下か も含まれており、上から読んでも下か も含まれており、上から読んでも下か ら読んでも同じである。駅名の字の並 び、そして声に出して読んでみると短 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸 いながらも回文であることなどが醸

え」の連呼の中で、列車は静かに動きキロ、乗車時間は30分である。「えふ線も、あと残すは6駅。距離にして21.4

佳 作

イモとおビールと私

の俺ってばですね、矢鱈目鱈に

村 Щ 佳 奈

たワケなんですよね。 まって、まぁようするに結構忙しかっ 生命ゲージ4分の1くらいは使っち とかひとしきり奇声上げただけでも 量を見てうひぃーっとかひぎゃーっ 仕事が山積みでしてですね、もうその

だか難しいっぽいコトバを叫び、先輩 ージョ!! 」と意味はワカランけどなん っつけたときには俺は諸手を上げ、 「アッヒージョ!アッヒアヒアッヒ てなワケで、ヤットコその仕事をや

ケなんですね。 そいそいそと帰路についちゃったワ とか言っちゃったりしながらいそい 仕事終えたヨロコビを胸にこれまた いそいそと「お疲れさまです」とか何

ダ電機か窓を考える会社と見せかけ もそんな俺に「YDKだね!すっご ヤマ はすでに終了しちゃってるワケです てのは死人なワケです、何せ魂入って か朝起きてから仕事してる間の てもいいってコトですし、 し、ってことはもうビール飲んじゃっ んで。何せ一日の中で一番イヤな仕事 さて帰宅の途というもんはいいも なんという 俺

缶

飲めるぞぃ!

には ワケなんですね。 ウキしながら帰路を激チャしていた いかって言うと、そんくらい俺はウキ ね☆ってなもんなんです。何が言いた 是非みなさん観察して確

り支度なんか調えちゃったりして、

落ちた窓の外を横目に、

いそいそと帰

としきりはしゃい

だ後、すつかり陽

日から今週スタートじや!今日も6 だ!おおお!それより今日は日 し昨日は3号缶、情状酌量の余地アリ !? てことは今週、もうナシか!!しか 飲んだっけ?うへぇまさか 待て、週6缶と決めたのに、昨日 ビールを買って帰ろうか?い の 6 何缶 缶 W か

園にリーマンの行動展示ができた際 だから第三じゃなくてホンモノの ○スでも恐れず買うもんね、クリ○ ール買うもんね、コハクがあったらエ コハクはコクがあるけどそこはク てなワケでして俺ってば給料 E

くない褒め言葉を連呼して、そしてひ いう三十路の俺にはトーテイ相 て実はその心はヤればデきるコ、だと

をしはじめる、これ、

アサ〇ヤマ

ないもんで。帰宅の途にてはじめて息

い!YDKなんじゃない!」と、

ごは る事 クリ の今日の晩ごはんって、 て思いもありつつです、そう言えば俺 キな展開すぎてみなさんお倒れにな ピカなのです!これはとにかくすご 色の後光をウッフンアッハンピッカ 須大明神様 神・南無大クリスタルクリステル スに降臨した気高きお姿 チャしているワケです。脳 クモゾモゾグヘグへ、妄想しなが んだよねー、なあんてウキウキワクワ がある、 \ \ リスタル、 いんです!ほんとです!! : 貰っ V ところ、が !!! ここで、かなりゲキテ ーんな揃って芽吹い ウケアイなので申し訳ナイ スタルはやっぱりちょいと違う カコ んはなんとイ わいい」とか「生命力ってすご おこしてみれば、 たイモを消費しきれずに 、何かがスッとし と言うべきか、 何 が鎮座ましまし か が スッとし モの 、塩煮な 今日 とつらつらと クリステ てるけどコ ちまって 震に こてん の我が てコ 0 は だ 俺 0 です 恵比 なっ ハ . Б ル ょ V グ \mathcal{O} ク 祭 É 激 た 0 ク ね 晩 だ! 膨ら ばら、 け ツ ! されい!我が祭神・南無滝川 たり食わなきゃならんのだった、 のです!何が言いたいかというと、 ナマンダブナマンダブ、というワケな ル恵比須如来様、どうぞコヤツを でも締め上げられた日にはエライコ 芽をさら りしたら夢枕にイモが立っておのれ り間違っ だ年賀状のイモ モ腐ったらもったいないから今日あ イソさ連れて行っておくんなんし ッチャだよな! えええ モ ね 0 の芽って毒があるって言うし、 嗚 なの ということなのですね。エ〇スで !」とか言 1 呼 見届けたま みきった俺 どうかおイモ様、 1 モで見事に打ち砕 です。 て捨 に とか 日 触 中あ 言 手 てることにでも 1っては 判作るには へ君よ!と、 Ċ のように伸ば 1 0 んなに ながら: 夢の食卓 ٧١ いくわば 4 成 た 頑張 伸びきった 仏 早 ŧ か は こういう l クリ〇テ 1 0 かった 腐りか してくだ な らくわ して首 i 0 た った ハラ まか イ \mathcal{O} \mathcal{O} い なあ カゝ ! いい 食い者』と呼ぶに相応しい感じ くわからんのですけどね。 帰 に りはそういう事なんです。 ってやっぱり偉大なんだな、と。 せるんだから、俺ってばめっちゃ燃費 って今日 散らかし男』に「あれ、イモなんか食 れていた『魔神・スサノオのイモ す!あ、コレ、俺のことですよろ す様はまさしく『荒野の荒 鼻息荒く、荒々しくイモを食い う!!と。 を讃えただけなんですよね まぁしかし、です。そんな荒れ 0 ! 今日 んて思わ んじゃね!我ながら優秀だわあ」 くっそうチッ て食うも 誰に怒ってんだか自分でもよ のあ は あ せ んだけの量の仕事こな 0) W てくれる、 が な 芽吹い 丰 シ 仕

食い

に荒

結局、

おビール様

ョウ許さん

闘牛

如く

れくれ

イモ

散 \dot{o}

らか

しなんで

たイ

Ŧ 0

だと

事

L

た

佳 作

屋 感

金

子

智

昭

飯 雑

昨年春縁あって一人函館に越してき

に決めた。

は夜を外食にして手を抜こうという事 うもこれで中々忙しい。そこで週に一遍 りにあれこれ努力をしたのであるが、他 の方が良いに決まっていた。それで私な うせ食べるなら不味い物より美味い物 とは言え矢張り一日三食食べたいし、ど あった。それでもいくら食に関心がない たのでのっけから分からぬ事だらけで また食に関心が極めて薄い性質であっ 私は料理に対しては何らの心得もなく、 た。中でも私を悩ませたのは料理である。 始めてみると日々戸惑う事の連続だっ ように感じていた。しかし、いざ生活を きたので多少生活力は身についている 中学、高校と親元を離れて寮生活をして に勉強だってしなくてはいけないし、ど 一人暮らしは初めてではあったが

> があるので、むしろ人のいない方がかえ て函館の学校へ進学したようなところ からすれば人が居すぎる所が嫌であえ もまばらで、私以外の客がいないという り立てて広くはなく、客の方もいつ来て ここへ通った。店はと言うと店主が一人 変に利便が良いので私は毎週のように 安いだけでなく、私の家からも近くて大 頗る安い定食屋が一軒あった。 ここは只 ような事もしばしばあった。もっとも私 で切り盛りしているような所で、店内取 いるのだが、西部地区は市電通り沿いに って都合が良かった。 私がこの定食屋を初めて訪れたのは 私は通学の都合上西部地区に住んで

> > に顔も覚えられ、世間話位はするような に訪れていたものだからいつしか店主 毎週大体決まった曜日の決まった時間 得意客だった訳では勿論ない。それでも る。もっとも私の他に同輩数名もここで してお得意さんの位置を占めたのであ くなった。以来私がその跡を継ぐように の夏に由あって函館を去らねばならな ていた。しかし残念ながらY先輩、 倒見が良く私達の間では中々に慕われ た。このY先輩、関西の出身で大変に面 う先輩もこの定食屋をよく利用してい で同じマンションに住んでいたYとい しばしば飯を食べていたので私一人が

仲になった。

ように思う。その頃はまだ学年が一つ上 まだ一年生の五月の連休明け位だった

に時あまり喋る人のようには見えなかた。ところがY先輩曰くそう見えて案外によく喋るのだそうである。私も通う外によく喋るのだそうである。私も通うがはいまで度などは新作メニューであるである。異郷の地で人のありがたさを感である。異郷の地で人のようには見えなかに時あまり喋る人のようには見えなかに時あまり喋る人のようには見えなか

私は結局この店に一年近く通った事 私は結局この店に一年近く通った事 を食いに行った事もあった。店主さぞ 飯を食いに行った事もあった。店主さぞ 個月の中旬の事、矢張り温泉の帰りに結 四月の中旬の事、矢張り温泉の帰りに結 大変でここへ来た。その翌週今度は 一人で来たが、不思議とシャッターが閉 まっている。張り紙のような物も見えず まっている。張り紙のような物も見えず なは一抹の不安を感じたが、前にも臨時 私は一抹の不安を感じたが、前にも臨時 私は一抹の不安を感じたが、前にも臨時 ないたのだからそれ程心配にはならなか ったのだからそれ程心配にはならなか

開いていない。張り紙の如きもなかった。

ではないかと期待をして毎週店の前にではないかと期待をして毎週店の前ににした所で私に何も言わなかったのはにした所で私に何も言わなかったのはにした所で私に何も言わなかったのはが囁かれるようになっが普通である。店主の身かであるし、言わないにせよ張り紙の一かでらい出すのが普通である。店主の身がいた。俄かに我々の間で飯屋閉店説のがいた。俄かに我々の間で飯屋閉店説のがいた。俄かに我々の間で飯屋閉店説のがいた。

た店は閉めると言う。かくして私の馴染の変目倒れられ、ずっと入院されていたの変目倒れられ、ずっと入院されていたの変目倒れられ、ずっと入院されていたのでそうである。もう体力が持たないとのでそうである。もう体力が持たないとのでそうである。もう体力が持たない。

いたいと願うばかりである。店主には是非とも早く元気になって貰ある。これ程残念な事があるだろうか。みの定食屋も数多き西部地区のシャッみの定食屋も数多き西部地区のシャッ

59

で、仕方なく駅のほうでラーメンなど食

は行ってみた。 それでも閉まっているの

べたりもした。

佳 作

震災の日のビートルズ

Ш

崎

孝

博

がある音楽だった。 トルズ・・・僕にとって忘れがたい思い と、ふと独り言を言ってしまった。ビー かっている。「ああ、ビートルズの曲だ」 入るとコーヒーの香りが漂う。音楽がか 西部地区にある喫茶店は趣がある。店に 仕事が休みの日、僕は函館の街を歩く。 として名高い函館は魅力あふれている。 函館に引っ越してきた。国際観光都市

じめた中学生の時には、ジョン・レノン の詩を訳した。 の曲を好んで弾いていた。英語を学びは トーンを習っていた頃には、ビートルズ 頃から聴いていた。小学生時代、エレク もともと僕はビートルズを子どもの

を耳にした時、 な子ども時代のことではなかった。身も 僕が函館の喫茶店でビートルズの曲 心に浮かんだのは、そん

> だった。 心も震えた東日本大震災の日のことだ った。震災の日に聴いたビートルズの歌

郷里の釧路で何度も震度六を経験して 中、大変な揺れが襲った。僕はこれまで いる。しかし、東日本大震災の揺れは、 に言語聴覚士として勤めていた。三月十 一日午後二時四十六分、リハビリの仕事 二〇一一年、僕は岩手県藤沢町の病院

釧路で経験した地震を上回るものだっ

た。病院が倒壊してしまうのではという

抱くようにして聴いた。 で、ラジオだけが頼りだった。ラジオを えながら一夜を過ごした。真っ暗な部屋 暖房を使うことはできなかった。オーバ と部屋は散乱していた。停電しており、 恐怖を感じた。職場から家に帰ってみる ―を着て、布団にくるまって、寒さに震

> 者であふれかえっているという。 報道されていた。首都圏では、帰宅困難 が出たこと、原発事故が起こったことが ラジオでは、津波が襲い、大変な被害

りします」と言った。 た。そして、「ビートルズの音楽をお送 ラジオのパーソナリティは、励まし続け ートルズの音楽を、ラジオは流し続けた。 そういう震災報道の合間をぬってビ

に温かかった。癒してくれた。これは、 屋に響き渡った。その音楽は毛布のよう た。ポール・マッカートニーの歌声が部 これまで経験したことがない音楽だっ いた。そんな状況で聴くビートルズは、 に流れる。寒さに震え、身も心も凍えて ビートルズの代表曲が、震災情報と交互 イエスタディ、レットイットビー・・・

僕だけではなく、被害にあったすべての

大がそう感じたのではないかと思う。本波にあった人、原発事故にあった人、帰宅困難者等すべての人々にビートル帰宅困難者等すべての人々にビートル帰宅困難者等すべての人々にビートルのなか、ビートルズの音楽がすべてを包のなか、ビートルズの音楽がすべてを包めなか、ビートルズの音楽がすべてを包めるか、ビートルズの音楽がすべてを包含されている。

でである。 で一一年三月十一日の、あの日のことを ○一一年三月十一日の、あの日のことを 思い出す。ビートルズの音楽というのは、 といろう。震災の日のラジオを思い起こ でだろう。震災の日のラジオを思い起こ でであった。 震災から四年半が過ぎた。けれども、 震災から四年半が過ぎた。けれども、 にはあった。

選 評

中 央 図 妆 書 館 は 馬 今 年 俊 か 6 明 貸

诼

館

市

出し を切った。 月に始ま 来の方式を継承するということで、 文芸」にかかわる業務もすべて市の従 に委託、 者であるT 部門に つ 運営され R た作品募集からスター 加え管理部 С <u>(図</u> てい 書館 る。 門 流 ŧ 函 通 指 セ 定管 館 ン 市 ター 七 1 玾 民

い年齢 完成 った。 なので読 考に悩むことになった。 のは歓迎すべきことであるが、 れの世代に関わる題材 ンに並んで新人の応募が増え、それぞ ば、 ては 随 数の上では微増であ 度と内 |筆部門の応募状況につい 市民文芸の趣旨か V 層 ちい から作品 でもら 容の話 ち選評に が出されるという 題性という点 の作品 触 その経緯 . Б るが れ V たつ 0 作品 て幅広 記が目立 ベ 7 もり ï で選 テラ いえ 0 \mathcal{O}

涿 館市民文芸」 の冊子刊行につい

ている。

まま引き継 少部数発行になっており、それ 五. 年度から 予算の 職員 がれることになるようだ。 切り詰めにより平 の手造りによる限定 成 もその

るのである。伝統ある市民文芸を市 数も増え、そのレベルの向上も図られ 存続の生命線であり、ひとりでも多く をみなさんにお願いしておきたい。 の手で育てていくための工夫と理 の市民に読まれることで作品 市民文芸にとって年度の冊子発行 0 心応募 解 は 民

が書かれている。後に広

島

の

原爆慰霊

と小学唱歌

を歌いながら通ったこと

野口裕子

湯灌師が遺髪の採取を勧める。 とから、 はない。 り取りたいと申し出る。 それに加え 人となった夫の遺体を納棺する際に、 描き出さ しながら再び指毛を切り取る様 重 「指毛」 別れ 元心 その指毛が見えなくなったこ 親友らと棺 難い妻の想いが、 ħ 臓 て夫 病 て味わい 0 発作 0 特 の蓋を開 、 深 い 徴 で それば、 0 ある指 V 文章になっ まざまざく に帰らぬ き大騒ぎ 毛を切り かりで 妻は、 子な

「幼き頃

生まれた る前 道々恐ろしさと寂しさとを紛らそう 牛乳を分けてもらうことを日課とし、 疎 に牛を飼 開 たば 先の かりの妹のために、登校す 静岡の小さな農村にいて、 っている農家に通っ 松下邦夫

に語 碑に るとの記載に、 牛乳で救われた妹が来年古希を迎え の中で育った体験もまた平成 るものがあるにしても、 るが、原爆被災の悲劇とは少 り継ぐべきものだろう。 刻まれた不戦の誓 戦後の 0 その時 引 ĺ 0 食糧難 ごく異 用 世 があ 代 な 0

「日高本線 ・絵笛駅」 水関 清

ように甦る。

戦後の歴史が

走馬燈

0

ている。 に乗りに行く時 、気者になったこと。 最初に当時 とすれ違う列車を瞬 愛称を連 次いでその子が 呼 四歳だった三男が 0 てす で 日高線 0 詩 たちが書 ース か に り車 Î 見分け の普通 パ 電車 中 カン 7 北

の 早 車を見て興奮する姿など、 に 乗 り換 な才気がかわい え てか らも車 らしく生き生 窓 を過ぎ 兀 一歳の ぎる 子 供 列

気付 きと描 などから、この親子が鉄道マニア、父 章、 駅や距離数、所要時間を詳細に į, 駅名が「えふえ」と回文であ た息子の喜びようを描 かれている。その後 0 F は筆致 に記す文 高 ると 線 0

かった。 子共 う少し早く分かるように書いてほし よる紀行文だが、親子の乗車目的をも にやっと気がついた。優れた描写力に 「イモとおビールと私」 (々いわゆる「のり鉄」であること

末、今日も6缶に決定。晩ご て帰宅。 積みの仕事をヤットコかたづけ ビールを何缶飲もうか 村山佳奈 飯は 迷 残り った

った、 荒れくれイモ食い者』とは俺のことと 物を調理したイモの塩煮。 いう自嘲が吐きだされ A ダジャ 若者の $\bar{\Box}$ を叩 v 仕事に追われる味 たあげく、 、た無駄 る。 その 荒 リズム П 0 背後に、 料理に れ 気な に乗 野 の

名には とあるが、筆者名は女性なので、この 日常の 「私」とあ 悲鳴があ るの り、文中には であろうか。 俺 題

活

力

 \tilde{O}

衰

退 12

拍

車

を

カン

け

るというこ

あった。

「父娘の夢」

とも合わせて、考えさせられる文章で

Ŕ 筆としてそういう難点はあるにし 身を仮託して書かれたものなのか。 ラップ調 現代の若者の心情をどう読むか、 の文章は、 女性が若い男性 随 Ē

トランを五

稜郭駅で迎える娘

脳

った特別急

トワイライトエクスプレ

スのラス

菊

봬

有紀

読者の皆さんにお聞きしたい。 金子智昭

シャッターを下ろしてしまった。 日頃利用していた定食屋。そこが突然 店主 西部 私が 時間 共に歩んだ家族への愛を語ることで 着を語ることは、この父娘にとって、 る。トワイライトエクスプレスへの愛 章には、鉄道ファンの父と娘の の輝く閃光を目に焼き付け が流れていて読む者を惹きつけ 娘は夫と共にそ る。この 人生の

で自炊生活を送っている学生の 来て西部地 区

かった父の代わりに、

去来する。ラストランを見に来ら

れな

車での旅を実現させた時 に、父が長年の夢であ

の思い

出

が

去年の

春か

6 函館

に

「飯屋雑感

る。随筆というよりは要望を書い 活に影響していることを嘆い 地区の商店街の衰退が直に学生の生 の病気回 [復と店の再会を切望 l た投 て

もあった。

書のようだが、書かれている内容には

の恩師 在住した画伯の絵であ 語っている。展示されるの わ 世界一小 た の作品 !って描いてきた絵であるとし さな美術 で あ り、 館を 自 ŋ, 身 中学、 建 が は 六 7 +飯 る 節に 高校

であるのかどうか。若者の流出が

学生にとっ

て

函

館

は生活しやすい

ら通う学生も結構な数に上る。 短大、専門学校があり、道外、

それら 市外か 切実なも

のが

?ある。

函館には、

のは読者とのイメージの共有である。 がよく分からない。夢を語る時必要な 意識が入っていると思われるが、それ として括っていいのかどうか。また面 前も含まれており、それをアマチ 者を含めて、地方では著名な画家の名 ュアの作品」であるからとあるが のイメージが浮かばない空間に読 という評価 らが の基準には筆者 面 1 のはアマチ クユア の美

者は入っていけない。 「震災の日のビートルズ」山崎孝博

ある。 余計な説明抜きに共感を呼ぶ作品で 孤立した人々のこころを繋いだもの。 曲について書いている。災害の渦中で 臨場感とその時ラジオが流し続けた 二〇一一、三・一一の 体験。震災の

使っていた「ひきがえる」を意味する 筆者は勉強家で、本居宣長の「玉かつ たにぐく」と読むのだそうである。 」を読んで故 郷熊本で子供の頃

> とを見つけ、肥後と都の接点や方言に らに「万葉集」にもその用 言葉が古語に由来することを知る。 例 があるこ さ

て、後に「これ

百

に留めておく。北海道方言はアイヌ語 が高度、学究的でここで紹介するだけ るかの考察に似たものがあるが、 国男の「蝸牛考」にある、 の影響によるものだけではないこと の呼称が方言としてどう分布してい ついて考えを及ぼす。そのあ カタツムリ たり柳田 内容

分間という時間設定の中で、今の閑散

せいで乗りおくれた電車を待

:つ十二

0 鈴

「きえたせかいの日記 失(な)くし

についても調べてほしい。

もの」 したピカチュウのぬいぐるみ。学校ま ファストフード店の遊び場でなく

て生きているのか、 して「あいするものが欲しくて生きて た水色のノートなどなど、少女のわた なフィギュア。弟にいたずら書きされ いるのか、なくしたものが後ろめたく しが失ってきたもの での道でなくしたハムスターの 時々分からなくな が列挙される。そ 小さ

昇華させるべきテーマだろう。 の詩的考察で、散文ではなく詩として 細な感性で捉えた、失うことについて

友達の家を訪ねての帰り、立ち話 瀧沢

げなく描き出す。昔を知る人、 とした町の様子に対比させて、 感的に伝えるのはさすがの文章の力 人に、これだけの描写で町の今昔を実 「弁天」「鉄砲小路」の賑わい 今いる をさり 昔の

「故郷(ふるさと)の変遷

というべきだろう。

と膨らましてほし 栄をまとめた文章である。 に進学した頃の体験記 しまった。戦後間もなく函館の女中高 だくさんで情感がない文章になって を参考にするなど労作であるが、盛 勢、歴史、函館市に編入された後 「80才になる私」が、故郷赤川 V) の部分をも 赤川 (n) 町史 0 地

カシオペアで風の盆」 片岡美智子

ってしまう。」と結ぶ。若い女性が繊

廃 止 に な る寝 台 1特急 力 シ オペ アに

けの旅行 乗り 力とは未知との遭遇に にさせてくれる。 様子や風の を探して道を行く。 あってやっと八尾に辿り着き、 アを新幹線 天 候 たくて、 0 せい 行なのに、 盆の に乗り換え、 で遅れに遅れたカシ アの寝 踊りを確かに見た気 考えてみれ カシオペ アクシデント あ 台の 旅程 る 、アの Ō 相 がば旅 か。 変更など 個 風 捜し。 オペ 室の ・だら 0 0 盆 魅

暁

引き揚げてきて生活 家族を支えながら生きた祖 家の常備薬であった黒い 後の食糧 腹痛を救 事 った黒 情 が悪かった頃、子 『が困難 1 母の姿を、 な時代に、 薬を焦点 樺太から 供

まなすの を見つけるという構成 時行李に放り込んだ黒い \mathcal{O} いものにしている。 転勤 0 際に思いがけず出 が · 薬が、 アー てきた その後

マを深

0

で成長し、教員として任地に出発する

として描き出した作品である。

その家

「わたしの住まいはミニギャラリー」

実でジ

ヤムを作って友達に

お

裾

入院中、思い出すのは、は

「ハマナスのジャム」

読筆記、

朗読の勉強会などい

ろ

V

ろな :や朗 分け

が

あって、

そこで出

したこと。当時は、点字本の

制作

ばえが か。 が好き」と言う。 が来た時塗り上げた絵を見て「僕これ 飾られる。 n 画材を取り出して、復刻され い塗り絵に色を入れてい てその 「きいちのぬりえ」をご存知だろう 昔習ってしまってあった日本画 よい 家の玄関に 小学校の教員をしている孫 のか若い友人たちに その言 額に入れ <u>`</u> 葉がうれ そのでき た懐 5 で貰わ れて カ L \mathcal{O}

思い

早く元気になって、

4

Ĺ

なと れ

溢

れている文章。

種々

のボ

ランティ

味

を

通じ

て交歓し

たい

. と い

、う思

い

0

ため

勉強会のことなど話

題

が

飛 0

んで分かりにくい

ところ

わたしのミニギャラリー

に飾

る絵

合った奥様にケー ボランティア活動

・キ作

りを頼ま

to

が あ T が 趣

難点

をせっ の若者にも受け入れられ てもう少し ドである。 1 昭 和 せと塗 \mathcal{O} 思 い 出 0 明 7 すると昔 につな Ó Ź りえ が た喜 \bar{o} る れ 図柄 工 ŧ につい び F, 懐 が今 ソー カ

わるのではない 「託された想い」 か。

長ぶ ぞれ 設 こざは簡単な説明で終わ 触れ が 下に描かれ 開を予想させるが、相続に関 出しに謎があってドラマチックな展 失う。そして冒頭の物音である。 残された父は自分の 縁者に生前贈与していた。 めつけて、 がする。母は年上の父が先に逝くと決 定 母の初七日の夜、 っ が りである。 もなく突然倒れ、 0 立ち消えになって 父名義の家と土地を母 · と 孫 るのは、 冒頭の 世 無人 残され 住む 代 ミステリア 逝ってしまう。 0 の二階 ってい 家 母は 健 た兄妹それ ま の権 P わ 0 何 る で物音 書き ノスな た な成 利 い \mathcal{O} \mathcal{O} を ざ 前 血.

説入選

小

サンタは見ている

日 高 光

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

昭和六一年の年じゃった。

座らされて、山橋家を見ることになったんだ。十二月十五日その時初めてわしはこの家の窓際のクリスマスツリーの横にこの赤いトタンの三角屋根の中古住宅に子供が生まれてのお。

「さめ、忠臣蔵も終わったし、今日からクリスマスの準備し

のことじゃ。

はいは得意だが、体が大きいので何かに掴まって立ち上がろ階下には生まれてまだ七ヶ月の息子京平が蠢いている。はいを「ヨッコイショウイチ」と変な掛け声をかけて運んできた。こ階の納戸から去年買ったクリスマスツリーの大きな箱元気いっぱいの奥さん、貴和子さんが、朝から張り切ってい

うとしてこける運動を繰り返していた。とにかく危なくてし

プラスチックのツリーを組み立て、飾りをたくさんぶら下

ようがない。

ブルの上に飾った。

さと、もうこの家はクリスマスモードだ。それを小さなテー枝の下で踊っていた。お菓子のような綿をたくさんくっつけ小さなトナカイやそりが一年に一回の出番とばかり賑やかにげる。金や銀の玉、鐘やサンタの帽子、星やプレゼントの箱、

・しょうわしもその横にちょこんと座らされて、いよいよこの家の

を失うんじゃ。そしてがばって起きるんじゃ。ーのように横になって、五分くらいだけど死んだように意識た時だけ、貴和子さんは居間の真ん中で、マグロの解体ショた時だけ、貴和子さんは居間の真ん中で、マグロの解体ショとてもとてもガサツな男どもにはできない仕事じゃ。朝からとにかく小さな乳児がいるってことは本当に大変じゃのう。

やつ、夜泣きしてなかなか寝付けなかったから、完全に寝不う~ん。母親ってのは強いのう。きのうの晩だって、京平の

足のはずなのにのお。

い。安物で、この世界のコンビニに売っている、いかにも飲善その時わしはワインを飲んでいた。さすがに日本酒ではな

じゃ。いつも八時過ぎの御帰宅が多いもんなあ。信行といって、信用金庫に勤めている。今日は珍しく早い方頭が下がるのう。夕方になると、旦那が帰ってきた。旦那は乗和子さんは、起き上がると京平が散らかした部屋の掃除

(^^^。これがファミリーで。ました長まして) 景を眺めていた。幸せな新婚家庭がそこにあった。 れば、疲れは吹っ飛ぶ。後ろで貴和子がにこにこ顔でその光れば、疲れは吹っ飛ぶ。後ろで貴和子がにこにこ顔でその光 信行は京平が大好きだ。疲れ果てていても子供と遊んでい「京平、遊ぼうか、これ、ボールを拾いなさい」

か、最近煙突が無い家が多く、ドアの鍵をうまくばれないよか、最近煙突が無い家が多く、ドアの鍵をうまくばれないよのサンタ業界でも、バツ二で酔っぱらいは大丈夫か、トナカイて失敗してバツ二になってしまった。今は天涯孤独。彼は、て失敗してバツ二になってしまった。今は天涯孤独。彼は、てしまった半端者だ。おまけに二度目の結婚も、酒癖が悪くんだ。自分はというと、子供はいるが、浮気がばれて離婚しんだ。自分はというと、子供はいるが、浮気がばれて離婚しんだ。自分はというと、子供はいるが、浮気がばれて離婚しんだ。自分は思った。人間を幸せにする役割の自分は一体どうなか、最近煙突が無い家が多く、ドアの鍵をうまくばれないよ

み口爽やかなやつだ。空を見ると、ぽっかりと貼り付けたような満月が煌々と浮かんで心を和ませた。わずかに青みがかったその月にはきっとウサギが居るに違いないと思っていた。 フィンももう朝から一○本目だ。ジュースのようにクイクイワインももう朝から一○本目だ。ジュースのようにクイクイクイと喉を通過していく。このロバート―これがわしの本名だがと喉を通過していく。このロバート―これがわしの本名だがにとって酒は普通の飲料水であり、強いも弱いもなく皆だいた。に問題はなかったが、へべれけになった。だからトナカイにに問題はなかったが、へべれけになった。だからトナカイにも嫌われて、乗車拒否される始末じゃった。 他のサンタは配達の時は、トナカイたちに感謝のプレゼントを用意し、ちゃんと自宅でつくったご馳走を食べさせ、一トを用意し、ちゃんと自宅でつくったご馳走を食べさせ、一トを用意し、ちゃんと自宅でつくったご馳走を食べさせ、一トを用意し、ちゃんと自宅でつくったご馳走を食べさせ、一

他のサンタは配達の時は、トナカイたちに感謝のプレゼントを用意し、ちゃんと自宅でつくったご馳走を食べさせ、一スを買って飲ませていたそうじゃ。わしはそんな気遣いが皆無だった。住所録を渡して、さあ、行けっと偉そうにふん皆無だった。住所録を渡して、さあ、行けっと偉そうにふんでり返って鞭をふるった。最近鞭は問題になる。やる気が失せたトナカイをしつこく鞭打ちして自殺事件がおこってから、サンタに対して選定委員会が調査し始めたのだ。

奉仕すべしというものじゃった。

しじゃ。そして出た結論が、人形になって各家庭で飾られて

自棄になって忍び込んだ家で悪さをしないかなどが、北海道うに開けなくてはいけないがその技術はあるのか、それから

函館支部サンタ選定委員会で何回も討議されちまったのがわ

サンタが業界を追放になり、人形にされるか、下界に突き落ら体罰を与えられましたか』という紙が配られて、何人ものトナカイにも『あなたは、昨年のクリスマスの時、サンタかことがありますか』という紙が配られて、自白を迫られた。

った。も同類が数人やってきて、脇を抱えて強引に連行していきよも同類が数人やってきて、脇を抱えて強引に連行していきよほろ酔い加減のわしのところに同じ赤の服装をしたいかに定委員会に訴え、翌年の委員会で人形行きが決定した。

びおい、お前たち、わしをどうしよってんだ。おい、馬鹿野

計でする。 頑丈な鉄の椅子に座らせられて、固い革のベルトで身動きを出され、会議室のような部屋に入れられた。奥に設置された一晩牢屋に入れられたわしは、檻が開けられると引っ張り

したってんだ!ち、先輩にこんなことして良いと思ってんのかよ、わしが何ち、先輩にこんなことして良いと思ってんのかよ、わしが何ちい、いい加減にしてくれ。トム!「ピーター!」お前た

目の前に突き付けた。 トムと呼ばれた若めのサンタが、心苦しい顔つきで令状を

いるサンタ全員見たぞ。りえんじゃろ。お前だってやったの見たことあるぞ、ここにりえんじゃろ。お前だってやったの見たことあるぞ、ここにあのなあ、みんなやってたっぺ?なんでわしだけなの?あ

部屋にいたサンタ二○人ほどは、その爆弾発言をつらっと

「あなたの鞭打ちは常軌を越えていました。傷害事件にな無視する。

だって、動かねえんだもん、しょうがねえだろ、どうやってったのです」

た。ですからトナカイがストライキを起こしたのです。あな「あなたはトナカイにプレゼントとご馳走の提供を怠りまし配達せええってんだ。

たんだ。昔はそんなことしなかったぞ。そんな、いつからトナカイにおべんちゃら使うようになったはやるべきことをしなかったのです」

ですい。「もう一○年になりますよ。国会で決められたの忘れたん

トムが注射針から滴を吹き出して近づいてくる。ううう。覚えてない。

てくれ。
あああ、助けてくれ、頼む。何でもやるから、頼む。止め

痛かったなあ。わしは動かなくなった。いや、動けなくなっその針はわしのほっぺたを貫き、薬が注入されていった。

るせいよ。ざけんな。どうすりやいいんじゃ。「もう声も出せませんから。心でお願いします」

「大きさは、違う施術で小さくします。おそらく三〇セン

チ以内に

ふざけるな! 助けてくれ!元に戻してくれ!

「ダメです。あなたは重罪人です」

飯、どうすんだよ。

なないけど空腹感はある。それが刑罰です。あしからず」「もう食べる必要はありません。でも腹は減りますよ。死

ひでえな。超残酷だし。お前らそれでも人か!

「サンタ族です」

ずっと同じ恰好って、疲れるし!

たまんまなんてのがザラですから」 〇年片腕上げ 「我慢してください。ヒンズー教の行者は二〇年片腕上げ

「そうですね。残念ながら、向こうから会いに来れば別でわしは、キリスト教徒だっちゅうの。子供にも会えんのか?

すけど」

売れなきや、ずっと店にいるのか?

「それは運です。売れれば温かい家庭に。売れなければ最

燃やされちゃう?

終処分かもしれません」

ら、なるべく買ってちょうだいテレパシーを出し続けてくだ「そうですね。その可能性はあります。ですから客が来た

さい」

やんや、疲れるな。

「では、幸運を祈ります」

しまったのだ。わずか三○センチの人形にされてわしは次の工程に送られ、わずか三○センチの人形にされてサンタ族の函館支部の幹部たちは忙しそうに去っていった。

旦那の両親は市役所を定年してスポーツ振興の外郭団体にまった。の両親や奥さんの親がやってきて、笑顔満面のパーティが始

赤ちゃんが誕生して初めてのクリスマスってことで、旦那

も絵に描いたような真面目な夫婦だ。 勤務している山橋幸一郎と妻房江だ。堅い仕事だけに二人と

は忙しく、父若狭良造だけがやって来た。忙しい中、やんや妻貴和子の両親は五稜郭で中華料理屋を経営していて今日も絵に描いたような真面目な夫婦だ。

時間だけ抜けてきたのだ。

いつものように、どこでもやるようにご馳走らしきものが

と思いながら、初孫のクリスマスだけにバイトを雇って、三

ら立ちっぱなしでふくらはぎがビンビンだ。イ、刺身、サラダ、・・・。この日のために貴和子さんは朝かテーブルに並んだ。ケンタッキーフライドチキン、エビフラ

だと中華屋の良造が口火を切る。浩一郎は景気はあまり関係エビスビールで乾杯する。今年はいい年だ、景気は上向き

うな気がした。

さん愛想を振りまくと、幸せが香水のようにふりまかれるよは可愛い。信行が抱っこして離乳食を食べさせ、京平がさんす係だ。京平が屈託ない笑顔で場を和ませる。本当に未満児ないが、にこにこしながら話を合わせる。信行は京平をあやないが、にこにこしながら話を合わせる。信行は京平をあや

父信行の膝を降りると、よつんばいで突進してきた。 さん余るだけ食ってっけど、わしは食ってねえから。くそお。 楽しそうだな。 腹あ減ったなあ。 おめえ達はたくくそお。 楽しそうだな。 腹あ減ったなあ。 おめえ達はたくくそお。 楽しそうだな。 腹あ減ったなあ。 おめえ達はたく

京平はサンタを掴むと、思い切り抱きしめた。やべえ。気付かれたか。

く、苦しい。やべえ。苦しいし。

ぺろ舐める。 その音にならない声を感覚で感じ取ったのか、京平はぺろ

うわあ、やめとくれ。気持ち悪い!

が出るんです」 んですよ。けっこうしっかり作ってあるでしょ。んで、音楽んですよ。けっこうしっかり作ってあるでしょ。んで、音楽

った一万か、わしの価値は。安いのお。そうか、わしって音楽が鳴るんだ。知らんかった。でもた

を共有したのだ。わずか数秒。誰かが『きよしこの夜』を口を切した。部屋の電気を消すと、その周りだけ温かさが包んでいる。幸福な時間だった。なんだろう、この懐かしい場面でいる。幸福な時間だった。なんだろう、この懐かしい場面でいる。幸福な時間だった。なんだろう、この懐かしい場面でいる。部屋の電気を消すと、その周りだけ温かさが包んを灯した。部屋の電気を消すと、その周りだけ温かさが包んを灯した。部屋の電気を消すと、その周りだけ温かさが包んを打したのだ。わずか数秒。誰かが『きよしこの夜』を口に、忙しい人も忙しくない人も集まって、時間と場所と幸せいる。

「クリスマスだね」ずさみだした。

パーティだ。 大きくなってずっとやってないので、久しぶりのクリスマス大きくなってずっとやってないので、久しぶりのクリスマス

甲斐もあろうってもんだ。いいね。これでわしもわざわざフィンランドから出てきた

そうだ。良造はケーキを食べると、タクシーを呼んで先に失苦手ですと言っていた中華屋良造も久しぶりのケーキに満足の口の中に広がると、顔全部で喜んだ。わたしは甘いものはケーキを切り分けて、京平にも食べさせる。甘い味が京平

「すみませんね。忙しいところ」

「いやあ、楽しかったです。久しぶりのクリスマスで。ま

がる。 良造が帰ると、幸一郎と房江が京平を抱っこして猫っ可愛

「お義母さんも風邪に気を付けてください。インフルエン「ほんと初孫は可愛いねえ。 風邪ひかないようにね」

「そうねえ。お父様、大変ね。今日は何時まで営業するの?」ザも流行ってますから」

「十二時まではやってますね。かきいれ時ですからね」

「お母様にもよろしくね

いいね。この夫婦、このまま普通に幸せな家庭を築いてく熟年夫婦はタクシーを頼んで帰っていった。

れよ。よろしくな。

納戸に連行された。これから一年寝て暮らさなければいけなーわしは二十六日の昼一時に棺桶のような箱に入れられて、

い。これが刑罰だ。

その光の細い帯を這うムカデを、主人公が捕まえて口に運ぶ画『パピヨン』でも、一条の光が絶望から救ってくれたのだ。はないだろう。ステーブマックイーンが演じた脱獄の名作映辺りに光は全くない。独房でもこうまで完璧に真っ暗な所

暗いけど、眠れなかった。これから嫌でも一年寝ていなけ

はそのあと何回もこっそりと通い、それを嫉妬深い仲間に発控えよう。でも、それは一夜の過ちに終わらなかった。わし

を潤してください。大変ですねえ、今日は何件目?」ああ、わしって本当にバカだったなあ。二回も離婚して、もぐーすか寝て、良い女が流し目でわしを見たんだ。「あら、サンタさん?うわあ、お会いしたかったわ、どうぞ、まず喉サンタさん?うわあ、お会いしたかったわ、どうぞ、まず喉サンタさん?うわあ、お会いしたかったわ、どうも寝付けなかった。ればいけないと思うと、どうも寝付けなかった。

「一〇軒目です」

活になった。かなり荒れた生活になった。サンタタウンの酒辛かった。二人の幼い子供とも別れ、たった一人きりの生給六か月の処分をくらい、妻は離婚届を提出してきたんじや。見されて選定委員会にチクられ、妻にも伝わった。わしは減

うもない。情けない。
ンだな。でもやっぱり酒癖悪くてまた離婚じゃ。ああ、しょの姉ちゃんと良い仲になって結婚したけど、よくあるパター場で酔いつぶれて、倒れていた俺を介抱してくれたスナック

ても真っ暗。こりや地獄じや。長いなあ。一年真っ暗なんだぞ。眼が覚めても真っ暗。寝

の一年がたった。 長い長い一年じゃった。時々納戸に灯りが灯され、貴和子長い長い一年じゃった。時々納戸に灯りが灯され、貴和子長い長い一年じゃった。時々納戸に灯りが灯され、貴和子長い長い一年じゃった。時々納戸に灯りが灯され、貴和子

来るんじゃ。隙間から一筋の光が入ってきた。パピョンだ。

ついに箱が持ち上げられた。いやったー!ついにまた光が

成せばなるか。

クリスマスツリーの横でちょこんと座らせられて、またわあの独房に戻らないと。

つくなどのようななあることで表現しているのない頼むよ。のように発射しているのに、それが分かんねえのかな、おいしは人形のふりをした。心は元気で文句ばっかりバズーカ砲

9。脳梗塞で倒れた患者のリハビリみたいに、必死に手足をやればできるはずだ。成せばなる。成さねばならぬ、何事わしはその日から体を動かすことを練習し出した。

動かそうとした。

い盛りだが、とにかく物をいじってはぶん投げる。何でもし京平がうるさい。とにかく動きまわる。一才七カ月の可愛今年の山橋家は去年と違っていた。

これは強敵だ。クリスマスまでに何度も投げられて、実はやぶるし何でも噛む。

打撲だらけになってしまった。

これがリハビリってやつじゃろうか?少し動いたんじゃ。わずかだが、少し動いたんじゃ。わずかだが、少し動いたんじゃ。痛くて仕方がない時、必死に手足を動かそうと思っていたら、痛てええ。この野郎!と思うが、どうしようもない。だが、

週間以上ある。三週間あれば、何とかなるのでは、と。年は十二月一日からこの居間に飾られた。と言うことは、三あらん限りの声を出してみた。無駄っぽい努力が続いた。今わしは必死に頑張って手足を動かすことを試みた。それと少しでも動くってことは、復活もありうるか?

の家には誰も居なかった。が明日のために買い物に出て、京平も連れて行ったので、こかそうな光が居間の絨毯を黄金色に染めている。貴和子さんるという昼間だった。雪が止んで、空には青空が広がり、温るれは十二月二十三日。明日はイブのホームパーテイがあ

やった!のいに立ち上がったぞ。腕も上がるし、おお、っと曲がり、立ち上がることができたんだ。二日前からかなりいい感触であったが、ついに足がぐぐう

「やった!」

指も曲がる。

うはああ、大丈夫か。 下を見下ろすと、二階の窓から飛び降りるくらいの高さだ。 なんと、声まで出た。わしは、わしは復活したんじゃ。

になると、面白い。隠れるところがたくさんある。し痛いが、そんなことは我慢じや。わしは歩き出した。小人流れ、床にどしんと体がぶつかった。着地なんとか成功。少流れ、感動を誘うように。俺の頭の中をパピョンのテーマが楽が上海壁から飛び降りて、幸せに暮らしたとテーマ音楽がわしは一か八か飛び降りたんじや。まるでパピョンが最後

んなことは、気にならない。ああ、腹あ、減った。自由って何ていいんだ。体が動く。少し打撲して痛いけどそわしは今までの鬱憤を晴らすように飛んで歩いた。ああ、

これは面白いぞ

はいいのである。
当たり前だ。小人は力が足りないのだ。まてよ、何かをこの当たり前だ。小人は力が足りないのだ。まてよ、何かをこの当たり前がある。

わしは周りをぐるりと見渡した。京平がとっ散らかしたこ

隙間に挟めば。

うと扉があいた。 こ○センチの定規が良い具合に落ちていた。わしはそれを抱二○センチの定規が良い具合に落ちていた。わしはそれを抱の居間に、ないか?薄い板状のもの。あったああ。定規だ。

のコロッケとキャベツがサランラップに包まれて置かれてあそこにも渾身の力で上がり、ついに念願の食料の皿だ。昨日引き出しの端に必死に上がった。そして次に冷凍庫をあけ、上に位置する残り物の皿だ。一番下の野菜室をあけ、そこの灯りがついた冷蔵庫から冷気が伝わる。目指すは半分より

った。

まりちょっと減ったという感じに。
かここに入ったという痕跡を残してはならないのだ。コロッがここに入ったという痕跡を残してはならないのだ。コロッら、空腹を満たすと、慎重にたどってきた行程を戻る。何かぶりついた。一年ぶりの飯だった。顔中芋だらけになりながぶりついた。一年ぶりの飯だった。顔中芋だらけになりながやった。美味そうだ。

あった。これだ。やばい。どうしよう。まずいな。

これでなんとか上がってやろう。勢いをつければなんとかわしは、大きな絵本が床に落ちているのを発見した。

靴下を脱いで、ポケットに入れ、再びトライした。せた、と気づく。靴下はいたまんまだと滑りやすい。わしは走だ。一回目は途中でこけて顎を打ってそのまま滑り落ちた。おりに置いた。そして後ろに下がると掛け声あげて全力疾わしはその大判の堅い本を、小さなテーブルに梯子をかけなる。

ない。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

を開けたのとほぼ同時だった。

こけながらわしは両手を伸ばだっだっだっ

らのRk反帰りで。 その晩、旦那の信行はまた午前様だった。十二月はもう七回せない。これからは慎重にすべし、と自戒する。 セーフ。わしは心で叫んだ。もう声が出ちゃうので声は出

おいおい、大丈夫か?俺だって酷かったけど、お前さあ、

わしは自分のことを棚に上げて諫めたくなった。旦那が帰奥さん大変だって分かんないかなあ。

寝室を開けると、奥さんの隣に普段敷いてあるはずの布団がスーツをソファに投げ、ワイシャツを脱ぎ、ズボンを下げた。泥みたいに侵入してきた。台所でコップ一杯の水を飲み干し、ってきたのは三時だ。さすがにそおっとドアを開けて、コソってきたのは三時だ。

「何時だと思ってんの!何回飲んでくりゃ気がすむの!いて背中を向けていた妻貴和子は烈火のごとく怒り出した。布団くらい敷いとけよ。と小さく文句を言った瞬間、起き

い加減にして!」

ったくらいだ。 子の大変さは俺が一番知っている。よっぽど俺も参戦したか泣き喚くように貴和子は怒りだした。そりゃそうだ、貴和

つトゲが感じられる。それな別しい夫婦喧嘩すんだな、そっからバトルだった。こんな激しい夫婦喧嘩すんだな、お互いを見席で観れる俺は果報者だ。いや、それは不穏当な発言か。席で観れるでは果報者だ。いや、それは不穏当な発言か。

いイブのパーテイになるはずだったが、肝心の世帯主信行が次の日、イブの夜。両方の両親がまた顔を合わせた。楽しああ、わしん時もそうだったな。そうそう。思い出したよ。

居なかった。

「信行が居なくてすみません」

この家を蔽っていた。

さの家を蔽っていた。

さの家を蔽っていた。

しかし帰って来なかった。京平は眠くれ茶も何杯も飲んだ。しかし帰って来なかった。京平は眠くれ時になったが信行は帰って来なかった。ケーキも食べて、れ時になったが信行は帰って来なかった。 大時から始まって、本一郎はのっけから良造夫婦に詫びた。 乾杯して世間話に幸一郎はのっけから良造夫婦に詫びた。 乾杯して世間話に

「そろそろ帰ります。良いお年を」

が心配して訊ねた。 良造夫婦は寂しそうに帰っていった。残された幸一郎夫婦

で抱え込まないで話して欲しいんだ」とこあるから。貴和子さん、なにか心配事あったら、ひとり「なにか、あった?相談してくれないか。あいつも我儘な

「そうよ。こんな日に帰って来ないなんておかしいもんね

貴和子は、最近の信行の行動を彼の両親に告白した。

二人は肩を落として寒空の中帰っていった。「そうか。宴会が多すぎるな。それではいかんなあ

互いに背中を向けて寝たふりをしたのだった。失った。とてもお互いに話をする勇気がなかった。そしてお信行が帰ってきたのは、十一時で、さすがに夫婦は会話を

次の日、わしは逃亡を試みた。決行は午後。京平が暴れて

は気づかれず、二十六日を迎えた。は気づかれず、二十六日を迎えた。ない状態で、ほとんどお通夜のようだったが、わしの不存在いていないようだ。その日、信行は普通に帰宅、会話が全くい、言葉にならない。幸いわしがいなくなったことに気づるが、言葉にならない。幸いわしがいなくなったことに気づるが、言葉にならない。幸いわしがいなくなったことに気づ

の、って騒ぎだした。やわしを片付けようとして、あれ?サンタさん、どこ行ったやわしを片付けようとして、あれ?サンタさん、どこ行った二十六日の午後だ。いつも超忙しい貴和子さんが、ツリー

くらなきゃないし、どこ?どこなの?」なさい。ママ、忙しいんだから、大掃除もあるし、お節もつ「京平だね。京ちゃん、どこに隠したの?ちょっと、教え

やった。わしは逃亡者だ。必ず逃げてみせる。

ない。 貴和子さんは言葉がまだ喋れない京平に迫るが、埒が明か

のど。その日から、わしはこっそりと隠れて住む同居人になった体し、箱に収納して、わしのことは忘れてしまったようだ。体し、箱に収納して、わしのことは忘れてしまったようだ。

気味になった貴和子さんは、帰って来ない旦那に恨みの感情気味になった貴和子さんは、帰って来ない旦那に恨みの感情ら一年持たなかった。旦那信行の帰宅が遅い理由はやっぱりら一年持たなかった。旦那信行の帰宅が遅い理由はやっぱりら一年持たなかった。旦那信行の帰宅が遅い理由はやっぱりた。実際に一○か月もの間、小さい子を抱えてノイローゼした。実際に一○か月もの間、小さい子を抱えてノイローゼした。実際につかります。

されて忙しい毎日になった。の父が脳溢血で急死、母も病気になると、中華屋を一手に任の父が脳溢血で急死、母も病気になると、中華屋を一手に任い、京平も実家に連れて行くことが多くなり、わしはこの家家庭になった。それからは貴和子さんが実家の中華屋を手伝家庭になった。それからは貴和子さんが実家の中華屋を手伝

そうなると保育園に入れていた京平も言うことをきかない

高校は行かず、家には寄りつかず。 子供になり、小学校でも問題児に。中学校では非行少年に。

国のた子になったわ」 国のた子になったわ」 国のた子になったわ」 としているで、貴和子さんに見つかったのさ。あれえ、こんなとこにあったのって彼女はわしを定位置のテーブルに座らせた。そしてたのって彼女はわしを定位置のテーブルに座らせた。そしてたのって彼女はわしを定位置のテーブルに座らせた。そしてで、貴和子さんね、寂しいのか、わしに話しかけるんだよ。で、貴和子さんね、寂しいのか、わしに話しかけるんだよ。で、貴和子さんね、寂しいのか、わしに話しかけるんだよ。で、貴和子さんね、寂しいのか、わしに話しかけるんだい。 国のた子になったわ」

きっと。だから荒れるんだよ)てやれなかったから、学校行っても何にも分からないんだよ、(貴和子さんが忙しいから、なかなか難しいね。勉強も見

しが必ず酒の相手になった。とには絶望感漂う貴和子さんが残された。そういう時は、わ帰ってきては暴力をふるって、金を無心して去っていく。あ帰っない中学を出ると、糸の切れた凧状態になった。たまに付くのだった。

くれたようで、わしに話しかけると貴和子さんは安心して寝

わしは心で喋った。声は出せない。だけどなにか分かって

「サンタさん。ほんとやってられないよねえ。京平はいっ

やいいけどねえ」やいどこで何してるんだろうねえ。悪いことに手を染めなき

だった。
貴和子さんはわしの眼を見ながら、ウイスキーをあおるの

にか一生懸命整理している。そして貴和子さんがやわら忙しく、物を片付けだした。な

いる、いらないとやっている。ボウルをたくさん用意して、これはいる、これはいらない、もんな。貴和子さんは、三日がかりで物を整理している。段実家に住むんじゃないだろうか。ここの維持費だって大変だ実をでした。ひょっとしてここから出ていくんじゃ?中華屋の

臓は止まりそうだ。
本棚にあった本も半分は捨てる組だ。戸棚の装飾品もほと本棚にあった本も半分は捨てる組だ。戸棚の装飾品もほとんど廃りでおいる。そして二階の納戸の物もたくさん死刑宣告とらいの思い切りで捨てまくっていく。布団も半分、つまりくらいの思い切りで捨てまくっていく。布団も半分、つまりくらいの思い切りで捨てまくっていく。布団も半分、つまりのものもバンバン捨てていた。こりや京平怒るべなあと思うのものもバンバンが表している。子供をがいらないというでは、下着類もからないのでは、からいのというでは、

ボールに放られたのだった。 しの体を持ち上げ、数秒躊躇していたが、結局捨てる方の段としてついに来た。わしの首をむんずと掴んだその手はわ

いや、わしは決してあきらめないぞ。わしはこれで終わるんだ。アーメン。

り出し、京平に小さな声で声をかけた。いいよ、と言いかけた時、わしは思わず段ボールから身を乗いかよ、と言いかけた時、わしは思わず段ボールから身を乗何枚かの衣類、京平の思い出の品々が助けられ、さあもう

ら』
『頼む。助けてくれ。お前さんの守り神になってあげるか

しかない。
しかない。
とっちにしても死ぬんだ。一か八かに合わせて目を閉じた。どっちにしても死ぬんだ。一か八かした。わしはもう一か八かだ。仏教徒のように両手を顔の前、京平は段ボールの中を舐めるように見回し、わしを見下ろりきつる京平。ま、まさか。な、なに?この人形喋った?

の輪の中心におさまっている、楽しいクリスマス。ちょっと頃の幸せなクリスマス。父も母も祖父母もそろって自分がそ「京平はわしを見て、何かを思い出していた。あの、乳児の

物だと思っていたんだ。 物だと思っていたんだ。 同じ生きあの時、サンタを人形だと思っていなかったんだ、同じ生きタに抱きついて、べろべろと舐めったことを思い出していた。なに可愛がられて抱っこされてたんだっけ。京平は、このサンたんだっけ。人を見れば威嚇して恐喝するオレって、あんな毎晩遊んで歩く浮浪者のオレは、あんな幸せな家庭に生まれ待て。オレはどうなっちゃったんだ。マリファナを吸って、

行いを洗い流すように涙が体から流れ出て止まらない。なんて流したことがないのに、今までの親不孝や人でなしの京平の目から涙が滂沱として流れた。涙が止まらない。涙

わしは、この部屋の戸棚の上で、守り神になって今日も座涙が止まらない。二人とも涙腺が壊れたように嗚咽していた。数日たって京平が中華屋の二階でこう告げた。今度は母のけど、頑張ってみるよ」

説

小

入 選

たまげだ タゲシ

本 昭 治

稲

聞いただけだ。 しだった。とうさんもかあさんも、生まれたどぎの泣ぎ声を タゲシはな、どうしたものが、ひとごどもしゃべらねわら

けんかした。 ひとりで動きまわるようになると、近所のわらしと、よぐ

「タゲシ、すぐはだぐー」

「かっちゃぐし、噛みつぐんだ」

「おっかねーから、そばさ寄りつぐんでねー」

なんていわれ、近所で評判のきらわれものになってしまっ

しまつがわるい。爪のあども、歯のあども、いづまでもとれ 噛みついだら、相手が泣こうと、わめこうと、はなさねから ない。ところかまわず、噛みついだり、かっちゃいだりする。 「しゃべれねから、すぐ手が出でしまうんだべ」 と、いってくれる人もいだけど、頭や顔をはたぐばかりで

るタゲシを引きずって、近所じゅう、あやまりにいってだど。

家さかえってくるたんびに、かあさんは、いやがって暴れ

なぐなるべ。学校に上がるころまでに、なんとかなってくれ ればと、がまんしてだんだ。 とうさんもかあさんも、しゃべるようになったら、乱暴も

それがらも、タゲシの乱暴はつづいだ。

う屋さ、入れられでしまうんだよ。そしたら、もう家さもど このままだら、警察にひっぱられでいって、おそろしーいろ ら、だめだ。おめは、こごろの優し一いわらしだというごと は、ちゃんとわがってる。だがら、がまんするごとおべろ。 ってこれなぐなるんだよ。それでもいいのが」 「くやしくても、はだいだり、噛みついだり、かっちゃいだ

って、かあさんにいわれだ。

がせで、おどしてみだけど、さっぱりきぎ目ね。 けどダメだ。それでこんどは、おっかねーゆうれいの話、聞 つぐって見せだり、もちょがしたり、サルのまねして見せだ それで、もっと心配になってきて、とうとうバスで三時間 とうさんやかあさんが声を出させようと、ヒョットコの顔 そろそろ学校さ上がる日が、近ぐなってきた。

もゆられで、街の病院さつれでいった。

とごろが、医者に、

か、こころに原因があるかもしれない」 「口やのどには、なんもおかしいとこがないようです。なに

れで、そのままになってしまった。 ごろに病気があるなんて、聞いだごどもながったからな。そ と、あやふやなごといわれで、かえって心配になった。こ

され、遊んでくれるわらしもいない。 シ」とが、「クジなし」とが、「おがしなわらし」と、バガに 学校さいっても、タゲシにだれも寄りつがない。それに「オ

だんだん学校がきらいになって、とぎどぎ学校を休むよう

少しは心配へったど。 めん出して勉強してだ。それを見だ、とうさんもかあさんも、 じゃないらしくて、学校さいがなくても、とぎどぎ、ちょう それでもな、タゲシは字を書いだり計算するのは、きらい

ほうが多ぐなってしまった。 だけど、一学期も終わりごろには、学校さいぐより、休む

やんや姉ちゃんがきても、すぐやめで帰ってしまう。新しい そのころは、先生になる人がいなくて、高校出たでの兄ち なんとが、五年生にしてもらった。

> 先生が、なんにんきても、おんなじだ。 むりもない、こんな田舎だろ。どこの家でも、食うものも

食ってだから、下宿させでくれるどごなんてない。 それに、先生がひとりで暮らしたぐても、店もない。水道

ろぐにねくて、コメのかわりにジャガイモやカボチャばがり

もない。ガスも油もながったから、どうにもならない。

たんだ。そのバスだって一日に二、三本ぐらいしかねべ。 食うもの買うに、街までいぐには、バスで三時間もかがっ

それでしかたない。校長先生がタゲシだぢ五、六年生を、

教えるごとになった。

ー顔した先生でな。しかも、校長先生だったから、なおさら 先生はメガネをかげで、チョビヒゲをはやした、おっかね

ごどがおぎでしまった。 おっかねーと思うべ。 その先生がうげ持ぢになってから、タゲシには、いーやな

「ちょっと、のこりなさい」 勉強が終わって帰ろうとしたら、

と、いわれだ。

こりゃーたいへん。いっときも、学校にいたぐねータゲシ

教室がら、とび出した。ゆるやかな坂を、背なが丸めで、は なのに、のごるなんて、とんでもねー。 タゲシは、先生のいうごとが、終わるが終わらねうぢに、

っちゃぎになって、走る走る一。そのあどがら、

「まてー、タケシ、まてまてー」

校長先生がおっかげでくる。

ぎおいつぎすぎで、ころびそうになって、きてだシャツを後 ほがのわらさんども、足をとめで笑ってだ。とごろが、い

ありったけの力で暴れだ。しだども、小がらな体だべ。大人 ろがら、がにっと、つかまれでしまった。タゲシは、暴れだ。

の力にかなうわげねべ。

先生は首ったまをつかんで、力をいれできた。

け。

「イデデデ、はなせよー」

「暴れたら、もっと痛くなるぞ。いいのか」

入れできた。 んだ。そのすぎに、まだ逃げようとしたら、手にぐっと力を あんまし痛くて、おどなしぐしたら、先生の手が少しゆる

「イデデデー」

泣ぎそうになるぐれ痛くては、いぐらタゲシでも、あぎら

めるしかながったど。

先生は、首の手をはなすと、こんどはタゲシのうでをつか

のどぎは、オドゴ先生も、オナゴ先生もいだべ。はずがしく つれでいがれだのは、教室じゃなくて、職員室だった。そ

て、暴れるごどもできね。

りょう肩をおしてすわらせると、 先生は近ぐにあった椅子を引ぎ寄せで、立ってるタゲシの

> なんだ」 「怒るのにつれできたんじゃない。タケシを心配してるだけ

笑って、こういった。

それがら、腹に息をすわせで、ゆっくりはがせだ。それを、

なんかいもやったあど、 「息をはくとき、声を出すようにして」 といった。だけど、タゲシの口から、フーッと息が出だだ

つぎの日は、勉強が終わりになるころがら、カバンに勉強

道具をしまって、いぢ早ぐ、にげようとした。

をもってはだしのまま、いちもくさんに走った。とちゅうで、 「さよなら」するか、しないうちに、教室をとび出して、靴

靴をつっかけているとき、

やっぱり、追いかげてきた。

「にげるかーマテー、タケシ、マテマテー」

まだ、職員室につれもどされだ。

ぶっ殺してやる」 「このクソ、チョビヒゲおやじ。おらが大っきぐなったら、

それなのに、先生はタゲシの首から肩まで、優しぐなでで タゲシは、こごろのながでいってだ。

「体をうんと、らぐにして」 といって、声を出させようとしたんだ。

なんかいもやって、やっと、

と、声が出だどぎは、タゲシもびっくり。

ぶんの耳で聞ぐことが、でぎだんだからな。 それもそのはずだ、生まれではじめで、じぶんの声を、じ

「そら出だ、そら出だ」

職員室にいたオナゴ先生もいっしょになって、喜んでだ。 先生も、いつものこわい顔を、くしゃくしゃにして喜んだ。

このどぎはじめでタゲシは、先生のいうどおり、やろうと

いう、気持ぢになったんだ。

の壁の時計に、届けるつもりになって、出してみて」 「こんどは、声をできるだけ、ながーく、そうだな、あっち

「イーー」

と、なんかいもやった。

いちど声が出でしまうと、あどはいぐらやってもおんなじ

いい気持がしたど。 声が出だどぎ、なんだが、体が軽ーぐなっていぐような、

のどがつまってしまって、声が出でこね。 とごろが、こどばをいうどきになると、はじめのおどで、 そごで先生は、「あいうえお」を順に、「アー」とが「イー」

とが、声を出させだ。これはらぐに出だ。

次に「ウー」だ。

ひとつずづだら、出るんだな。

こんどは、「あめ」とが「うま」とが、こどばを、紙さ書い こうして、「ア」がら「ン」まで終わった。

で、読ませだ。やっぱり、はじめの出だしのおどで、つまる。 「出ないときは、あせらないで。体をらくにして、ゆっくり

息をすってから」

そのとおりやると、声が出だ。

それが終わったけ、こんどは

「教室からオルガン、はこぶから。歌は、声がすらすら出る

というから」

そのどぎは、オドゴ先生がもどってきて、職員室に二人の

先生、いだんだ。こったらどごで、歌をうだうなんて、まっ ぴらだ。

なると、こまるんだ。がまんしてくれ 「ほんとは、教室でやりたいんだが、職員室にだれもいなく

ない。 こう、優しぐいわれでしまうと、まえと違って、さがらえ

出ないのでなくて、歌わないんだ。はずがしがったんだ。 ひいで、なんど「ハイ」といっても、うだわね。いや、声が はじめは、一年生の「おうま」だった。先生がオルガンを

で、いづまでも、はずがしがっていられね。 となんとがしてくれるがもしれねっていう気持ぢがわいでい でもな、タゲシのこごろのながに、この先生だら、オラご

それで、先生のオルガンに合わせで、うだおうとした。

そしたら、不思議なごどに、

「おうまのおやこは……」

先生も、手ただいでそばにきて、 でしまった。タゲシもびっくりしたな。オドゴ先生もオナゴ 小さい声だけど、少しもつっかがらねで、らぐーにうだえ

「タケシくん、すごいすごい」

ながったことだ。 うじに、なみだまで出でしまった。こったらごと、いままで て、なんだがおがしな気持ぢになってしまったけど、しらね にこにこしていってくれだ。はずがしくって、うれしぐっ

すれでいったんだ。 んな歌をうだった。そして、だんだんはずがし気持ぢは、う それから、「ちょうちょ」「むすんでひらいて」とが、いろ

しゃべるごとも、本を読むこともでぎね。 これで、タゲシのいのごりはなぐなった。だけど、教室で 読もうとして、たち上がっても、出だしのおどが出ない。

すます力んでしまう。のどがつまって息苦しぐなって、顔が せってしまう。それでも、読もうとがんばるもんだから、ま こうしてる間に、クスクス笑い声が聞こえだりすると、あ

> のがわがるんだ。 ほどってくる。このどぎ、じぶんでも、顔が赤ぐなっていぐ

「あー、赤ぐなったー。あーがぐなった。タゲシ、ゆでダゴ

みてーになったどー」

「ほら、頭がら、ゆげ出でるー」 なんてはやされると、くやしぐてかなしくて泣ぎたぐなっ

てしまう。

ちついて、息をすってから、ゆっくり出す。わがってるだろ」 「いいか、がんばらなくていいんだ。声が出ないときこそ落 先生がいってくれる。

それが、あでられで、読もうと立ち上がってしまうと、ど

さげねな。 うしてだが、体が固ぐなってしまって、ながながでぎね。な

べ、もっとひどぐなるんだ。 しまったどぎから、教室は、いやーなとごろになってしまう。 それに、遊んでるどぎは、ほかの学年のわらさんどもいる 勉強時間でも、バガにされるのだから、先生が出でいって

ていられるのは、じぶんの家だげになった。 こうして、タゲシは人が、こわくなってしまった。安心し

すばやぐ奥の部屋ににげでしまう。 ところが、家にいでも、玄関の戸のあぐ音がしただげで、

「ごめんください、ごめんください……」

いぐら聞こえでも、息を殺してじっと戸の閉まる音に、し

んけいをつかうようになった。

「ほんとに、タゲシは五年生にもなったというのに、ろぐに

留守番もでねんだから」

してるのが、悲しがった。 かあさんは、こういってくどぐし、とうさんも、あぎれ顔

タゲシは、中学一年生になった。

間の曲がりくねった、トンネルのある道を、歩いで通った。 タゲシは中学校さいっても、本は読めね、しゃべれね、お 中学校は、四キロほど離れだ、隣り村にあった。崖と海の

がしなわらしでとおった・・

にされだんだ。 小学校のどぎより、めずらしがられ、もっと笑われ、バカ

ときどき学校さいがねんだ。 かわいそうに、いいごどはひとつもなぐて、いやになって、

ないのを確がめで、崖の細い道を登っていぐ。 朝、カバンを持って家を出でも、まえ、うしろにだれもい 一日中、虫をつかまえだり、木登りしたり、草をむしって

遊んだ。あぎだどぎは木の上ややぶの中で眠った。そして、 しえだ人がいでな。 みんなが帰るころを見はがらって、家に帰るんだ。 あるどぎ、タゲシが学校さいってねごと、かあさんに、お

「どうして、そんなごど、するのが」

れるどごは、そごよりながったからな った。見つからねように、崖の道を登って山にいった。かぐ それからも、なん日も続げで、学校さ行がねぐなってしま

一人呼ばれでしまった。 そしてるうぢに、とうとう先生がら手紙きて、かあさんと

ら、なんぼいがたべな。したども、そったらごとしたら、も っと悲しませるごとになると、がまんしてだ。 みじめだった。このままどごが遠いどごさ、いってしまえだ そのどぎのかあさんは、先生さぺこぺこ謝ってばがりいだ。

だ目してだ。足腰立ねくれ、どつかれだほうが、なんぼよが しね。タゲシは、ちらっと横顔を、見るのがやっとだ。なみ 帰り道、かあさんは一時間も、なんにもしゃべね。怒りも

ずがにしてだ。タゲシがしゃべらねくても、いつもはにぎや がなのに、みんな沈んでだ。 家さ帰ってからも、なんもいわね。妹も弟だぢまでも、し

たったひとつ、いいごといったら、中学校さいってがらも、

小学校のどぎの校長先生が 「どうしているか」

「そこまできたから」 と、たびたび、きてくれだんだ。とぎには、奥さんまで、

と、顔を出してくれだ。そのどぎはよ、タゲシのこごろが、

ばなんね、と思った。あったけーぐなってきてな、学校だけはがまんして、いがね

き気がしてきたりしたんだ。
けどな、学校のごどを思い出すと、頭が痛ぐなったり、は

いご。それでも、校長先生や奥さんにだげは、優しい気持ぢにな

習をしてだ。 ンブひろいのどぎも、だれさもわがらねように、しゃべる練ンブひろいのどぎも、だれさもわがらねように、しゃべる練

ひっくりかえったという。
いっくりかえったという。
かり方は、先生がやってくれだごとを、まねしただげ。
でぎだんだ。でも、これはタゲシだけの秘密だ。まだ、だれでぎだんだ。でも、これはタゲシだけの秘密だ。まだ、だれごとでぎだし、気をつけさえすれば、しゃべるごどだって、ことでぎだし、気をつけさえすれば、しゃべるごどだって、こうして、中学校を卒業するころには、本もすらすら読むのっくりかえったという。

- 戸学三再生こなってからは、学交こ丁ぐのも、もっとへっ食うのもやっとだったから、みじめだった。- タゲシの家は、妹と弟ふたりの五人。とうさんがいでも、-

夏には、弟どイソ舟でコンブとりをした。タゲシは、からさんと山の畑を耕し、ジャガイモやカボチャの種をまいだ。た。シケになれば、コンブやサルメンをひろい。春は、かあ中学三年生になってからは、学校に行ぐのも、もっとへっ

めだ」と、こどわられだ。 イガつけもやりたかったけど、どごの船主も「中学生はだだはちゃっこかったけど、力はあったからな。

がった。考えだごどもない。とにかぐ、早ぐかせげるだげで、うれし考えだごどもない。とにかぐ、早ぐかせげるだげで、うれしょうやく中学校を卒業して、ほっとした。高校に行ぐなど、

が降って寒いさがりだった。正月が終わると、集落で水道工事がはじまった。まだ、雪

はじめの仕事は、水をためる大きな水そうをつぐる、穴ほタゲシも、使ってもらえだんだ。出でで、年寄りばがりの工事だったおがげで、中学出だでの出でがりは、そごでかせがせでもらった。大人は出かせぎに

りだった。地面は凍ってでツルハシやスコップを、使っての

穴が深ぐなると、スコップで土を放り上げるのが、むずが穴が深ぐなると、スコップで土を放り上げるのが、むずなのにった穴に落ぢた。それでも、学校で、とくたま、じぶんのほった穴に落ぢた。それでも、学校で、とくたま、じぶんのほった、モッコをかついだ。一尺(三十三センチ)はばの、歩み板を上り下りするのは、体がふらついた。とくたま、じぶんのほった、モッコをかついだ。一尺(三十それがになると、スコップで土を放り上げるのが、むずがかれは、ひと晩寝でおぎだら、なおってだからな。

穴ほりが終わると、こんどは水道管をうめる溝ほりだ。深

冓だ。 さ三尺(約一メートル)、はば一尺五寸(約五十センチ)ぐらいの

いがったもな。 ならながった。したども、かあさんの喜ぶ顔が見れだだげで、 二百五十円だった。 同じかせぎをしても、 大人の半分にしかようやぐ月末になって、 はじめでお金をもらった。 一日、

ミミとり、サルメンとり。 工事が終わって、まだ水がしゃっこいどぎのフノリとり、

水がぬるぐなるとコナゴとり。休む間もなぐ、動ぎまわったがなるぐなるとコナゴとり。休む間もなぐ、動ぎまわった。昼も夜も、寝不足でかせぐのはきつい。それでもコン夏のコンブとりとイガつけは、ほとんど同じころにやってているどぎだげ、タゲシはいやなごとを忘れられだ。

の一角を、持ち場としてあでがわれだ。シは一人前じゃないので、だれもがきらうヘッチャギ(舳先)去年こどわられだ船主も、今年は船にのせでくれだ。タゲ

いつもフラフラして、なれでないごともあって、船よいもひそのうえ、海面がら一ばん高いので、ゆれも大きい。足元が、そごには、イガリやロープがおいであって、足場も悪い。

い胃液が出だ。船べりにつかまって、はいだ。苦しくて、ではいではいで、しまいには、はぐものがなぐなって、黄色

だいたいの時刻がわがるからな。
にとび込めだら、どんなによがべなと、なんど思ったごとが。
漁に出だら、少しぐらいの波風では、朝になるまで帰れない。船よいしてるタゲシには、夜はとてつもなぐ長い。星のい。船よいしてるタゲシには、夜はとてつもなぐ長い。星のにとび込めだら、どんなによがべなと、なんど思ったごとが。ぎるなら、ゴムガッパを脱ぎすてで、すっぱだがになって海

でいい。線に、ほんのりど明がりがさしてくると、しぜんに元気が出線に、ほんのりど明がりがさしてくると、しぜんに元気が出を明げが近ぐなれば、こんどは東の空ばっかり見だ。水平

り、イガがとれでいないんだ。こんなだから、朝になってみると、みんなの半分ぐらいよ

板にいるのはタゲシだげ。ツと、とびごんでくる。みんなダンブル(船底)にもぐって、甲へッチャギがら落下して、海面を打づ。そのたんびに波がドが高ぐなる。風に向がって船は進む。船は波に放り上げられ、海は、なぎのいい時ばかりではない。風が出でくると、波海は、なぎのいい時ばかりではない。風が出でくると、波

くても、外にいる方がいい。ったら、すぐはいでしまうのはわがってる。だがら、あぶなったら、すぐはいでしまうのはわがってる。だがら、あぶな「あぶねから、はえぐダンブルさ入れ」船頭が操舵室の小窓から叫ぶ。

ダンブルは、大漁のどきや、嵐がきたどぎに魚を入れるか

息をとめでしまうほどだ。ら、いつも魚のくさったにおいでいっぱいだ。もぐった瞬間、

って、波で流されないように、足をふんばる。甲板にすわる。そして、ヘッチャギが落下するのをみはがらのボッツ(帽子)をスッポリかぶって、ヘッチャギさ背中向けでタゲシは、イガリに体をロープでしばりつけ、頭にカッパ

ろ手で合図のひもを三回引っぱった。すぐに、エンジンのおこわくて、からだを固くしてだ。船頭はなにもいわず、後いだ。そして、タゲシは操舵室におしこまれでしまった。いうごときげねんだら、船がらおりでもらう。いいが」「あぶねっていってるの、わがらねが。流されだら、どうす「あぶねっていってるの、わがらねが。流されだら、どうす

見える。 こごからは、波がヘッチャギがらとびこんでくるのがよぐどが高鳴って、船足があがった。

とにすれ」
とにすれ」
とにすれ」
とにすれ」
とにすれいのでおぐ。聞がれだら、こごに、おらどいだごだぞ。みんなに知れだら、だまってねど。さっきのごとはだおめに、なんがあったらどうする。漁にも出られなぐなるん「いだがったが……。あんな、あぶねごと、二度とするな。

タゲシは、うなずいだ。

になった。いだぐなかったけど、ずぶぬれになった体には、ながーい夜

あの一発は、カッパのボッツをかぶっていたので、あまり

船頭が海を見わだしながらいった。「ダンブルがいやなら、なれるまで、いつもこごにいろ」

ンは焼玉だろ、振動がはげしいから、なおさらだ。寝ようと横になっても、体にあだっていだい。それにエンジうな、太くてごっつい竜骨が、横に張りめぐらされでいる。ダンブルには、ほぼ一尺ぐらいの間かくで、あばら骨のよ

どぎ、おもい出した。のがれられだ。それでも、船頭に怒られだ夜のごとを、ときのがれられだ。それでも、船頭に怒られだ夜のごとを、とき二、三日なぎの日が続いたおがげで、タゲシは船よいがら

が出で、波が立ぢはじめだ。とごろが、夜中すぎだころから、天気がいっぺんして、風今夜はなぎで、空は一面、星が出でいい気分だった。

った。しかたがない、タゲシはこごろを決めで、ダンブルにもぐ

三年目のイガつけは、なれでいだ。船よいもほとんどしなごこちを気にしてる間もなぐ、ぐっすり眠ってしまった。そのどぎは、三晩もちゃんと寝でながったもんだから、寝

ぐなっていだ。それに一人前に、あつがってもらえるのがな

によりだ。

それでも、からかわれだり、バカにされるのは、同じで、

いづもイラついでいる。

ぐらい、わがるようになっていだからな。 いい聞がせだ。学校みたいに休んでいでは、暮らしていげね これで生ぎでいぐには、がまんするしかないと、じぶんに

てくる 寒ぐなってきて、漁期が終わり近づくと、漁がうすくなっ

るので、黒いところがなぐなるまで、熾してから、ダンブル ので、ガンガンに炭火をおごして暖をとる。炭火はガスが出 停泊する。そのどぎは、みんなダンブルに入って眠る。寒い 船は夕方、出でいって夜中になると、近ぐの築港に入って

らはい出て、立ち上がった。その瞬間、たおれだような気が 漁場に向かっていだんだ。まだ、ねぼけまなぐでダンブルか 朝方、タゲシはションベにおぎだ。船は朝イガ漁のため、

「おお、気がついだが。びっくりしたなー。よがったよがっ 気がついだら、目の前にいぐつも顔があった。

こういわれで、ようやく正気にもどった。そうだ、あのど

ぎションべにおぎたんだった。

気づげに顔に水をかげられだらしい。 顔がぬれでいだ。カッパがぬがされ、上半身もぬれでいだ。 どれだげ、眠っていだのが……。

ど。いがったなー」 べな。だれにも気づかれねまま、行方不明になるどごだった 「ションべしていで、たおれだら、間違いなぐ海におぢでだ

「タゲシに死なれだら、かあさんに、なんといって、わびれ

ばいいが……。 心配したんだど」 「笑いごとですんでよがった、よがった。ひとりでションベ

よかったんだ。まだ、黒いどご、のごってだら、死んでだが におぎるどぎは、気つけろよ」「炭を、よくおごしていだから

「よぐ、海におぢながったもんだって」

タゲシもこれまで、炭火のガスで死んだ人、いだという話 船長やみんなは、こういって笑った。

は、なんべんも聞いでだけど、じぶんがこったら目に合うど

は思ってもみながった。

「きっと、タゲシのとうさん、守ってくれだんだべな」

「チンポつかまえだまま、死んだかっこなんて、おもしれー と、いう年寄りもいだ。

なんて、からかわれることもあったんだ。

わせで、なんべんも頭を下げでだ。このどぎだげはタゲシも、おごりもしねで、笑って手を合

ごとだべ・・しまで、海で死なせたぐねと思ったどしても、不思議のねーしまで、海で死なせたぐねと思ったどしても、不思議のねーたようだ。こごにいだら、弟だぢも漁師するしかねし、わらかあさんは、タゲシが漁師をするごとを、望んでいながっ

いったから、ほがの仕事なんて、でぎるわげねーしもいがながったから、ほがの仕事なんて、でぎるわげねーししたども、タゲシはしゃべらねべ。それに、ろぐに学校さ

てしまった。 とごろが、タゲシが十八の春。とつぜん、引っこしていっ

ひとり、もどってきた。こと。なんの前ぶれもなぐ、空いでだ家さ、かあさんと息子と。なんの前ぶれもなぐ、空いでだ家さ、かあさんと息子あれから、かれこれ十年ぐらいもたった、四月のはじめの

近所の人だぢは、

かあさんついでねば、どうもなんねーべさ」「それなら、タゲシにきまってべよ。ものもしゃべれねから、「とごろで、あの息子は、なんばん目だ」「よそさ行っても、うまぐいがなくて、苦労したんだべよ」

と、うわさしてだ。

んだもなー。紹介されだ。名前を聞いで、たまげだー。あのタゲシだった紹介されだ。名前を聞いで、たまげだー。あのタゲシだった、小学校の入学式に行った人たぢに、あだらしぐきた先生、

ろぐにしながった、あのタゲシがだよ。こともねー。そればがりが、学校を休んでばがりで、勉強もひとごどもしゃべらねー、学校で声をだして、本も読んだ

も普通にしゃべれるようになるごと。小学校がら中学校まで、苦労したんだべよ。タゲシが先生になるには、なにおいでたまげだ、たまげだ、ホントにたまげでしまったー。それも、しゃべるのがしごどの、学校の先生だなんて……。

ほら、タゲシがわらしのころ、やさしぐしたの、だれだっごとが、なによりもためになったでねが。それがでぎだのは、きっと、しゃべることがでぎねがった間もおしんで、はっちゃぎになって勉強したんだべよ。きっと昼間は、人よりなん倍も、かせでかせで、夜は寝る

生みてーな、生ぎ方してーって、つよーい気持ぢがあったんタゲシのこごろにはよ、きっと、なにがなんでも、あの先け。小学校のどぎの、あの校長先生だったべ。

おしまい

校の先生になれねべ。

勉強しなおして。それがら、高校も出で、大学も出ねば、学

佳 作

夜嵐のお銀

縁

莚

勇

山寺の和尚さんが、無聊を慰めるために、コタツに丸くな ポンとけりゃ ニャンとなく 猫をカンブクロに押し込んで ニャンがニャンとなく ヨーイヨイ 毬はけりたし 毬はなし 山寺の和尚さんが

るなんぞ不可能と思うが・・・、 っている猫を、紙袋に押し込んで毬に見立てて遊んだと云う 人前の猫じゃ紙袋に押し込むのさえ難しい。ましてポンと蹴 「わらべ歌」だが、現実子猫ならこんなことも出来るが、一

ふんじゃった

猫 ふんじゃった・・・・

リズミカルなコーラスで軽妙に歌われるジャズ・ソン

ようで、チャンチャンコを着せられ、引き綱につながれて散 ま近の動物である ともあれ、こんな歌に引き合いにされるほど、猫は人間の、 犬と猫はペットの双璧を占めるが、犬は牙を抜かれた虎の

足、人間固有の生活習慣病・・糖尿病・・まで貰っている。

品性を疑われるような人間もいるが・・・・、人間って案外 中にはヤリッ放しで、人目のないのを幸いにサッサと逃げる。 それでも「大」の方をするときは、人間が紙を敷くとか、或 足をあげて小便をしたりして一寸行儀の悪いのは気になるが 歩と称してのチョコマカ歩き、時偶その辺に止まっては、片 ダラシがない。どっちが飼い主か分かったもんじゃない。 いは落し物を拾って持ち帰るとか後始末までしてくれる有様 だけどペットと違って番犬って云うと、この間も新聞に出

まあ、人間にとっては事業として成り立つようだから、ペッ 今じゃペット・フードと称してわざわざ人間様が設備投資を 煮干をのっけたものを、庭の隅で食べさせてもらっていたが、 これは野生そのものと云うよりはそもそも粗野なのだろう。 ていたが、人間に噛付いて怪我させたりするのもいるから、 カロリーの食べ物、外出は自家用車で・・・、従って運動不 トも人間様に役立っていることになるが、室内で飼われ、高 し、食材を買い集めて工場生産したものをあてがわれる状態。 食べ物だって昔は残飯に残った味噌汁を掛け、だしがらの

が多くなった。 なるほど太って歩くのも大儀そうな連中を街で見掛けること

それに比べると、猫族はひとときたりとも野性を失っては

ェイ戦法は、猫族の奥の手であり、生得のものと云えよう。 隠した爪で一撃を加え、さっと身軽に逃げるヒット・アウ

爪は大事な武器なので、いつも研いでいる。 そりや中にはブクブク太って、猫族の矜持を失ったものも

断時に自動車に撥ねられてしまうこともあるけれど・・・。 こと決めたら一途な行動・・・しかしその為近頃は、道路横 咄嗟の判断力と、瞬発力が求められる。だから果断専攻、こ て猫族が、手なずけられて来た最大の要因である。「狩り」は を「狩る」と云う習性は人間共に重宝され、何千年もかかっ いるが、しなやかな身体、天性の運動神経、何にしても獲物

いんだからどうしようもない。 華麗な立体的な運動。それに比べ室内犬は吠えるしか能がな る。・・床からテレビの上、そしてテーブルへのジャンプ・・。 猫族は屋内ペットになってからも、自由に室内を飛びまわ

間のゴミ箱あさりに落ちぶれている。 いつも腹を空かせているのもいるわけで、こんなのは大体人 猫だと云っても必ずしも皆「狩り」が上手いわけではない。

> ったのである。 敢えて「野良」と名乗ったのは、私の「自由」を守りたか 申し遅れたが、私は「孤高の野良の牝」である

だから「孤高」なのである。 もなくなる。それが嫌で敢えて「野良」を選んだのである。 三食昼寝つきで何も心配することはない。その代わり「自由」 ペットになれば、「食う寝るところに住む所」は人間任せ。

使い方をされるのが心外である。 が、野良息子、野良犬、野良猫などと品性の劣る響きがする は「野良し」と云うことで、自由を愛することの表現である 何物にも束縛されない自由な天地を意味する。従って「野良」 が、「野」は「野に下る」、「野に遺賢を求める」等の「野」で、 「野良」と云うと、今流行りのホームレスのように感じる

ある。猫族と云うと、 孤独なハンターの豹、 アフリカの草原の最速のランナーのチータ、 「牝」を名乗ったのは、 実は猫種族は母系が主流なので

南米大陸のジャガー、 アジアの殺し屋の虎、

百獣の王の名を欲しいままにするライオン等々。 大きな声で云えないが、ライオンは牡の鬣で大分得をして

間の勝手な錯覚でないかとの専らの噂であるが…。 いる。カッコいいから「百獣の王」等と奉られているが、人

猫と「狩る」獲物・・主にネズミだが・・を比べると、猫と「狩る」獲物・・主にネズミだが・・を比べると、猫と「狩り」の体重約五㎏位に対しネズミは約二〇〇g程だから、「狩り」の体重約五㎏位に対しネズミは約二〇〇g程だから「狩り」の体重約五㎏位に対しネズミは約二〇〇g程だから「狩り」の付きは中々大変なので、複数の牝が共同して行うということは、は中々大変なので、複数の牝が共同して行うということは、は中々大変なので、複数の牝が共同して行うということは、自然に生まれた知恵と云えば牡のボスが複数の牝を率いのだが・・。通常「群」と云えば牡のボスが複数の牝を率いのだが・・。通常「群」と云えば牡のボスが複数の牝を率いるがが・・。通常「群」と云えば牡のボスが複数の牝を率いるがが・・。通常「群」と云えば牡のボスが複数の牝を率いるがが・・。通常「群」と云えば牡のボスが複数の牝を率いるがが、またいで、牝達が手余しの時は牡は用心棒を教め、その代わりのように、餌は牝達の「狩り」に依存して務め、その代わりのように、餌は牝達の「狩り」に依存して務め、その代わりのように、餌は牝達の「狩り」に依存して務め、その代わりのように、餌は牝達の「狩り」に依存して

私は物心がつく頃から「狩り」が上手で、ネズミ共から「夜る。つまり自尊心が髙いと云うことである。 我々誇り高き猫は用心棒なんか必要とはしない。全て自己我々誇り高き猫は用心棒なんか必要とはしない。全て自己

意であった所為で、語呂が同じことから「嵐」になってしま「夜嵐」ってのは、夜荒らすと云うことで、私は夜襲が得嵐のお銀」と二つ名で呼ばれる程恐れられていた。

った。「お銀」は銀毛のぶちに由来する。

「あっしには、かかわりござんせん」とまるで現代でも通喰いねぇ・・」の軽妙なやりとりで有名な「遠州・森の石松」。おくは「次郎長三国史」で名高い「清水の次郎長」。その次古くは「次郎長三国史」で名高い「清水の次郎長」。その次古くは「次郎長三国史」で名高い「清水の次郎長」。その次古くは「次郎長三国史」で名高い「清水の次郎長」。その次本といるで呼ばれるのは、この国では任侠、渡世の世界元来二つ名で呼ばれるのは、この国では任侠、渡世の世界

旅者」。廻し合羽に三度笠、ご存知旅人姿で舞台に登場すれば、で、どう云うわけかこの国では任侠渡世人・・又の名は「股われるものである。「ふうてんの寅」を除いた以外は、博打打われるものである。「ふうてんの寅」を除いた以外は、博打打力が、どう云うわけかにの東ばともかく、こんなのが「二つ名」と云英院の存在の有無はともかく、こんなのが「二つ名」と云女だてらに片肌脱いで壺を振る「緋牡丹のお竜」。

手は主役の旅人を演じ、派手な殺陣を披露するのである。そは、必ずと云って良いほど「股旅物」の芝居を打ち、その歌人気の演歌歌手が地方公演をするのに一座を結成した場合

ワーッと大向こうの喝采を受ける程現代でも人気がある。

用する科白で有名な「木枯らし紋次郎」。

昔のアメリカ映画の西部劇「シェーン」で拳銃使いが、「シーチャルな存在であるからなのだろうかと不思議に思う。一チャルな存在であるからなのだろうかと不思議に思う。一チャルな存在であるからなのだろうかと不思議に思う。として、社会の顰蹙を買っている中に存在する股旅者とは、バーチャルな存在であるからなのだろうかと不思議に思う。見た目、実にアンバランスであるが、これが結構受けてる。見た目、実にアンバランスであるが、これが結構受けて

して幕が代わると、燕尾服姿或いは袴姿で演歌を歌うのであ

これが「文化」なのかなと思わされる。新旧が併存して活き活きとしている有様、洋の東西を問わず、たたずまい、そして一方古いお江戸が息づいている街、東京。高層ビルが林立し、経済力を誇示するような近代的な街のだから、何も日本だけのことじゃないのかね?

トシーンが思い出されるが、あれとてアメリカ版股旅物の話

エーン!」と呼ぶ声を背に去って行くメランコリックなラス

を浴びた・・・こんなことの名残かとも思えるのだが・・・。快渡世の徒が生まれ、侍どもに対抗したのが大向こうの喝采んだから、つまり庶民が侍どもに虐げられていた反動で、任まり侍はいつも刀を腰に差して、「無礼打ち」が許されていた股旅者とは、たぶん昔の士農工商の身分制度の中で、士つ

少々脱線したが・・・。

はしかし、少し意味が違うようである。
真面目な三匹の子猫の母親である私に、つけられた二つ名

- つよ玄天勺ょ「アッド」よ意味。「二つ名」には二つの意味があるのではないだろうか。

表現すること。例えば嵐のように襲ってきて、さっと引き揚も一つは、驚嘆、賛美、感嘆、そんな気持を別な代名詞で一つは本来的な「ヤクザ」な意味。

げる水際立った「狩り」に対する賛美と考えれば、私は後者

の範疇に入るものと思う。

「狩り」に熱中していた頃は、ある程度実績がつくと、私の姿を見ただけでネズミは震え上がり、腰が抜けたように動の姿を見ただけでネズミは震え上がり、腰が抜けたように動けなくなるので、労せずに「狩り」を行うことが出来た。しけなくなるので、労せずに「狩り」を行うことが出来た。してくる。それだけに動きが速く、さすがの私ももて余したもので、そのときは潔く転進したものである。後で聞いたところによると、そのネズミはライオンに一泡吹かせたと云うことで、キズミ共の英雄と称えられていたネズミであった。なの英雄談とは・・・・・

ライオンはもう老齢で、この前「ウオーッ」と吠えたら、最広場に、ライオンと羆の檻が向かい合って設置されていた。その街の公園の一角、こじんまりした広さの盆地のような

いずり回るのも分かるような気がする。だから「雷音」と云いずり回るのも分かるような気がする。だから「雷音」と云いずり回るのも分かるような気がする。だから「雷音」と云いずり回るのと、現れた牡ライオンが、右に一声、左に一声吠えの飾り枠に囲まれた牡ライオンが、右に一声、左に一声吠えの飾り枠に囲まれた牡ライオンが、右に一声、左に一声吠えの飾り枠に囲まれた牡ライオンが、右に一声、左に一声吠えの飾り枠に囲まれた牡ライオンが、右に一声、左に一声吠えいずり回るのも分かるような気がする。だからしまりの無い話。だか後の一本がポロリと落ちたと云うからしまりの無い話。だか

てしまったのはいたしかたのないこと。
リと食べたが、何しろ歯が無いので、丸呑みってこととなっれまでと観念した。ライオンは檻の中で暫く弄んでからガブみれば、相手は百獣の王、キング・オブ・キング、もはやこみれば、相手は百獣の王、キング・オブ・キング、もはやこ

うのだろうか。

た。「俺は未だ生きている」。それから丸い二つの窓に向かって来るのでハッと思った。丸い二つの窓は鼻穴だと思い到っる。下の方からはグーーと腹の空いた時に聞くあの音が響い振り向いてみると向こうの方に、丸い二つの窓が明滅してい少し息苦しいが、湿った管の中を滑り降りている感じなのでかと覚悟していたが、気がつくと痛くも痒くもない。そして一方ネズミはガブリとやられたときは、もうこの世のお別一方ネズミはガブリとやられたときは、

中で区け上がった。 ズルズルと手足に力が入らないので、足の爪を立てて無我夢ズルズルと手足に力が入らないので、足の爪を立てて無我夢て駆け出した。何分ライオンの食道の中でのこと、ヌルヌル

像も出来ない事。いっぺんに疲れが出てフーフー言っているズミは生きていた。でもライオンの腹の中から生還なんて想に「ウェーーッ」とこみ上げる物をはきだしてしまった。ネハ倒のくるしみ。何かが喉元を掻き毟るようで、吐き気と共ていたら、胸を掻き毟るような衝動にびっくり、まさに七転フイオンにすれば久々の生きた餌なのでうっとり目を閉じ

ヘトヘトに疲れてしまい、お互い顔を見合わせていたと云うライオンは久々の生食がトンでもない騒ぎになったことで始末。増き出来ない事して、<Aに弱れる出てフーフー言っている

ズミ共の英雄になったとのことである。 験は当事者を大きく育てるもので、そのネズミはそれ以来ネーをの生還したネズミと対面したのである。何事も貴重な体

月舌木頁[®]

こともあったが、事の次第は、私を恐れてネズミ共が皆立ちマスコミにも取り上げられ、センセーションを巻き起こしたい地域として喧伝され、地価が高騰して全国的にも珍しいと、云われるほどであった。その為、ネズミがいない清潔で美し一頃は私の棲む周囲一㎞以内は、ネズミの影も見えないと

退いてしまったからである。

所で止めておくように、私のテリトリーの経営を切り替えざあることを、長老達に懇々と論されて、ネズミ共が納得のいくは事ら生まれた子供の何%かにして、ネズミ共が納得のいくの動物界の生産のスペシャリストである。親ネズミは「狩り」の対象の動物界の生産のスペシャリストである。親ネズミは「狩り」の対象の動物界の生産のスペシャリストである。親ネズミは「狩り」の対象の動物界の生産のスペシャリストである。親ネズミは「狩り」の対象の対象から外し、生産に精を出していただく。「狩り」の対象の対象がよりに事欠くことになる。

ホッとしたのもつかの間、私も一人前になり、子猫の親とたが、段々とネズミも戻ってきて、獲物も豊かになって来た。来るわけがないから、二、三ヶ月はゴミ箱あさりに落ちぶれしかし切り替えたと云ってもすぐにネズミ共が舞い戻って

るを得なかった。

なった。

てネズミの必要数が決まってくるってわけだから、偶には見るか分からないから困るのである。つまり生まれる数によっなければならない。何しろ生んでしまうまでは、何匹生まれるければならない。何しろ生んでしまうまでは、何匹生まれるまで、毎度五匹程の面倒を見してしまうのもいるが、猫族はその点真面目に出来ている。るので、育てるのが大変である。人間のように子育てを放棄るので、育てるのが大変である。人間のように子育てを放棄るので、育てるのが大変である。一回に三匹から五匹位生まればは年に二回ほど出産して、一回に三匹から五匹位生まれ

ならなかったこともある。積に齟齬を来たし、誇りを捨ててゴミ箱あさりもしなければ

うじゃない。「猫可愛がり」って。 の言葉に引用されているものが多いことでも分かる。 のに云えることなのだが・・・特に猫の子は可愛い。そら云 そう云えば「猫」は人間と密接な関係にあることは、 だけど子供って可愛いもので、これは猫に限らず全てのも 他に「招き猫」ってグッズがある。 *猫も杓子も *猫に小判 *猫の手も借りたい *猫背 *猫なで声 *猫を被る *猫足 *猫板 *猫またぎ等々。 *猫の額 *猫 *猫可愛が 自 人間

坐って右手で「おいで、おいで」をしている置物で福運、

野良猫だとて国際化を求められるこの頃である。 ない。「行く」を「I Come」というのと同じだそうだ。 向けに動かすが、外国では掌を見せることは「Oh!Sto を呼ぶ猫と云う意味なので念のため・・として人気がある。 でも「ドラー・キャット」・・ドラ猫の和製英語じゃなく、弗 ている。しかもこれらは日本ばかりでなく、中国、アメリカ 金運を招き入れるというので商売繁盛の縁起物として喜ばれ P」を意味するので猫も外国の習慣を知っていなければなら 但し文化の違いで、「おいで、おいで」は、日本では掌を下

等植物の名称に多く見られる例や、「むだなこと」の複合語と その他、「まがいもの」の意味の複合語として「犬アカシヤ」 *犬も歩けば棒に当たる *犬掻き *犬くぐり *犬侍 者の人間社会との関係の密度に微妙な差が見られる。犬の場

これに比べ「犬」も人間社会とは密接な関係にあるが、両

な推論なんだろうか?・・。 ティブな感じの表現が多いように思われるのだが、私の勝手 と、大関係のそれは、「まがいもの」「むだなこと」等、ネガ の語彙は、人間との親密さの上に成り立っているのに比べる りでなく、人間との密着度に大分格差が認められる。猫関係 して「犬死」等があるが、猫族に比べると本当に少ないばか

つい「猫」って聞こえると捨てて置けないので横道に逸れ

てしまったが・・・。

るもんじゃない。前にも触れた通り、地価にも影響が出たく 云う程、大家と店子との関係は深いのだが、それは人間社会 は自然の成り行きである。「大家と云えば親も同然・・・」と に人間と共生する以上、彼らの周辺を利用することとなるの 色々気を配らなければならない。そりや気楽なもんじゃない。 からの天敵。犬、人間共等の周囲の天敵。そして交通事故等 周囲の安全も確かめなければならない。カラス、トンビ等空 もしなければならない。連れて歩いて「体験学習」をさせ、 としおだが、それに夢中になってもおれず、子供を守ること 選ばれることが多いようでヨチョチ歩き始めた頃のそれはひ の利害が之ほど明白にかみ合っているなんて、そうザラにあ のこと。私と大家の場合は一寸違う。非常に論理的でお互い ペットと違って我々「野良」は住に苦労する。当然のよう 子猫の場合、洋の東西を問わず、可愛いものの代表として

る・・ネズミがいなくなる。ネズミの被害がなくなる。大家

大家がネズミの被害に困っている。私がネズミをやっつけ

が喜ぶ。

でもないのに、自然とそれが具現化されている。この見事な 料として大家が享受する。別にお互い契約書を交わしたわけ 私は店賃代わりに、ネズミを退治する。その恩恵を、安心

契約・・・・素晴らしいと思いますね・・・。

なり、猫族も住宅難に悩む昨今である。 壁が土の中まではいっているので、潜り込むべき床下もなく 前にも述べたように人間の建物が進化して、コンクリートの そんなわけで、私は「大家」の床下に棲んでいる。しかし

家の外を三匹の子猫を連れて、「体験学習」のための第一歩で 笑顔で窓から見ていたことが、しょっちゅうあったが・・。 が、私がヨチヨチその辺を歩いているのを、こぼれるような 私もこの度、初めてお母さんとして子供を連れて出て見た。 私とて可愛い子猫時代があった。大家の「おばあちゃん」

を横断するため、周囲を見回していた。 を覚えさせるのが最初と云うところである。 私は家の陰から向いの家の床下までの三m程の開けた空間

た気品を感じたね。

「狩り」を教えるのはまだまだ先のこと。

自分等の生活圏

のが耳に入った。 とおばあちゃんが、ひそめた声でおじいちゃんを呼んでいる

大家のおばあちゃんが見ているな・・・

「おとうさん!来てごらん・・・」

と、そろりと見回したら、窓に二人の顔が並んでいた。 自分等の行動を、他所から見られていることは危険の第

歩である。

猫の「野生」が敏感に反応する。

ていないから、のんびりしたものである。私は「野生」の指 示に従い子猫を引き連れて反転した。 元を不思議そうに見つめたり、まだ彼らの「野生」は発動し 足元に子猫がヨチョチとじゃれあったり、立ち止まって足

あとでおじいちゃんが云っていた。

「あの猫、初めて母親になったんだね。キレーイな肢体の線

王朝の王妃に迎えられたグレース・ケリーのように颯爽とし で夫の脱出を図るイングリッド・バーグマン、或いはモナコ 性の品格と云うか、昔見た映画「カサブランカ」の、命がけ が状況判断をしていることを示していたよ。緊張した若い女 と目が合ったときの緊張した顔つき、瞳が緑色で、眼の表情 窺う耳の動きはまるでレーダさながら。そして振り返って私 まるでアフリカの草原を駆けるチータを思わせたね。周囲を

猫を迎えに来たからね・・」 まう。この間なんか、子猫を置いて逃げていって、慌てて子 ないで、距離を測っている。あの猫は追わなくても逃げてし のふてぶてしさがないのがなによりだ。古猫は追っても逃げ そして崩れていない身体の線、澄んだ目の色。年経た古猫

としては、外国の麗人女優に比較されたのは少々面映かった。としては、外国の麗人女優に比較されたのは少々面映かったとしては、外国の麗人女優に比較されたのは少々面映かった。 この頃又「天の声」が変な意味で使われているようで不愉き三匹の子猫が居るのだと、「天の声」が聞こえた。 この頃又「天の声」が変な意味で使われているようで不愉いある。 お役所の入札工事の談合について、役所のトップ快である。 お役所の入札工事の談合について、役所のトップ快である。 お役所の入札工事の談合について、役所のトップ快である。 お役所の入札工事の談合について、役所のトップ快である。 お後所の大人工事のでは、「天の声」は神聖な本能の導きなのに・・・・。

も猫族の一員としての務めだと思っている。の私は、いつも周囲に気を配っていなければならない。これうな小さい体でジャレあったりしていて可愛いが、親一年生人気のないときは日向に出て寝そべっている。まだ毛玉のよ子猫達もこの頃、向かいの床下で過ごすことが多くなった。

える。

たものと思う。いてのもの、先祖代々から受け継いできたDNAのもたらしいてのもの、先祖代々から受け継いできたDNAのもたらしおじいちゃんが褒めてくれた体の線の美しさは、生まれつ

くシルクロードに由来するんだと思う。しかし競走馬のようミから守るために、渡来したと聞く。だから私達の先祖は遠と云われていたが、奈良時代に仏教文化と共に、経典をネズ日本は太平洋に孤立した島々だったので、猫は居なかった

この要因であり、生存競争と云う観点からは貴重な要素と云さの要因であり、生存競争と云う観点からは貴重な要素と云顔で先の尖った大きな耳等から、エヂプト・アビシニア地方顔で先の尖った大きな耳等から、エヂプト・アビシニア地方あり、私の場合はそれが、しなやかで丸みを帯びた体型、丸あり、私の場合はそれが、しなやかで丸みを帯びた体型、丸あり、私の場合はそれが、しなやかで丸みを帯びた体型、丸あり、私の場合はそれが、しなやかで丸みを帯びた体型、丸はどん派生し、猫の純血種なんて望むべくもない。従って外にその血統を大事にするのとは違い、その生態から雑種がどにその血統を大事にするのとは違い、その生態から雑種がどいであり、生存競争と云う観点からは貴重な要素と云

日本猫と云う日本人に長く親しまれてきた種類がある。 民日本猫と云う日本人に長く親しまれて日本猫の特徴となったが進み、日本猫と珍重されたものが消えて行ったと云われている。丁度敗戦で進駐軍が来て以来、日本の大和撫子が少なが進み、日本猫と珍重されたものが消えて行ったと云われている。 鎖国され、繁殖して全国的に広がったものと云われている。 鎖国され、繁殖して全国的に広がったものと云われている。 鎖国され、繁殖して全国的に広がったものと云われている。 鎖国となったと慨嘆されたのに似ているかもしれないが・・・。

リンピックだって勝者だけが称えられるのだから・・・。残ることである。血統とか純血なんてあまり意味は無い。オともあれ「種」に要求されるのは、何より生存競争に勝ち

なのである。

は論理の飛躍と云うのかもしれないが・・・・。そしていずれ猫族が人類に取って代わるのかもと考えるの

期待で見てるわけ・・・。だから子猫たちがどんな猫に成長するかと、ワクワクした

あの時期、昼夜を問わず、うるさい鳴声で人間様の顰蹙を「サカリ」のことについて一寸弁解しておきたい。

にとって生殖は子孫を残すための大事な行事なので、私はあるは、本音は牡なんて鬱陶しくて嫌なんだけど、「猫の種族」関っていて、どなられたり、石をぶっつけられたり、バケツ買っていて、どなられたり、石をぶっつけられたり、バケツ

の時期になると憂欝である。

で声」で迫ってくるから、本当に怖気を震ってしまう。 地が牝のところに通うと云うのは、人間の世界でも、平安 地がりゃ、私等はそんな生ぬるいことでは生きて行けぬ世界 形は似ているが実質は、現代風に云えば、自立した女の世界 形は似ているが実質は、現代風に云えば、自立した女の世界 形は似ているが実質は、現代風に云えば、自立した女の世界 での話と云ったところである。そりゃ、光源氏の君のような 方に声を掛けられるのだと何も問題はないけど、その辺の暴 方に声を掛けられるのだと何も問題はないけど、その辺の暴 がの話と云ったところである。そりゃ、光源氏の君のような 方に声を掛けられるのだと何も問題はないけど、その辺の暴 がの話と云ったところである。そりゃ、光源氏の君のような がの話と云ったところである。そりゃ、光源氏の君のような がの話と云ったところである。そりゃ、光源氏の君のような がの話と云ったところである。そりゃ、光源氏の君のような がの話と云ったところである。そりゃ、光源氏の世界でも、平安

少なくとも、大家のおじいちゃんに、バーグマンやグレー

るんだけど、分かって貰えただろうか。

「いやー、いやーん、ニャアーーン」と断り鳴きをしていあの鳴声の饗宴の中、声高に言い寄ってくる牡共に私は、あの鳴声の饗宴の中、声高に言い寄ってくる牡共に私は、あの鳴声の饗宴の中、声高に言い寄ってくる牡共に私は、断固拒絶してしまう。でも少しましなのがニャーゴっては、断固拒絶してしまう。でも少しましなのがニャーゴってス・ケリーのような、品格のある女優になぞられた私としてス・ケリーのような、品格のある女優になぞられた私として

今日も今日とて、子猫達が大家の物置の陰で無心に遊んで

けている。
生活を見ていると、我々「野良」の生活空間は段々制限を受生活を見ていると、我々「野良」の生活空間は段々制限を受か・・・。心配してもキリがないと云うが、最近の人間達のしかしこの子猫達が大きくなって、やっていけるだろう私はこの子らを一人前にしてやる使命がある。

うだろうし、そうなれば猫も野生化とペット化と云う二極化こかの国の政治家みたく無情にもバッサリと切り捨ててしまいる。人間も、ネズミがいなければ、猫には用はないと、どは都市部で過疎化が進んでいるって皮肉なことになって来ては都市部で過疎化が進んでいるって皮肉なことになって来ては我々が這いこめなくなって来た。ネズミも猫も住宅から下は我々が這いこめなくなって来た。ネズミも猫も住宅から下は我々が這級化して断熱構造工法が普及してくると共に、床住宅が高級化して断熱構造工法が普及してくると共に、床

を掛けなければと、心せわしいことである。大家のおじいちゃんに褒められた「女ぶり」と知性に磨きの時代になって来るのかと心配は限りない。

文 芸 評 論

入 選

鉄道の愉しみを書くということ ~宮脇俊三の人と作品~

関 清

水

のである 価され、利便性と経済性とのバランスから選択された結果な 乗り換えなしで直行できる「便利さ」等の要素が総合的に評 は飛行機より「早く」、もう一晩ホテルに泊まるよりは「安く」、 択することがある。移動時間こそ長いものの翌朝の到着時刻 合が悩ましい。数ある交通手段の中から、あえて夜行便を選 とはしばしば両立が困難で、特に必要に迫られての移動の場 評価の主軸になることが多い。しかしながら利便性と経済性 人々と交通機関との接点は、生活の随所に顔をのぞかせる。 ての旅行や、出張をはじめとした必要に迫られての移動など、 を果たすための移動手段に過ぎない。日常を離れた余暇とし 「速い」「安い」「便利」。交通機関を選択する上で、これらが はじめに 多くの人々にとって乗り物とは、何らかの目的

音、点滅信号。それらが闇に塗りこめられ、夜の底に沈んで 発車時刻、そして行き先。遠ざかる発車のアナウンスと、そ れているのは、今まさに自分が乗っている夜行列車の名前と 自分がその車中にある。彼らが立つホームの電光板に表示さ いく、夜行列車の旅 の後に訪れるポイント通過時の車両の揺れ。踏切の警報機の いつもの時間帯に停車するいつもの列車ではあるが、今日は ーマンや学生達。仕事や学校帰りの彼らが見上げているのは、

線というべき重要な情報が網羅されている。 ることで安全が確保される仕組みとなっており、 と停車時間・回送時間などを定め、その情報に即して運行す る路線ごとに、15秒刻みという細かさで、入線時刻・停車駅 である。一日に日本全国で走る数万本もの列車群を、運行す その旅の安全性を保障する根幹となる存在が、列車ダイヤ 鉄道の生命

響曲」と、表現したのが宮脇俊三である。昭和の初期、東京 やすく分かりやすくしたものが「時刻表」である。この時刻 表を評して、「百年を超える日本鉄道史上に作り成された大交 その重要な列車ダイヤを、数値に置き換えるなどして、見

街のたたずまい。停車駅のホームを足早に移動する、サラリ えてみる。始まったばかりの夜の車窓の向こうを流れてゆく、 ることがある。翌朝に予定されている遠隔地での勤務のため、

必要に迫られての移動の中にも、旅の要素が顔をのぞかせ

日常業務の終了を待って寝台列車に飛び乗った時のことを考

旅をしてみたい」と思わせることの出来た、稀有な作家なの旅をしてみたい」と思わせることの出来た、稀有な作家なの山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、の山手線、渋谷~原宿間の「原っぱ」を遊び場として育ち、

のである。 な世界を表現した宮脇俊三という作家の人と作品を論じたもな世界を表現した宮脇俊三という作家の人と作品を論じたも本評論は、時刻表を通して鉄道という存在に内在する豊か

である

2. 宮脇作品に通底する主題としての「時刻表」

□のよう・パンプ型目は、『あたいのでは一重の行動でンルとして確立した」ことであった。コ鉄全線完乗をはじめ世界の鉄道に乗車を続け、これまでレ国鉄全線完乗をはじめ世界の鉄道に乗車を続け、これまでレー 1985 年宮脇は、第47回菊池寛賞に輝いた。その受賞理由は「旧

ルファンの間での趣味的読み物であった鉄道紀行を、一般読全線完乗をはじめ世界の鉄道に乗車を続けたこと」と、「レイあったが、異なる要素で構成されている。すなわち、「旧国鉄このユニークな受賞理由は、宮脇にとっては一連の行動で

である。 者にも受け入れられる文芸の一ジャンルとして確立したこと」

「鉄道に乗る」だけなら多くの鉄道マニアが手掛けており、「鉄道に乗る」だけなら多くの鉄道マニアが手掛けており、これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。これの一ジャンルとして確立」することは至難の業である。

時刻表マニアである出版社の重役が、寸暇を惜しんで週末を介に超えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのでるかに超えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのである。音響をでは鉄道マニアの作だとは思えない出来栄えであり、「有名にして格調高く、処々にユーモアをちりばめた、一読しただにして格調高く、処々にユーモアをちりばめた、一読しただにして格調高く、処々にユーモアをちりばめた、一読しただにして格調高く、処々にユーモアをちりばめた、一読しただけでは鉄道マニアの作だとは思えない出来栄えであり、「有名されて選えである出版社の重役が、寸暇を惜しんで週末も対して選えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのでるかに超えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのでるかに超えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのでるかに超えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのでるかに超えて、読み手を捕らえる魅力にあるれた作品なのでるかに超えて、読み手を捕らえる魅力にあふれた作品なのである。

立たないと考えられる。
業の基盤に何らかの主題がなければ、こうした紀行文は成りるものなのだろうか。答えは、否であると思われる。執筆作的知識に裏打ちされた文章力があれば、鉄道紀行は執筆できでは、時刻表をはじめとする鉄道知識と、一定の人文科学

表」なのである。

表昭和史」を執筆するにあたって、当時の記憶をもとに、戦表昭和史」を執筆するにあたって、当時の記憶をもとに、戦れた宮脇は、戦前から戦後にかけての列車の車内やその車窓は、での情報の正確性ゆえに、はるか後年になって宮脇が「時刻とが発力して、当時の世相をつぶさに見ている。戦中の困難、大正末年の12月にこの世に生を享け、昭和とともに歳を重大正末年の12月にこの世に生を享け、昭和とともに歳を重大正末年の12月にこの世に生を享け、昭和とともに歳を重

ある。 前・戦中・戦後にかけての旅の日程を詳細に再現できたので

に暮らす人々の姿への深い共感なのである。刻表」を媒介として鉄道に代表される近代化という荒波の中史の象徴である。そして宮脇の作品に通底する主題とは、「時いわば「時刻表」は、栄光と悲惨との入り混じる鉄道の歴

3. 宮脇の「時刻表」への傾倒~少年時代の回想から~ 日本の鉄道の時刻が正確なのは、国民性ばかりでない事情があるが、幹線系の線区でありながら単線が多いことに代表されるが、幹線系の線区でありながら単線が多いことに代表されるが、幹線系の線区でありながら単線が多いことに代表されるが、幹線系の線区でありながら単線が多いことに代表されるが、幹線系の線区でありながら単線が多いことに代表されるが、幹線系の線区でありながら単線が多いことに代表されるが、幹線系の線区である。それをやり繰りをするために、「列車ダイヤ」がつくられた。

駅や信号場に停車している間は、列車はそこに留まり続ける列車の傾きは急角度となり、鈍行列車の傾きは緩やかになる。度が速いほど所要時間は短くなるため、必然的に特急や急行りである。図面上の直線の傾きは列車速度を示す。列車の速い、上り下りの列車の移動を表わした図面である。一般に、線で、上り下りの列車の移動を表わした図面である。一般に、線で、上り下りの列車の移動を表わした図面である。一般に、

追い抜いたことを示す。 強い特急列車の直線が交差すると、それは駅で特急が鈍行をために、直線は横軸に並行となる。この平行区間に、傾きの

無味乾燥で、本来読み物とはなり難いものである。 無味乾燥で、本来読み物とはなり難いものである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。これら「列経済・流通などがその背後に見えてくるのである。

ころだったと回想している。時代は昭和の初期、山手線にもケット汽車汽船旅行案内」に関心を持ったのは小学1年生の行の機会の多かった父を持つ宮脇が、家に置いてあった「ポース上がりで後に代議士となり、選挙区を往復するなど旅

昭和史」第1章、山手線・昭和8年、から大意引用)。 貨物列車が見えたという。以下、宮脇の回想である(「時刻表が車庫に出入りする姿と、山手線を頻繁に行き来する電車と地からは、911年に発足した東京市電・青山線のチンチン電車地からは、911年に発足した東京市電・青山線のチンチン電車が上のた。宮脇が懐初までは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、一番のでは、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円では、100円で

盛んになされた。貨物列車接近の気配やレールの軋みなどか 汽車好きの子どもたちの間では連結両数の当てっこクイズが もたちの目に映っていた。子どもたちは貨車の両数を数え、 地響きを立てて近づく貨物列車の姿は、圧倒的な迫力で子ど 連結両数は50~60両にもおよび、蒸気の音とずっしりと重い 長大編成の貨物輸送の主力が鉄道であった昭和初期、 ており、子どもたちも時々遊びの手を止めて、ひっきりなし 外側に、貨物用の2本の線路は内側に敷かれていた。電車は いでいるかを当てるものであった。 て、実際に目の前を通り過ぎていく貨車を数えて、何台つな 運転頻度の低い貨物列車が通る時には、子どもたちの遊びは に走る電車を眺める程度であった。しかし、電車に比べると 6両程度の短い編成で、上り下りがともに4分おきに発車し 一斉に中断して、これをながめた。蒸気機関車に牽引された 当時の山手線は既に複々線化され、電車用の2本の線路は 「40台」とか「50台」とか予想される連結両数を宣言し

ることを知って驚き、読めないなりに「時間表」に興味を持脇にとっては、電車も貨車も「時間表」どおりに運転してい山手線の貨車の運行時刻を尋ねたという。兄は笑いながら、山手線の貨車の運行時刻を尋ねたという。兄は笑いながら、宮町は時刻表のことをこう呼んでいた)」を兄に差し出して、公規の持っていた「汽車の時間表際明な宮脇は、毎日同じ時刻になると決まった編成の貨物

ちはじめたのだという。

大いう。小学2年生になった。 一年生の宮脇は、友だちを誘って、当時2銭の子ども用乗校1年生の宮脇は、友だちを誘って、当時2銭の子ども用乗校1年生の宮脇は、友だちを誘って、当時2銭の子ども用乗を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われた列車ダイヤ大改正にあわせて発行された大判を機に行われると、実践への意欲が高まるものである。小学対感じられる時刻表であった。

急列車に夢中になった。「綴方」の授業では、「りゅうせんけ

宮脇は時刻表の中に太字で掲載されてひときわ目をひく特

てしまい、先生にも同級生にも笑われたという、微笑ましい らに飛ばしていた古い円タクにつられて「古スピード」とし フル・スピードで走る」と書くべきところを、当時がむしゃ 時のことは、正月休みの宿題として提出した綴方に書き、皆 分間は長すぎるのではないかと思ったことなど、少年が憧れ 発車時刻の11時00分までには余裕があり、停車時間である4 離し、代わって磨き上げられた蒸気機関車がバックで入線し 間髪入れず作業員が電気機関車の連結器に取り付いてこれを うにして、特急「燕」が定刻の10時56分、沼津駅に到着する。 ばして、その雄姿を固唾を飲んで見つめた時のことは、 られ、当時の花形特急「燕」の停車駅である沼津まで足をの 体験として昇華されていくことになった。 れて熱海に出かけた際には快走する「燕」の姿を宿泊先近く 熱い思いは、一人で東京駅に見に出かけたり、母親に連れら がんだことを書いた。が、 を誇る停車駅の紹介をし、 エピソードで閉じられている。 の前で読み上げられて鼻高々となるところだったが、「列車が の対象に出逢えた夢心地を余すところなく映している。この てきて客車にしっかりと連結される。この間わずか数分で、 とともに語られている。ホームに満ちる緊張感を切り裂くよ のトンネルで兄とともに待ちかまえたり、といった鉄道少年 いとつばめ」という題で、 兄と一緒になって父親に乗車をせ 特急 結局乗せてはもらえず、鉄道への 「燕」の、俊足ゆえに少なさ なかでも母に連れ

引用が長くなったが、宮脇が夢中になった時刻表の背後に引用が長くなったが、宮脇が夢中になった時刻表の背後に引用が長くなったが、宮脇が夢中になった時刻表の背後に引用が長くなったが、宮脇が夢中になった時刻表昭和史」では、微笑ましい戦前の少年時代から、のん気な旅行などしてはならない戦中の青年時代のことに廃止され、車内は常に超満員でトイレに行くのにも難渋したに廃止され、車内は常に超満員でトイレに行くのにも難渋したに廃止され、車内は常に超満員でトイレに行くのにも難渋したで父親とともに聞いた時のことを紹介し、「時は止まっていたで父親とともに聞いた時のことを紹介し、「時は止まっていたが列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」という印象的な一文で、この大著を締が列車は走っていた。」というに対している。

であった。戦争に突入してからは、軍需輸送が主体となったであった。戦争に突入してからは、軍需輸送が主体となった客輸送は対象とする客層で画然と区別された一等・二等・三客輸送は対象とする客層で画然と区別された一等・二等・三客輸送は対象とする客層で画然と区別された一等・二等・三ながあるはずである。その曲想とは、その時代時代の旅客やりがあるはずである。との曲想とは、その時代時代の旅客やりがあるはずである。その曲想とは、その時代時代の旅客やりがある。というに、宮脇は50年以上の愛読書である時刻目頭で述べたように、宮脇は50年以上の愛読書である時刻目頭で述べたように、宮脇は50年以上の愛読書である時刻目頭で述べたように、宮脇は50年以上の愛読書である時刻

旅であったりした。

「と、家としての移動のな旅行であったり、出張に代表される、業務としての移動のな旅行であったり、出張に代表される、業務としてのる動のの接点は、新婚旅行に代表される、人生の節目節目に催されての接点は、新婚旅行に代表される、人生の節目節目に催されての接点は、新婚旅行に代表される、人生の節目節目に催されての接点は、新婚旅行に代表される、人生の節目節目に催されての接点は、新婚旅行に代表される、人生の節目節目に催されてがあったりした。

しっかりと聞き取られる。を背景にした旅行と移動という二つの旅の響きが、それぞれを背景にした旅行と移動という二つの旅の響きが、それぞれ先の重苦しい時代の、そして戦後のそれには復興と経済成長主体が鉄道であった時代ならではの、戦中では軍需輸送最優主体が鉄道であった時代ならではの、戦中では軍需輸送最優

われの目に触れる著作として世にあらわれることになる。識を自らの糧として蓄えた経験を触媒として、その後、われ者時代の、当代随一の作家たちとの交流を通して吸収した知時した。その、鉄道を通して時代を見つめた体験は、編集時刻表を楽譜として、実際に走った列車たちが奏でる音楽に宮脇の耳と心は、それぞれの時代的要請のもとに成立した

4.作家・宮脇の誕生とその作品の概観

極論すれば、時刻と駅名の羅列に過ぎず本来読み物とはな

表は私見ではあるが、宮脇の著作のジャンル別分類である。に出版された「七つの廃線跡」までの著作群である。宮脇が、作家となって生涯に発表した著書は47作品にのぼる。宮鵬が・作家となって生涯に発表した著書は47作品にのぼる。り難い時刻表を、少年期から読み耽ってこれを愛読書としたり難い時刻表を、少年期から読み耽ってこれを愛読書とした

表は私見ではあるが、宮脇の著作のジャンル別分類である。 一見すると鉄道紀行の集大成で、国内紀行・海外紀行・ミス 各作品を実際に読んでみると、1950年にかけて上梓さ 各作品を実際に読んでみると、1950年から1950年にかけて上梓された「時刻表2万キロ」「最長片道切符の旅」「汽車旅12カ月」「時刻表昭和史」という、デビュー作を含む初期の4作品と、「時刻表昭和史」という、デビュー作を含む初期の4作品と、「時刻表昭和史」という、デビュー作を含む初期の4作品と、「のうち、初期4作品には「0.」という番号を充て、それ以降の作品群はジャンル別に分けて「1.」以降の番号を付した。この章ではまず初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻の作品群はジャンル別に分けて「1.」以降の番号を付した。この章ではまず初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻の作品群はジャンル別に分けて「1.」以降の番号を付した。この章ではまず初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻にあることに気づく。初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻をなが、宮脇の著作のうち、初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻による。この章ではまず初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻にある。この章ではまず初期4作品の位置づけを探り、次いで時刻による。この章ではまず、対別4件品のでは、国内紀行・海外紀行・高いの音楽を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表しいる。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表しいる。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。この章を表している。。

東京帝国大学理学部に入学したが、なじめず文学部に転部しによると、戦時の繰り上げ卒業で旧制高校を終え別年4月に幸いなことに、宮脇は詳細な自筆年譜を残している。それ

たのが1981年のこと。1981年の卒業(卒論は「モーツァルトよりたのが1981年のこと。1981年に対したが、翌1981年10月肺結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが、翌1981年10月肺結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが、翌1981年10月肺結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが、翌1981年10月肺結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが、翌1981年10月肺結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが、翌1981年10月前結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが、翌1981年10月前結核が悪化し、2年間の休職の後、社したが1981年10月前に対した。さらに1981年10月前に対した。さらに1981年10月前に対した。さらに1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に1981年10月前に19

宮脇と中央公論社との確執について自ら語ってはいないが、の場中に、中央公論社も巻き込まれ、編集局長から取締役争の渦中に、中央公論社も巻き込まれ、編集局長から取締役に昇格した宮脇は、この紛争の処理に忙殺された。 この頃にはじまった大学紛に対 年には看板雑誌である「中央公論」、次いで翌 195 年には「帰いの場所を表して出版部から雑誌部に移ったこうした輝かしい経歴を残して出版部から雑誌部に移った

がない人ですね。(専務の)高梨さんには一杯喰わされました。」を漏らしていたという「(社長の)嶋中さんという人はしょう宮脇の後任の中央公論編集長である粕谷に、僅かに次の言葉複雑な人間関係に悩まされたことは周辺の知るところであり、

の組織運営を会社に求められた宮脇は、「仕事への情熱が薄れ本作りの職人としての才能ではなく、経営全般を見据えて(粕谷一希著: 中央公論と私〔 똃年、文藝春秋社〕)。

情を吐露している。 てきた。鉄道旅行に気持ちが移る。」と、年譜の中で当時の心

年譜には、国鉄の累計乗車キロ数についての記載もある。年譜には、国鉄の累計乗車キロ数についての記載もある。年譜には、国鉄の累計乗車キロ数についての記載もある。年譜には、国鉄の累計乗車キロ数についての記載もある。年譜には、国鉄の累計乗車キロ数についての記載もある。年譜には、国鉄の累計乗車キロ数についての記載もある。

には、でで、ついに6月末日をもって27年間勤めた中央公に傾いており、ついに6月末日をもって27年間勤めた中央公れる立場となったが、気持ちの方はすでに社業から原稿執筆常務取締役に昇進し、社内的には経営全般への貢献を期待さ「198年は、宮脇にとって忘れがたい1年であったろう。1月、198年は、宮脇にとって忘れがたい1年であったろう。1月、198年は、宮脇にとって忘れがたい1年であったろう。

日まで続けられた。この旅と並行して月刊誌『潮』では10月からはじめられ、6度の中断期間をはさんで断続的に12月20符の旅」と決められた。取材を兼ねた実際の乗車は10月13日作家としての真価を問われる第2作のテーマは、「最長片道切響は大きく、たちまちのうちに版を重ねる売れ行きであった。反刻表2万キロ」が上梓された。7月10日のことであった。反ったがけられた。この旅と並行してのデビュー作となった「時

行であり、堰を切ったような勢いで矢継ぎ早に発表されたの59年10月には、デビュー作第2作となる「最長片道切符の原年10月には、デビュー作第2作となる「最長片道切符の原生10月には、デビュー作第2作となる「最長片道切符のが上げた意欲作である「時刻表昭和史」が上梓された。そのど上げた意欲作である「時刻表昭和史」が上梓された。そのど上げた意欲作である「時刻表昭和史」が上梓された。そのど上げた意欲作である「時刻表昭和史」が上梓された。そのどれもが、従来の鉄道を扱った読み物にはない新趣向の鉄道紀れもが、従来の鉄道を扱った読み物にはない新趣向の鉄道紀れる。

5. 大作家・宮脇俊二への道~「時刻表昭和史」の位置づけ~ 長片道切符の旅」が7年で5刷、「汽車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「汽車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「汽車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「汽車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「汽車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「大車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「大車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「大車旅12カ月」が7年で7 長片道切符の旅」が7年で5刷、「大車なりであると考える。 である。

けての生活史とも言える秀逸な作品となっている。くことで、単なる自分史を越えて、1931年から終戦の1941年にか人々と鉄道との関わりを合わせ鏡としてあますところなく描脇少年が鉄道にのめり込んでいく姿を、その時代を生きたに読んでみるとその内容は自分史そのものである。しかし宮

とは何か。必死に生きてきたあの時代、もう明日はないかも 親子5人が車座になって食べたという。本当に美味しいご飯 どろどろに汚れた畳の上に薄べりを敷いて、泥人形のような 粉と胡麻油で精進揚げをこしらえて、昨夜の空襲の名残りで めておいた薩摩芋を掘り出して、これもとっておきのうどん 母親はとっておきの白米を釜いっぱいに炊き上げ、向田は埋 翌日の昼、「最後にうまいものを食べよう。」との父親の提案 時のことが描かれている。 B 29 の絨毯爆撃が必至と思われた 畳の上を土足で歩いて消火につとめ、かろうじて難を逃れた というエッセイがある。東京大空襲の夜、周囲に火が迫る中、 を『父の詫び状』等の著作に残している。その中に「ごはん」 で1932年生まれの向田は、宮脇とほぼ同時代を生き、その体験 ころなく描き出している しれないという状況の中でのご飯の味の格別さを、あますと ここで連想されるのは、向田邦子である。宮脇の3歳年下 向田曰く「みじめで滑稽な最後の昼餐」がはじまった。

> 現在のような複雑な電気系統の配線を要する信号はなく、ポ 外強いのであった。レールが焼かれ枕木が焦げはするものの、 直線に伸びていた。鉄道は空襲、とくに焼夷弾に対しては案 車で慣れ親しんだ渋谷駅近辺を回ってみると、焼け落ちたビ をすると爆発しそうで、そのままにしておいたという。自転 身を取出せば、炊事用の燃料になると考えたが、そんなこと かなく、あとはすべて不発弾で持つとずしりと重かった。中 ており、全部で7~8本見つけたが黒く焦げた空筒は1本し えていなかった。夜が明けると庭のあちこちに焼夷弾が落ち り入ったりしていたが、なぜか自分の家のある一角だけは燃 響きが身近で起こった。 私は鉄カブトをかぶり防空壕を出た と、すぐ前後左右に火の手が上がり、時にはドスンという地 れ運転本数も間引かれて少なくなっていたが、電車や汽車は のものだったため、折り返し運転や徐行のためにダイヤは乱 イントの切り替えも列車のすれ違いも、すべて人手を介して ルと土蔵だけが残る焦土の上を、山手線の高架橋と土手が一

しを俯瞰的に表現している。そのように宮脇が心血を注ぎこれに鉄道というものの存在感をからめることで、人々の暮ら対して、宮脇は、眼前に展開する事実を冷静に積み上げ、こちを洞察し、巧まずして戦時の暮らしを描き出しているのにたき笑いの状況に直面しつつも、何気ない仕草から人の気持二人の作家に共通するのは、観察眼の鋭さである。向田が二人の作家に共通するのは、観察眼の鋭さである。向田が

どうにか走っていたのである。

分解して発火するという焼夷弾が俄雨のように降りはじめる

宮脇も、空襲の夜のことをこう書いている。

空中で72

一個に

しくなかった。 んで書き上げた「時刻表昭和史」であったが、売れ行きは芳

択眼は厳しいのだと考えざるを得ず、悲しいことだが、それたの信念の上に立って仕事を続けてきた。「時刻表昭和史」は、との信念の上に立って仕事を続けてきた。「時刻表昭和史」は、なる前の27年間、中央公論社では、「売れるものが良書である」後年宮脇は、この時の体験を以下のように回想している。後年宮脇は、この時の体験を以下のように回想している。

「旅は自由席 (199年)」所収)。について不服を申すつもりはない (自作再見『時刻表昭和史』)

する。」(『時刻表おくのほそ道』第7章より) 芸春秋の明円一郎氏はその一人で、初登場の場面を宮脇はこ 品では初めての登場となった、旅の同行者の存在である。文 道マニアの姿が目立つ、地味な地域の弱小私鉄である。厳し ざわざ乗りに行っても、乗客は数えるほどで、鉄道社員と鉄 に、ただただ乗り続けるだけという旅を積み上げていく。 る」といった壮大な目標は立てず、全国に点在する地方私鉄 なっていることが分かる。前作のように「国鉄全線を完乗す シリーズのようであるが、詳読すると、明らかに前作とは異 評を博した「時刻表2万キロ」のローカル私鉄版ともいえる 行き不振に悩んでいたであろう198年、宮脇は「時刻表おくの 以降、宮脇の筆致には変化が現れた。「時刻表昭和史」の売れ 6. 大作家・宮脇俊三への道~「時刻表昭和史」以降~ これ って坐っていると、漫画の一休さんと対しているような気が のように表現した。「少年のような眼つきの明円君と向かい合 い現実の羅列になりそうなところを救っているのが、宮脇作 ほそ道」と題する国内紀行を上梓した。一見したところ、好

離をとって「地方の片隅で、赤字に耐えて頑張っている小させて紹介して乗車を勧めるわけでもなく、対象から一定の距けではなく、かといって、ガイドブック風に魅力をふくらま苦闘する地方私鉄の苦労話をまとめて、これを激励するわ

昭和史」における反省がみごとに活かされた、新境地への転地方私鉄」を巡る「ローカル私鉄版・奥の細道」は、「時刻表掛け合いよろしく、各地に点在する歌枕ならぬ「目立たない体組み入れた意図に沿って、「宮脇」 芭蕉と「明円」曾良とのな鉄道」のありのままを、冷徹さと暖かさが交錯する視点かな鉄道」のありのままを、冷徹さと暖かさが交錯する視点か

進なのであった。

別年から別年にかけて上梓された「旅の終りは個室寝台別年から別年にかけて上梓された「旅の終りは個室寝台がれる文章で、読者を魅了した。 「途中下車の味」、「日本探見二泊三日」の各作品では、 東」、「途中下車の味」、「日本探見二泊三日」の各作品では、 車」、「途中下車の味」、「日本探見二泊三日」の各作品では、 本れる文章で、読者を魅了した。

いったん目が覚めてしまえばすこぶる几帳面で、鉄道嫌い」をたどる旅」で、その同行者は「寝起きの悪さは格別だが、来あたためてきた「宿題の列車の旅、あるいは念願のコース来あたかりは個室寝台車」の基本コンセプトは、宮脇が年

これら3作品では、扱う主題も旅の同行者もまったく異なと孫との中間ぐらいの年齢」の児玉直子氏、の面々である。集めに奮闘し、一部の旅に同行したのは、宮脇にとっては「娘鬼がに奮闘し、一部の旅に同行したのは、宮脇にとっては「娘の出来る、日本の良さをたどる旅」で、その旅の企画や資料の出来る、日本の良さをたどる旅」で、その同行者の藍孝夫氏。「途中下車の味」の基本コンセプトは、「思いつの藍孝夫氏。「途中下車の味」の基本コンセプトは、「思いつの藍孝夫氏。「途中下車の味」の基本コンセプトは、「思いつの藍孝夫氏。「途中下車の味」の基本コンセプトは、「思いつ

ているような一体感を覚えるほどである。あたかも筆者と編集者と読者が同じ列車に乗り、同じ旅をしめりびムを与えて、読者がこれらの作品を読み進めていくと、さりげなく挿入された旅の同行者とのやり取りが文章に適度といってある。しかしながらその文章はさらに洗練され、したものである。しかしながらその文章はさらに洗練され、

っているが、通底する手法は、「時刻表おくのほそ道」を踏襲

倒的な筆の冴えである。 読者に、そんな錯覚に陥りそうな臨場感さえ感じさせる、圧微笑をたたえた宮脇がたたずんでいる。」

を取り巻く空間を拡げ、またある時には歴史的空間をのぞきた時代の社会状況を核として、地理的に、また時間的に鉄道ことを指摘した。換言すれば、ある時には、時刻表が編まれて共感的に見つめる、鉄道とそれを利用する人々の姿である「頭で宮脇の作品に通底する主題は、「時刻表」を媒介とし

ールドの総体なのである。 で拡張していったこれら作品世界を包含したものが、宮脇ワ込んで社会的な問題にまで視野を広げていく。さまざまな形

き合わせにして、その路盤を活用した登山鉄道の敷設を提唱 境破壊の現状に対する処方箋として、道路の縮小や廃止と抱 宮脇はこの作品の中で、張りめぐらされたスカイラインにも 格段に少なく、供用開始後も、旅客需要に応じた柔軟な輸送 る。一般に道路建設に比べ鉄道敷設は、自然環境への負荷が 性を活用して解決策を模索したものが、「夢の山岳鉄道」であ れた、いわゆる未成線を扱った「線路のない時刻表」もある。 られはしたものの、当時の国鉄再建法によって工事が凍結さ 未来に伸ばしていくと、鉄道敷設計画に沿って建設がすすめ 途中下車人生」などの自分史が、さらにその先の歴史的空間 紀行が位置する。 時間的拡張の先には 「時刻表昭和史」 「私の 道切符の旅」「時刻表おくのほそ道」 などの国内紀行の秀作や、 っぱら依存し、多客期の交通渋滞に悩む山岳観光における環 体制がとれる鉄道は、自然環境への影響が少ないとされる。 国紀行」 からなる、 一連の日本通史がある。 一方で時間軸を した。上高地・富士山・比叡山・奥日光・蔵王・菅平などの への拡張の先には、「古代史紀行」「平安鎌倉史紀行」「室町戦 「椰子が笑う汽車が行く」「インド鉄道紀行」など一連の海外 その視点を現代社会が悩む社会問題にまで広げ、鉄道の特 すなわち、地理的拡張の先には 「時刻表2万キロ」「最長片

> 糖鉄道など、今はなき鉄道路線の後を辿り、遺構を捜し歩い精鉄道など、今はなき鉄道路線の後を辿り、遺構を捜し歩い着が高いた。 「大きな反響があった。」の一連の考えは、自然場と変通渋滞の解消への妙案として、大きな反響があった。は、一直の表別では、著作の要とする「時刻表」が消失した世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつての営業区間が諸般の事情で廃止た世界にまで広がる。かつで、大きな反響があった。は、登山鉄道に、地が、大きな反響があった。の後を辿り、遺構を捜し歩い精鉄道など、今はなき鉄道路線の後を辿り、遺構を捜し歩い精鉄を整備して、高速道路等を乗り継いで殺到する観光客を(観光道路の起点に駐車首都圏に比較的近い観光地を対象に、観光道路の起点に駐車首都圏に比較的近い観光地を対象に、観光道路の起点に駐車

けたとしても、そこに至るまでの道があることはほとんどなけたとしても、そこに至るまでの道があることはほとんどなるところなどは、宮脇らしくて微笑ましい。いわく、鉄道遺なものがあることに気づいて、「鉄道考古学」の創始を提唱すなものがあることに気づいて、「鉄道考古学」の創始を提唱するとの経験から、鉄道遺構を見つけるには一定のコツのよう

も大切である、等々、実際に廃線跡を歩いたもののみが知り物を見つける幸運な事例もあり、足元を見つめることはとて築堤の上を丹念に歩くことで、廃レールや犬釘などの鉄道遺でに危険が潜んでいることを肝に銘ずるべきである。むしろ、く、そこにはしばしば転げ落ちそうな斜面があり、そこかしく、そこにはしばしば転げ落ち

く、「廃線跡紀行」へと大発展することになった。を片手に薮をかき分け、斜面を上り下りするなどして捜し歩で鉄道考古学」はのちに、廃止線の跡ないし痕跡を、地図

得る薀蓄が大真面目に披露されている。

かつて隆盛を極めた鉄道の痕跡を訪ね歩いている。
かつて隆盛を極めた鉄道の痕跡を訪ね歩いている。
かつて隆盛を極めた鉄道の痕跡を訪ね歩いている。
のつて隆盛を極めた鉄道の痕跡を訪ね歩いている。
ののを線跡」は、これら比較的新しい廃線跡を
はられるほどのブームを巻き起こした。晩年の宮脇は1999年に
けられるほどのブームを巻き起こした。晩年の宮脇は1999年に
けられるほどのブームを巻き起こした。晩年の宮脇は1999年に
は廃線跡を歩く』シリーズは、「廃線跡巡り」という新しい旅
道廃線跡を歩く』シリーズは、「廃線跡巡り」という新しい旅
道廃線跡を歩く』シリーズは、「廃線跡巡り」という新しい旅
がつて隆盛を極めた鉄道の痕跡を訪ね歩いている。

・「最優でも ・ 「最優でも ・ でいる。 ・ のの ・ のの ・ でいる。 ・ のの ・ でに ・ でいる。 ・ のの ・ でに ・ でいる。 ・ でに ・ でいる。 ・ でに ・ でいる。 ・ でに ・ でいる。 ・ に内交通・ にいる。 にいる。 ・ にいる。

行から通史・ミステリーにまでおよぶ宮脇の広大な作品世界行き不振は、宮脇の作家魂に火をつけた。国内紀行・海外紀を、自分史の体裁でつづった「時刻表昭和史」の思わぬ売れを、自分史の体裁でつづった「時刻表昭和史」の思わぬ売れる、自分とのは道切符の旅 取材ノート」からうかがえるもの 時

で網羅した各地の「赤字」ローカル線の廃止という痛みをと

国鉄の民営化とJRへの移行は、宮脇が

「時刻表2万キロ」

1987年3月13日限りで廃止された。

は、どのように構築されてきたのだろうか。

当時の気持ちを独白したもので、作家一年生としての緊張感当時の気持ちを独白したもので、作家一年生としての緊張感での旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていたそれまでの旅が、「職業作家としての旅行」にとどまっていた。「最大学での旅が、「職業作家としてので、作家一年生としての緊張感での旅が、「職業作家としてので、作家一年生としての緊張感での旅が、「職業作家としての下れば、「財材」の気持ちを独自したもので、作家一年生としての緊張感がある宮脇灯子らの手によっていた。「最大学で、実際の旅が、「職業作家としてので、作家一年生としての緊張感が、長女で、愛読者の気持ちを独自したもので、作家一年生としての緊張感が、長女で、愛読者の気持ちを独自したもので、作家一年生としての緊張感が、「財行されば、「関係など、「ないないない。」

分である。(以下、大意要約)――厚床」の項の最終部分、宮脇が根室の街にさまよい出る部外応していないことがわかる。たとえば旅行第2日目「遠軽ると、同じ日のことについて書かれた両者の記事がほとんど「取材ノート」と「最長片道切符の旅」とを読み比べてみ

と期待とが行間から静かに立ち昇っている。

行って戻ってくる」。 モなど、みんな大きい。店のマスター「魚はいったん東京へ壺焼を食う、酒3本。焼いているのはキンキ、イカ、シシャ枝町の店へ行く。シシャモ、イカソーメン(冷凍)、バイ貝の「取材ノート」: 旅館、20畳の広間のわびしい夕食。梅ヶ

> 食べた貝の確認まで行ったことである。) は無理もない。しかしながら素晴らしいのは、執筆にあたっ ブ貝」が正しいのは明らかであるが、道産子にはお馴染みの 貝」が、「片道切符の旅」では「ツブ貝」となっている。「ツ 店を出るとみぞれだった。(筆者注:「取材ノート」の「バイ が、これは冷凍もので、後悔しながらもう1本酒を飲んだ。 室はいいぞと嬉しくなって当店自慢のイカソーメンを頼んだ きなのを10本も焼きはじめ、酒を頼むと2合徳利がドスンと 漬をかきこむと宿を出て、観光案内書にある梅ヶ枝町の店に らいの部屋の片隅でとった。格別でない料理に箸をつけ、茶 てこの「取材ノート」のわずかな記載まできちんと見直して 壺焼を注文するとこれまた大きなのが出て来て満足した。 根 置かれた。シシャモは旬の本場ものでうまく、次にツブ貝の 行った。入ると大きな炉があって、シシャモを注文すると大 「ツブ貝」を首都圏出身の宮脇が「バイ貝」と思い込んだの 「片道切符の旅」: 宿の食事は、 応接間をつぶした 20 畳く

ら。」(「取材ノート」まえがきより) で、「で、自分のためには取らない。大体、とらなけれれは読者のため。本の刊行後に間違いを指摘されるとまずいれは読者のため。本の刊行後に間違いを指摘されるとまずいから。だけど、自分のためには取らない。大体、とらなけれいら。だけど、自分のためには取らない。大体、とう話れないことや主観で書くことが許されない。

うエピソードを紹介している(『時刻表2万キロ』のころ、K で宮脇が、「著作には写真を一切乗せないこと」を求めたとい で宮脇が、「著作には写真を一切乗せないこと」を求めたとい

8.まとめ~道行としての鉄道紀行~

AWADE夢ムック「宮脇俊三」より)。

それで、具体的には沿線風景・乗客・列車・駅などの要因かをれで、具体的には沿線風景・乗客・列車・駅などの要因かま現した宮脇だが、「終着駅」についても一家言を残している(表)。バス旅を扱った1冊を除くと、そのすべてが、している(表)。バス旅を扱った1冊を除くと、そのすべてが、している(表)。バス旅を扱った1冊を除くと、そのすべてが、とりあげられていることも興味深い。「時刻表」を大交響曲ととりあげられていることも興味深い。「時刻表」を大交響曲ととりあげられていることも興味深い。「時刻表」を大交響曲ととりあげられていることも興味深い。「時刻表」を大交響曲ととりあげられていることも興味深い。「時刻表」を表している。表現した宮脇の鉄道へのとりあげられていることも興味深い。「時刻表」を表している。表現した宮脇の鉄道への手が大きなどの乗りつぶしいのでは、国際などの要因かり、大きなどの乗りつぶしい。

の会津若松近くを走っていた日中線・熱塩駅であるという。の会津若松近くを走っていた日中線・熱塩駅であるという。の会津若松近くを走っていた日中線・熱塩駅であるという。の会津若松近くを走っていた日中線・熱塩駅である。特に旅あったローカル線は、いまや気息奄々の状態である。特に旅あったローカル線は、いまや気息奄々の状態である。特に旅あったローカル線は、いまや気息奄々の状態である。特に旅を経て現在ではその大半が廃止されてしまった。宮脇が旅した500年代後半は、国鉄再建法によってローカル線廃止に大ナタが振るわれた時期の直前にあたる。宮脇がつぶさに見たのは結果として、最後の光芒を放つ国鉄の貴重な姿だったのでは結果として、最後の光芒を放つ国鉄の貴重な姿だったのでは結果として、最後の光芒を放つ国鉄の貴重な姿だったのでは結果として、最後の光芒を放つ国鉄の貴重な姿だったのでは結果として、最後の光芒を放つ国鉄の場が表に見いているという。

宮脇が巡った当時の終着駅もローカル線も、その光芒は、宮脇が巡った当時の終着駅もローカル線も、その光の中に浮かびれた鉄道を求めて」「七つの廃線跡紀行」の記述から明らかでに帰り、その跡形をたどることすら難しくなることは、「失わに帰り、その跡形をたどることすら難しくなることは、「失われた鉄道を求めて」「七つの廃線跡紀行」の記述から明らかでれた鉄道を求めて」「七つの廃線跡紀行」の記述から明らかで、その光芒は、宮脇が巡った当時の終着駅もローカル線も、その光芒は、宮脇が巡った当時の終着駅もローカル線も、その光芒は、

た宮脇の意識の深層に、軍記・謡曲・浄瑠璃などで、旅の行かけたかどうかは定かでないが、戦前の昭和期に教育を受け統に則ったものと考えらえる。自身がそれを意識して旅に出その意味で宮脇の旅は、わが国の古典である「道行」の伝

とみるのは、あながち的外れなことではないと思われる。 程にそって地名や光景を述べる道行文の知識が息づいていた

その鉄道に夢を託して地域で暮らした人々の姿を描き出して せずしてわが国の近代化に重要な役割を果たした鉄道の姿と、 時刻表の知識を駆使した乗りつぶしや一筆書き切符は、

ある。 カル線もその沿線風景も、これからもそこにあり続けるので 後世に残すという、重要な機縁となった。 鉄道歌枕として、駅もそれらをつないで伸びる線路もロー

鉄道線の存廃にかかわらず、なのである。

表 宮脇俊三著作、ジャンル別分類

(私案)

0 初期4作品

時刻表2万キロ 最長片道切符の旅(1979) 1978 *1 *1

汽車旅12カ月(1979) *1

時刻表昭和史(198)

1. 国内紀行

終着駅へ行ってきます (194) 時刻表おくのほそ道 1982 *2 *2 *3 同行者旅行記 同行者旅行記

鉄道旅行のたのしみ (198) *6 旅の終りは個室寝台車 1984

> 途中下車の味 (198) *3 ローカルバスの終点へ (198) 同行者旅行記

日本探見二泊三日(⑲)*6—

旅程満載の実例集

同行者旅

行記 線路の果てに旅がある(194)

*6

2 台湾鉄道千公里 海外紀行 1980

シベリア鉄道900キロ 1983

椰子が笑う汽車は行く(188) 1986

中国火車旅行(198) *4 汽車旅は地球の果てへ

ヨーロッパ鉄道紀行 (196) 韓国・サハリン鉄道紀行 (191) インド鉄道紀行(199) *4

*5

蒙華列車はケープタウン行

1998

3

夢の山岳鉄道(1993) 失われた鉄道を求めて (198) 線路のない時刻表 廃線跡・未成線紀行 1986 *3

*3

七つの廃線跡 (201) 全線開通版 線路のない時刻表 1998

116

4. 自分史

私の途中下車人生(198)

昭和八年澁谷驛(198)

増補版時刻表昭和史(199)

5 時刻表ひとり旅 (198) 鉄道趣味

*6

駅は見ている (197)

古代史紀行(199)

7. 随想

旅は自由席 (191) *6-第3エッセイ集 汽車との散歩(198) *6―第2エッセイ集 終着駅は始発駅(198) *6―第1エッセイ集

乗る旅・読む旅 (201)

車窓はテレビより面白い (198)

歴史紀行

徳川家康タイムトラベル (188)

平安鎌倉史紀行 (194)

室町戦国史紀行 (200)

注2: 一の後のコメントは、著者が付したものである。 内3、4=第4巻・海外1、5=第5巻・海外2、6=第6巻・

8. ミステリー 殺意の風景 (1985)

9 鉄道に生きる人たち (1987) 対談、インタビュー

ダイヤ改正の話 (198)

10:絵本

御殿場線ものがたり (1986)

シベリア鉄道ものがたり (199) 青函連絡船ものがたり(988)

スイス鉄道ものがたり(贈)

注1: *を付したものは宮脇俊三鉄道紀行全集に収録されて いる作品であることを示す。

(*1=第1巻・国内1、*2=第2巻・国内2、*3=第3巻・国

117

選 評

安 東 瑄

揃い、 にない特徴があった。 変った趣向の作品が目に ら選考した。数のわりに二十代を除 代から八十代まで各世代の作 また筆力上位の作品にそれぞれ 度 は 小 説 10 篇 評 論 1 篇 て、 \mathcal{O} 例年 品 中 が Ś カン

画 主人公という設定は、かつての人気映 のデパートに売り出されたサンタが って、 人間界とは別にサンタ族の世界 の移り変りを見守るという話。 ンランド生まれのサンタクロ 人形が、 日高 「サンタクローズ」を思い その掟を破って人形にされ函館 買われた家のクリスマ 光「サンタは見ている」。 出させる] ス (風景 が 般の ス フィ あ 0

は やがて夫の浮気がもとで夫婦は たまま一家の移り変りを見つづける。 去 を回 その後脱走に失敗して家に 想しながら眺めてい る。 サン 飾られ 別れ、

なる。 語に仕上げている。幸せ さか無理筋の話を、 シングルマザーとなった妻は り合いをつけて相応に 抱えて実家に戻り懸命に働く日々と 変崩れてゆく様子に時代の現実感 人形サンタが なんとかうまく折 語り手というい 興味 な新 婚家 0 あ 息子を る物 な庭が ż

るくまとめあげた手ぎわを評 って、 サンタの語り口に、人情味と愛嬌が 1, を見守る自分も離婚歴二度の 暗くなりそうな話を湿らせず明 価 人 あ 形 た

> つけ船でがんばるタゲシの姿などが、 を親身に見守る校長先生夫妻や シの様子や母の気苦労、孤独なタゲシ

イカ

貫した方

言 の語

り口に

ぬくも

ŋ

Ó

があり、健気にがんばるシングル

マザ

人形が主人公というところがミソ。 で、 窺えるが下海岸地方の方言 は児童文学と銘打っている。 らねわらし」として漁村に生まれ 稲本昭治「たまげだタゲシ」。 「どうしたものがひとこともし 0 題名 こち 語 り口 にも 育 6 B

時は昭ん が、

和

の終り頃、赤ん坊にも恵まれ

た新婚家庭

のクリスマ

スの ぱ

光景を、

失意の人形サンタが己れ

· の 過 族 家の

0

たタゲシの少年の

日を中心に語る。

幸

井

ま

ħ

幸せ

0

1 夜、

0

家 両

0

タ シには友達も寄りつかな 小学校に入ってもしゃべ した校長先生の 5 五. な 年 で歌 'n タ

\ \ \ 担任 やべれない理由は医者にもわか 外な姿で村に戻ってくる。 突然引越してゆく。十年後タゲシ け船に乗る。ところが十八 の働き手となって小さい体でイ 海で遭難する。 相変らずの日 をうたえるほどになるが、 しゃべれない学校生活を送るタゲ 々の中で出 タゲシは進学せず 親身 「稼ぎの 中学校 な指 タゲシ の春一家は がし くは意 5 カ 父が では

を漂わせて終る。 児童文学らし ものがあるが、ラストの 的でもう少しふくらませて読 しては校長先生とタゲシの話 ある現実感を持たせて語られる。話と ア タジ 話が 効果的で、 4 が 0 余韻 た 印

縁莚勇二「夜嵐のお銀」。 夜嵐 \mathcal{O} お

前がある のお 漱石 批評的 諧謔. 0 などいろいろ興味深く読ま つい 猫 は 銀 1 しかった。 て博 名 と名 猫 銀 的 で が肯けるような話 の無名の「猫」とは違って、 猫 て驚く 三識自 な あ 乗る るのだから小説とする以 というわけ な 0 П 生 る」伝来 しかしヤボな注文はさてお 調 野 ŧ ほどの新見はないが社会 態に由 あり、 良猫 で多様に披露す で ·闊達. 0 0 b 来する 犬と猫 猫 語 な りげな立派 語 り。 89 の仕組みが ŋ 歳の 博 だ 0 せ 漱 識 対比 る。 Ź が 石 筆 Š Ę 力に な名 夜嵐 だが の話 猫に ŋ この 吾

を

0

中

で

君とい

た時

間

は

心

に

児童 は見 を生 作品 選とし、 ませた。 上三 か 文学、 7 が揃ったが、 す 作、 エッ る」「たまげだタゲシ」 相応の工夫と筆力 猫 小説という観点で の語 サンタ セ イ風 それぞれ りなど変 人 |夜嵐 形、 に 方言に 0 0 お銀 が そのの た趣 ーサ あ を入 ンタ 趣 ょ 0 向 る 向 は 7 \mathcal{O}

話

は感心

L

た

三作に比べ 他は筆力 E 差 が あ

生

 $\overline{\mathcal{O}}$

人称で同棲する男子学生と、

外

的

な

空間

を感じさせる

ŧ

 \mathcal{O}

が

も浅い か。 れる。 るも さびしい気持ちを素直に は蛙 に死んだおじいちゃんではなかった が通じて母が私との時 変な蛙に出会う。 つも一人ぼっちの マンで忙 話のつくりはシンプルで書きこみ である。 Ō が、 があっ 蛙はいなくなる。 父が単身赴 非現実的 しく働 名前 た。 その蛙 ۲ は 日常 はまだな な話を自 任 高校生 母 間を作 あれ は \mathcal{O} 雨 打ち 助 種 0 丰 V 然に ヤリ は 言 日 0 0 明け心 とい + 0 で母 私 フ てく 吾輩 ·年前 アン 語 は ア . う る ゥ い

ほ そ

色の く街 うまく 品になってい に参加するところか 直りのきっ 文章のセンスがよく雰囲 生 0 に見えてくるという心 移りが早すぎて、 街」は交通事故 かしたか 落ちてこない。 カン . る。 った。 けをつかもうと野外劇 高校生の 0 ら始まる青 後遺 無題 導入 鉛 色の 気 部 症 作品。 0) 0 は 街 か 0 動 あ ら立ち 女子 面 が きが る作 色づ 年 白 「鉛 学 7 \mathcal{O} の話 る。

残 で物 るが 揺れ での で ース」好きな男子生徒には相手 なっている。 \ , 知 無題という題が る心 語らしい 心 男子学生 ŋ 合 \mathcal{O} を 往 0 描 来 た 「酸味 < لح 社 興味の焦点 を単 会 0 かな 別れ 人の 調 100 宗 に % す ŋ を決 男 描 通 書きこん の < が定まら ライ ŋ 、だけ 断 Ó 魅 が す 内 カ 厶 んで、 ジ な れ 1 な て ュ 0

失意の 稜郭に いる。 うひとときの れた夫へ 弱いが高校時 てるほどの筋も 三人の男友達との日常を書く。 「五稜の 私をそれとなく慰め 出かけて花 の想いを馳せる、 情 代 桜 感 0 なく小説としては力 異性間 ._ の 五 は 下 月の 1 やみ わ 晴れ け 0 その あ なく 友情 てく た 0 取 わ 日 出 لخ り立 け 7 れ 別 五. V が 7 る

よっ 自身の辛い過去を告白す 主人公の情感だけ 書かれていないので話は深まらない。 とたどたどし を聞いてくれる彼。 「せん」 香花火」 0 定期 1 書 世界に終 き方 的 あ る日突然彼 小品 訪 って れ 7 で

校生の作品 をしっかり書くことを心が なぐ書き方ができていない。 に自死する。筋立ては劇的 女と出会い好きになるが、 した主人公が いじめ で不 -登校 だが話 彼女は不意 けたい。高 まず場面 0 をつ 美少

オ

レンジ」。

中

高

 $\widehat{\mathcal{O}}$

高

校

入学

丰

とし

て書

1 鉄道 脇 宮脇作品に通底する主題は「時 ロ」や宮脇が最 0 少年 時刻表昭和史」などを中心 への愛着が いから それ ō も自信作 時 刻 らの作品 表 へ の 傾倒 に に、 . 開

まとめあげた力作評 を丹念に、 者を愉しませた宮脇俊三の人と作品 道紀行を中心とした多彩な作品 ということ~宮脇俊三の人と作品」。 そして愛着をこめて整然と 論 ごで読

論

は水関清「

鉄道

の愉し

みを書く

脇俊三は平成 11年菊池寛賞 を受

通 ら八章に分けて辿る。とりわ 引きながらその宮脇の文学を初 物だった鉄道紀行を文芸の一 れまでのレイルファンの趣味 賞するが、 ルとして 底 す Ź 確立した」という文言などを \mathcal{O} 作者はその は 主題として の選考理 0 時 けそこに 由 ジ 刻 0 \mathcal{O} 期か 読み 表だ ヤ

て評判のデビュー作「時

刻表2万

う重要な機縁となった。

鉄道

0

の存廃に

を媒介として鉄道に代 した事情を手厚く書いている。そして 表される近代 刻表 花 B

とい 信作 深い 地方ロー 振だったことを省みて作風を変えた 化という荒波にさらされた人々への い、 共感だとまとめている。さらに自 「時刻表昭和史」の売れ カル線旅 時刻表おくの細道 行 記 や海 外紀 行きが不 以後 のは 行 記 \mathcal{O}

後半、 暮らし で、近代化に重要な役割を果 旅は古典文学の 旅になってゆくというところ。 ない時刻表」などという一連 と廃止され、 などの作品例を書くが、印象的 姿と、 かつて旅したローカル た人 その鉄道に夢を託 Þ 宮脇 0 道 姿を後 ‴の紀行 世に に則 文が にした地が ル線が次 べったも どの廃線 した鉄道 す 宮 な \mathcal{O} \mathcal{O}

道 カン 歌 かわらずそこに描かれ 枕として残りつづけるという結 た風 景 は、 鉄

びには深く肯かせられ

までの評価の情報などもほ できれ ?ば宮脇文学につい しい 7

寧な (私案) も親切でわかりやす 付記された著作のジャ 解説 の道筋と観点に客観性 ン ル 別 分類 道 があ

価したい。 らずとも時 幹線が現実となる昨今鉄道ファ 宜も得た好評

120

昭和二十年八月十五日の私

地 政義

菊

そして新聞の記事が多かった。目の節目とか、道理でそれにまつわるテレビ、ラジオの番組目の節目とか、道理でそれにまつわるテレビ、ラジオの番組

に記憶している。昭和二十年八月十五日正午の、あのラジオ賀会、おまけに仰々しい軍事パレードを披露していた。一方中国は、世界の貴賓を招いて抗日戦勝利七十年記念大祝一本の安倍内閣総理大臣は世界に向かって談話を表明し、

約三十人ほどと一緒に聴いた。 積降しのホームで函館中学の級友約四十名、韓国人の労務者私は、あの放送を函館駅の近く日本通運函館支社貨物専用放送を聞いた日のことである。

で 今日は朝から上天気だった。朝の打合せで現場監督は言っ 学業を捨て貨物積降しの人夫として動員されていたのである。 私たち級友は、本年四月に二年生に進級したが、六月から

韓国人労務者と我々生徒とは同じ場所で同じ作業をするこ「午前の作業終了後、昼食前に必ずここに集合せよ」

うくたくただ。今日はついてない。 うくたくただ。今日はついてない。

めったに顔を出すことは無い。等が引率の先生、工作担当の小野先生も見えている。日頃はに会社の偉い人、韓国人労務者の班長さん。それに珍しく我相定の場所に行くと、ほぼ全員が集合していた。現場監督

イッチを入れた。途端にガガガッ!ピピピィ!というすごい葉が放送される、皆、畏まって拝聴するように」といってス会社の偉い人が前に出て「これから天皇陛下の大事なお言がチョンと置かれている。

適当な空所に粗末な机、その上に古めかしい小さいラジオ

雑音、現場監督が慌てて小突いたり撫でたりしたら漸く声ら

しいものが聞こえてきた。

部分だけははっきりと聞き取ることができた。有名詞と「耐えがたきを、、、耐え。忍びがたきを忍び」この教育勅語に感じが良くにている。ただ、(ポツダム)という固内容もはっきりしない、小学生時代から暗唱させられていた神々しさも威厳も無い。これが現人神の御声なのか?話の

に負けたのかも知れないぞ?
あまり景気の良いお話では無さそうだ。若しかすると戦争

姿は印象的であった。 長さんが脱いだ帽子を握り締め、その手で目頭を拭いていたもいない。韓国人労務者たちはいつもの無表情、ただその班っと天井を見ているもの、足元をみつめるもの直立不動は誰っと天井を見ているもの、足元をみつめるもの直立不動は誰私は、こそっとあたりを巡らした。皆キョトンとして、じ

我等は大いに喜んだ、思わず歓声を挙げた。こと。明日以後のことについては、明朝沙汰するとのこと、引率の小野先生は午後の作業は中止、学校の了解済みとの解散した人夫たちは番屋で遅れた昼飯をとった。

に行こうと衆議一決した。大森町の津野尾君、青柳町の黒江者はいなかった。誰言うと無く気分晴らしに、立待岬へ泳ぎ従って各班員は苦楽を共にし、いつも仲が良かった。様々同級生は身長を基準に一班から五班まで、各、八人で我々同級生は身長を基準に一班から五班まで、各、八人で

H)と引って見ているであった。 亀田港町の私、後の二人は図書館に行くとか、とにかく第二君、上磯町の日野君、軍川の円藤君、森町の幾世橋君そして

なんと!函館駅前広場で幟を立てた人集り。日の丸の小旗班の仲間うち連れて電車の停留所に向かった。

こうが、また。

並町の尾崎君は共に途中下車して図書館に向かった。電車はがらあきだった。同じ班員である末広町の木村君と杉うか。街は静かだった、何時もとなんら変わりは無かった、ジオ、行こか戻ろか思案中、せいぜいこんなことではなかろジオ、行こか戻ろか思案中、せいぜいこんなことではなかろおそらく一週間ほど前に赤紙が着いて八月十六日何時までおそらく一週間ほど前に赤紙が着いて八月十六日何時まで

グイの葉っぱを切り払いながら言った。サイフで一突きだぞ」円藤君が愛用のナイフを振り回しドン喋りながら墓地の坂を登った。「アメ公が来たらこのジャック」の館八幡宮にも人影は無かった。我等六人は勝手なことを

海が近い。

「別に当てにしていた分けではないが、とうとう神風は吹「別に当てにしていた分けではないが、とうとう神風は吹「別に当てにしていた分けではないが、とうとう神風は吹「別に当てにしていた分けではないが、とうとう神風は吹

立待岬は函館山の東端、津軽海峡に突き出た、大小様々な

岩を避け漸くここに辿り着いたのだ可哀想でないか、美しい の終点から、男は松葉杖を突き女はそれを助け、坂道を登り で打ち拉がれているんだ、リヤカーで運ばれた風も無く電車 て追い散らせ」もう一方は「待てまてあの二人、今日の放送 時節柄もわきまえずに何たるふしだら、天誅だ石でもぶつけ 仲間の意見は二分した。「我等は痩せても枯れても軍国小国民 生まれて初めて目撃したのだ。早速戻って仲間に報告する。 る。まるで(愛染かつら)の様だ。私も幾世橋君もこんな光景は う、歳は三十前後か男前だ。くたびれた戦闘帽の星まで見え うな、または丹前に似た着物、これが傷病兵の制服なのだろ かに見える、歳は二十五、六歳美人だ。男も白い柔道着のよ も白い服を着ている、右は看護婦らしい帽子の赤十字が鮮や 私と幾世橋君の二人が偵察の役を任された。岩影を巧みに伝 世橋君、「ほっとけ、かまうな!」が律野尾君と日野君、結局、 は?」黒江君が言う「もう一寸近づいて様子を探ろう」と幾 ほど好い岩に腰を掛け何やら話している様子、「なんだあれ 皆、潜りは不得手だった。一先ず小休止基地に戻る。 る、日野君だけが潜り鮑を探したが収穫無し。ほかの連中は 携帯している、足場の良い岩に上りザンブと飛び込み泳ぎ廻 奇岩と峻険な崖よりなる。

砂場は無くいつも波が荒い。

我々 は先ず飯を食った。ピクニックの様で楽しかった。 褌は常に い、かなり接近した。斜めの横顔だが表情も読める、二人と ふと見ると約三十メートル先に人影が、それも二人の男女、

いて来る。

光景でないか」

じょ!」
ってみなきゃ分かんねぇさ」「学校や俺たちは?」「みんな同ってみなきゃ分かんねぇさ」「学校や俺たちは?」「みんなこと、成「この日本、一体、如何なるのかなぁ!」「そんなこと、成たまに誰かが物を言う、それに誰かがそっと答える。

いるごけごっと。

電車で駅に向かったのは私、円藤君、日野君、幾世橋君の

四人、後は皆歩いて帰った。

を釣る。 を釣る。 を釣る。 今晩は私一人きりだ。早々に床をとり蚊帳の三人は先月始めに母の実家がある岩手県胆沢群古城の農家は父が不在だ。国鉄に勤める父は泊まりなのだ。母や弟、妹は父が不在だ。国鉄に勤める父は泊まりなのだ。母や弟、妹誰もいない家に着いたのはもう夕方五時に近かった。今日

それから、晩飯を食べる。釜に今朝の残りがある。未だある仕事が一つ減った。

級友たち如何しているか?今日一日を振り返り、なかなかも明かりが漏れている。戦争に負けても街が明るいって良いが群がっている、蛾も平和を喜んでいるのだ。家々の窓からの群がっている、蛾も平和を喜んでいるのだ。家々の窓からなぁ!

寝付けないでいるのではないかなぁ?また明日会える。 私は

家に入った。

明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが明日の朝飯と昼飯準備をして漸く床に着く、天井を見なが

終わり

ノンフィクション

入選

デイサービス

岡 美智子

片

院の関係で月曜日に行っている。 昨年六月から、デイサービスに通っている。習いもの、通

パートと矢継ぎ早に転居するはめになった。急死して、四十五年も住んでいた家が買われ、老人下宿、アデイサービスに通いたいわけではなかったが、三年前夫が

や、アパートでも大変な目に合い、鬱病になって入院もした。や、アパートでも大変な目に合い、後代の外の処分や引越しなど殆ど一人でしたし、猫を飼って結婚してからは初めて。それも八十歳を目の前にしてだった。一人暮らしは若い頃田舎に勤務していたため少しはあるが、

もがベルを付けてもらえるのではないのを知り、色々教えらった)を頼もうと、市役所支所に行った。ここで初めて誰で妹の家でうっかり触り、「どうしましたか?」の声が聞こえ知困った時、ベルを押すと消防に通知が行くシステム(従姉

人暮らしで孤独死だけは避けたい。

デイサービスに行っている間は安心、それには「要支援」

りだった。
になることが必要。介護保険のことなど初めて知ることばか

くためもう少し暖かくなってからに決めた。月。夫の三年忌が済んだ四月からと思ったが、猫を留守に置

申請して、審査を受け始めて「要支援一」になったのが一

泉が好きなので有るところを頼み送迎つきで体験した。教えられた。包括支援センターの係が世話をしてくれた。温その間、二度まで無料でデイサービスを体験するように、くだとも、近し暖がくだってからに汚めた

に言い、二軒目に行った。とを係の方(ケアマネージャー)の様に恥ずかしかった。お昼ごはんは美味しかったし自分一の様に恥ずかしかった。お昼ごはんは美味しかったし自分一の様に恥ずかしかった。お昼呂に連れて行ったのを見て、自分の事と別いて、お風呂に連れて行ったのを見て、自分の事に言い、二軒目に行った。

山の上にある施設は大きい。老人ホーム他色々ある。デイ決まりなら仕方ない。知人が二人いたのでここに決めた。何でも出来るが、やっては駄目なことも多いそうだ。嫌だが女性は女性の係が面倒を見てくれる。私は未だ自分一人で

くより、両脇を支えても自分の足で歩かせようとしているみ表情も明るい。椅子に座ったきりトイレも車椅子で連れて行が重そうに見える人も、部屋中では押し車で歩いているし、サービスは定員三十五人、五、六人男性がいる。かなり症状

何事にもよく手を貸して面倒を見ている。

えようとしたら私は早い内にテーブルの上にある名前を、裏紙に書いて覚

いらしい。「もう覚えてくれたのウレシイ」と抱きついてくれた人もりた。何年通っていても、隣の人の名前も覚えられない人も多いもう覚えてくれたのウレシイ」と抱きついてくれた人もい

隣の席なのに! 「あんた誰?知らない人だ」と言われた時はショックだった。

くお願いします』と挨拶しましたが」

「『今度から月曜に来ることになった片岡と言います。よろし

「知らない、知らない。聞いてない」と言う。

た。同じようなことが何度かあり慣れるのに時間がかかっした。同じようなことが何度かあり慣れるのに時間がかかっも多いので、分かってあげてね」と係の人が言ったので納得「この人(名前を言う)は、病気のため理解出来ないこと

私はオセッカイやきだと昔から言われているが、

送迎のバスは大体同じような顔ぶれだが、違うこともある話をしてあげることが多かった。ここでは慎むことにした。ばかりと付き合って来たからか。気がついたら注意するか、「そこがあんたらしくて好きなんだよ」と言う、友や知人

も知らなかったのを覚えた。 住宅街にある、藁屋根の家も見たし、道中の花、木の名前ない。トラピスチヌのアジサイの頃は三回も通ってくれた。し、コースも変わる。色々な所を見せてくれるためかもしれ

はパス。字読み書き、算数の計算)があり希望者だけだが、私は算数字読み書き、算数の計算)があり希望者だけだが、私は算数朝一番検温、血圧測定、脳ドリル(小学三年生くらいの漢

「ユ・芸事)」。 隣か向かい側の人が、「湖」に行った、にカナをつける問題に同じ問題用紙が続くのに、○の時と赤で直される時とある。漢字の送り仮名が不得意なので挑戦するが、よく間違う。

「コ」と書いた。

ゃ『コ』しか習っていない」と言う。そうだ、ここではそれ「コとも読むけどここはミズウミと読むんだよ」「ワシだっき

ことにした。「〇(ゼロ)×三は三かい?」 以上言うべきではないんだった。聞いてくれる人には教える

(レイ)なの」「フーン」少しして又同じようなのがあり聞かれ 「掛け算と割り算はどちらに○(レイ)があっても、答えは○

れないんだよ」その度教える。 「これが分かんないだよね。脳梗塞やっているからね、覚え

う九十四歳のお婆さんには 「ワシは学校(がっこ)さ、一回も行ったこと無い」と言

兄、目、日、辛…答えは十五の升目があるが十二でアウト。 字の部位があるか?クイズみたいな問題では、立、木、見、 ら貸すよ」手を出して大笑い。「親」と言う漢字はいくつの漢 面白くて家に帰ってもやってみる。後二つ増えたきり。 「足し算、引き算だけ出来れば上等、上等。指足りなかった

もいるが、トイレには行くので、念のためかも知れない。 お風呂は男女一日おき交代。おむつパンツをはいている人

目と言う。三歩で届く浴槽にも手を出して待つ。 私は一人で歩けるが必ず手を引かれる。温泉は滑るから駄

テーブルに伏せる。三十分でも眠れるとすっきりする。 いるが、すすめられても病人になったようで嫌だからと断る。 ァーに転がるが、前から来ている男性が主に転がるので、空 いている時だけ寝る。ちゃんと寝室があり常用している人も お風呂の後、昼食前の体操まで一休み。一個しかないソフ

> よく出るようあごの下をグリグリ。 私は立ってやれるのにナマけて椅子に腰掛けたまま。唾液が 食前の体操は一、二、三、と掛け声を出しての簡単なもの。

中盛りは無いそうだ。大盛りは男が一人?女では私だけらし と言う。ご飯がもう少し欲しいと言ったら大盛りになった。 昼食が美味しい。栄養士が管理して六百キロカロリー前後

い・そして速い。昔からそうだがこのための病気は無かった

うだそうだとニタリ。食後又一眠り。四十分くらいだが、本 「早飯食いは仕事も速い」と言う言い伝えがあるそうで、そ

デイ、に来てから二キロくらい太った。ウエストが苦しく、

格的に眠っているらしい。

どれも布を足して直した。

食後の体操はやや、本格的にまじめにやる。

う。タントン、タントンタントントン。リードする職員は若 いのに昔の歌を知っていること。私が忘れたのも出てくる。 歌をうたいながらの肩たたき。母さんお肩をたたきましょ

浦島太郎、兎と亀、お山の杉の子など。

その後がお楽しみ。

もストライクとは限らない。私は中くらい。 転がすか、パークゴルフの棒で打ち倒す。上手な人でもいつ トボトルに水が少し入っている)ビリヤードの玉三個を手で 「いきいきくらぶ」ゲームが色々あり、ボーリング(ペッ

「室内デームよまご互互のるが、下目由な人らなるべく参加入れる。数字が得点、マイナスもあり私は上手な方。あやこ(お手玉)投げ。敷物に描いた数字つきの不定形丸にあやこ(お手玉)投げ。敷物に描いた数字つきの不定形丸に

130 にこにないのという。 室内ゲームはまだ色々あるが、不自由な人もなるべく参加

良い気候の間、外出がかなりある。出来るように考えられている。

考えた。 迎えのバスで一番に聞かれた時、ハテお金持って来たかなと「今日はアイスクリームを食べに行きますが参加しますか?」

ケットにあり良かった。なるべく持ってこないようにと言われていたからだが。ポ

中で食べるのは、面白くない。「モチロン参加です!」糖尿の方は行かないそうだ。バスの

お庭の整備された所では外なのでよい気分。

ら、、。 三箇所くらい行ったが自分では行ったことが無い所ばかり

ゝ。 べて歌を歌うこともある。流行歌が多いが、私は余り知らなべて歌を歌うこともある。流行歌が多いが、私は余り知らながて歌を歌うこともある。流行歌が多いが、私は余りない。

と思ったらファンタだった。最初は雰囲気に惑わされたらしれ額に入れ、メッセージつきで渡してくれる。葡萄酒で乾杯?アクセサリーもたっぷりつけ、美人に変身。写真も撮ってくお誕生会は月に一度、月末が多い。綺麗に化粧もしてくれ

人も大きい声で堂々と歌える。その後、カラオケ大会。常連がいる、かなり体の不自由な

捨てられたという涙っぽいのが多いからだが、鼻歌ではやる私はカラオケが嫌い。歌詞が嫌なのが多いから。惚れた、ストラミリア

こともある。

楽しみが出来た。幅を出したり、形を変えられるものを手がしている。古いのでも持ちぐされていたのが役にたつ。選ぶ週一回だからと持っている服を、毎回違うのを着るように最近では童謡のリクエストで歌うが上手ではない。

で認知症の検査を勧められ、受けたが「突発性健忘症」と判なったり、得意な縫い物も出来なくなったことが、続いたの去年「要支援一」になった直ぐ後、スーパーから帰れなく

けたり、張り切ってやっている。

気をつければ大丈夫と言う。 そんな時、ゆっくり深呼吸して待っていると治まるそうだ。

スに行きだした。人脈も違うので面白さが増えた。 そのせいか今年「要支援二」になり、金曜日もデイサービ

ることを願っている。と夜は、オムツをするようになったし、間もなく逝ってくれ十九歳の猫も弱って、留守の時(デイの日や長時間の外出)「終の棲家」は未だ決まっていない。

人生が又、変わるだろう。

佳作

置き忘れた消しゴム(もう消しゴムなんかいらない)

端

欠

一機

「糖尿病」が原因で、手術をし、右足のひざから下を切断し「糖尿病」が原因で、手術をし、右足のひざから下を切断し家族の中で一人、片足で腰の曲がった祖母が居た。祖母は

Vを観たり食事をしたり新聞等を読んだりして、暖かい日に家の中でも、一日中リビングのソファーに腰を下ろし、T

は時々、うたた寝なんかをしていた。

森田一義アワー「笑っていいとも」を食事をしながら観る事楽しみと言えば、昼十二時からUHBで放送されていた、

昼時になると祖母の笑い声が聞こえていた。 表向きは、喫茶店だった実家のリビングの中には、いつも

仕事に追われ、食事すら一緒に食べる事が出来なかった。そんなある日、祖母が私に突然話し掛けて来たが、私は、

で日傘を差して座る、祖母の姿位の物だった。 思い出と言えば、小学校の運動会の晴れた日に、グランド

遇の話が多く、夜は、奥の仏間に戻り、部屋で朝まで静かにっかりとした記憶と、家族にしか話す事が出来ないと言う境日頃から、私の幼少期の出来事を話す祖母の言葉には、し

眠るのだった。

祖母のメガネの奥の瞳には、祖父に先立たれたせいか、淋するのは、少し苦手だった。私は、祖母には可愛がられていたが何故だか祖母に優しく

しさや孤独さが涙目に写っていたのである。

の家族愛と言う物が余り、わかっていなかった様にも感じた。私は、祖母の青春時代も知らない、私には祖母が思う本当

一人残された祖母へのおみやげは、寿し、程度の物だった。家族は、時々家を留守にして外出した。

り合わせ、おせち料理、くじら汁を作った。喫茶店は賑わい、私も母も腕に縒りを掛けて、刺身の大皿盛正月にもなると、地方から兄弟や親戚、業者の人が集まり、

の二千円を私に返してよこした。
れは母に一万円、祖母には二千円、自分は、年甲斐もなかるは母に一万円、祖母には二千円、自分は、年甲斐もなかるんな正月の無くてはならない物が「お年玉」だった。

年玉」の二千円を返したのだった。私は、その二千円で、ち外出など出来ない祖母の胸の内は、わからないが、その「お

ょっとしたカレーライスを作って食べさせた。

祖母の「おいしいよ」の満足そうな一言につくづく祖母の

優しさを感じたのであった。

退職して実家に戻って来た。 季節も変わり、家族も恋しくなったこともあって、会社をそんなある日、私は仕事で東京に行った。

めない中「おばあやんは」と問い掛けた。 喫茶店のドアを開け母親との久々の再会を果たし、

母親からの返事は無かった。

その消しゴムは必要ない。

さい、祖母の死に目にすら会う事が出来なかった事が、祖母の死に目にすら会う事が出来なかった事が、祖母の変少ない記憶を甦らせた。祖母とは、現在実家の仏間母との数少ない記憶を甦らせた。祖母とは、現在実家の仏間母との数少ない記憶を甦らせた。祖母とは、現在実家の仏間母との数少ない記憶を甦らせた。祖母とは、現在実家の仏間のがしゴムは必要ない。

あやん」がいなくて、少し淋しい今日この頃だから。しゴム」ちょっとだけ貸して欲しいと思う。何故なら「おばあやん」に届けながら、今度会いたかったら「置き忘れた消がしゴムは人一倍孤独で、淋しさで一杯で涙もろい「おば

驚愕の嵐

荒

美

子

大沢は何も答えなかった。 聞いていないけど、それにしても、いつ引っ越すのかしら」 げた。「どこに引っ越すことになったの。母さんからは 何も どこに」幸子は、あまり突然の話しにびっくりして大声を上 母が、今度引越すことになりました」「えっ、引越すんですか? 大沢です、母がお世話になって、ありがとうございました。 話器を取った。「杉村でございます」「今晚は、宮田の息子の く教えてね」「今、妹がそちらに行きました」「あゝそうなの。 電話が鳴って幸子は、ぬれた手を拭きながら、あわてゝ受 「引っ越しの手伝いもあると思うから、決ったら一日も早

ったのは、うちの主人の言葉が原因だろう、と私は推測しま りしましたけど、あなたのお母さんが突然引っ越すことにな すか」「まあ、いろくあるようですが」「私も今聞いてびっく と」「あのー、妹がもうそっちに着いている筈なんですけど…」 今主人が犬の散歩に行っているんですが、帰って来たら母さ した」「あゝそうですか」「あのね、お宅のお母さんは今年八 んが引っ越すことになったこと話しますけど、驚くわ、きっ 「あゝ、そうだったわね、ところで母さんから何か聞いてま

すからねー。本当は杉村さんの旦那さんの言う通りなんです ね、と言うことになったのです。わかるでしょ」「母も頑固で アパートの保証人やテレビの保証人を続けることが出来ない てくれないなら、もうこれ以上面倒は見切れません。だから、 私達は全くの赤の他人です。母さんが、私達の言うようにし の言うことに耳を傾けてくれません。何度も言いますけど、

あ ーに、具合が悪くなってから言うからいい』と言って、私達 ちに、ちゃんと書いておいて下さい』といくら頼んでも『な 出して使うわけにはいかないんです、だからお元気な今のう 院の支払いや葬式の費用を母さんの預金通帳から勝手に引き の他人、そうでしょう』私達は縁も所縁もない他人です。ま うするか、ちゃんと決めておいて下さいよ。私達は全くの赤 どうするの?元気なうちに、お葬式はどうするか、お墓をど たのお母さんに『母さん、母さんにもしものことがあったら、 すけどね。『その私達が、母さんに万一のことがあった時、 十五才になるんですよね。 失礼ですけど、 いつお迎えが来て 主人の仕事上のお客様だったという少しの所縁はありま おかしくない年令ですよー。それでうちの主人が、あな

でもないんでいたようでした」「母が、いろく勝手ばかり言さいた。だいたい私達は本当の姉弟ではありません』と話しました。大家さんは『それは困りましたね。どうしたらいいんでしょう。一応聞いてだけおきましたね。どうしたらいいんでしょう。一応聞いてだけおきましたね。どうしたらいいんでしょう。一応聞いてだけおきましたね。どうしたらいいんでしょう。一応聞いてだけおきましなう』と言いましたが。そして母さんが弟の墓に入れてもらうことになっていると言う弟さんの所にも、電話で確認をありました。すると『自分の家のことだけでも大変なのに、取りました。すると『自分の家のことだけでも大変なのに、でもない。だいたい私達は本当の姉弟ではありません』と言う弟というでした。大家さんにも『保証人を続けるこでは、いろく勝手ばかり言さない。だいたようでした。「母が、いろく勝手ばかり言さない。だいたようでした。「母が、いろく勝手ばかり言いない。だいたようでした。「母が、いろく勝手ばかり言いない。」

かったんだ。でもさ、午後の三時過ぎに、前を通ったので何かったんだ。でもさ、午後の三時過ぎに、前を通ったので何とになった、どこに?」「それは言わなかったけどー」「そうか。とになった、と電話がありましたよ」「なに!引越すことになと、さっき宮田の母さんの息子さんから、母さんが引越すこ夫の俊介が、犬の散歩から戻って来た。「お父さんく、大変夫の俊介が、犬の散歩から戻って来た。「お父さんく、大変

まったような話しだったなーと幸子は思った。

る筈ですから」「解りました。そんなことですから、よろしく」

「はい」宮田の母さんの息子さんの話は、何か奥歯に物が挟

ってすみませんでした。とに角、妹がもうそちらに着いてい

お父さん」「こんな目と鼻の先に居るのに、挨拶もしないで居気なく寄ってみると、いつも掛っていないのに入口のドアに気なく寄ってみると、いつも掛っていないかと心配もしたよ」「なんったんだ。中で倒れてるのではないかと心配もしたよ」「なんったんだ。中で倒れてるのではないかと心配もしたよ」「なんったんだ。中で倒れてるのではないかと心配もしたよ」「なんでも、娘さんが、もう来てる筈だそうですよ」「あの娘がかー。さっと娘が強引に母さんを施設に入れたのかも知れないなー。そうだ、お母さん、宮田の母さんの携帯に電話して聞いてみそうだ、お母さん、宮田の母さんの携帯に電話して聞いてみた。ではメモを見ながら母さんの携帯番号にアタックしてみた。ではメモを見ながら母さんの携帯番号にアタックしてみた。ではメモを見ながら母さんの携帯番号にアタックしてみた。ではメモを見ながら母さんの携帯番号にアタックしてみた。ではメモを見ながら母さんの携帯番号にアタックしてみた。ではメモを見ながら母さんの携帯番号にアタックしてみた。でも、お母がより、大好きな相撲のテレビも付いてる様子も人気も健がかけても、何の応答もないかというというないで居とないがある。

こに財産があるの?逆に俺達こそ被害者だと思わないか。母とに財産があるの?逆に俺達こそ被害者だと思わないか。母さんのどいかと娘は思っているらしいが、冗談じゃないと思うんだよ。挨拶ぐらいしたって、罰は当らないと思うんだおまあ、あした大家さんの財産目当てに世話をしているんじゃないかと娘は思っているらしいが、冗談じゃないと娘は思っているらしいが、冗談じゃないと思うんだ。何か悪いことなくなるのか。俺達が何をしたって罰いてみよう」「そうですたら挨拶に来るんじゃない」「あの娘のことだ。どうだかなー。たら挨拶に来るんじゃない」「あの娘のことだ。どうだかなー。たら挨拶に来るんじゃない」「ある。

たゞいてとても助かりました」「そうですか。私共には宮田さ 惑してしまいましたけれど、宮田トヨさんに引越ししてい 言って来られた時、困ったなー。どうしたら良いだろうと困 やなくてよかったです」「杉村さん達が、保証人を止めたいと 居るんじゃないかと、とても心配していたんですが、そうじ 無いので解りませんでした。宮田さんが家の中で倒れてでも 来ました」「もう引越されたんですか。私達の方には、挨拶も りですか」と聞くと「昨日引越しましたよ。娘さんが挨拶に んだから、やっちゃいられないよ」「お父さん、そのうち、き で面倒を見ているだけなのに、財産目当てだなんて思われる だもんねー。俺達も悪いことなんかしちゃいない、いや善意 に悪しざまに罵られ、叩かれ、挙句の果てに殺されちゃうん と同じだなー。程度は違うけどよ、善いことしかしてないの 全く」と俊介は腹の虫がおさまらないらしく、いつまでも一 てで世話してるなんて思われるのは本当に頭に来るよなー。 初めから貰うつもりで世話したわけではないけど、財産目当 るけど、いつでも出してくれるわけでもなかったよな。勿論 わけでもないし、たまにガソリン代を出してくれることもあ も俺とあんたと二人で付き添って行ったって、日当をくれる さんが病院に行ったり、市役所に行ったり、どこに行く時で っと、良いことがありますよ」「そうだといいけどね」 人でぶつくと言っていた。 そして何を思ったか、 「キリスト様 翌日大家さんを訪ね「宮田トヨさんが、どうされたかお解

俊介と幸子は、お礼を言って大家の家を後にした。までいろくお世話になりました。ありがとうございました」「今んが、私達はただお部屋を貸すだけですので、個人的な事にんが、私達はただお部屋を貸すだけですので、個人的な事にんが、私達はただお部屋を貸すだけですか。個人的な事にんが、私達はただお部屋を貸すだけですか。「何があったか解りませんよ。んの挨拶も何も無いものですから、大変心配しました」「そうんの挨拶も何も無いものですから、大変心配しました」「そう

の中いろんな人が居ますからね。仕方がありませんよ」「そうの中いろんな人が居ますからね。仕方がありませんよ」「そうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパート「そうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパートにでうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパートにでうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパートにでうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパートにでうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパートにそうなのかも知れないなー。でも、母さんのいたアパートにそうなのかも知れないない。

誰だろう。どうしたんだろう、いたずら電話でなければよいットに入ろうとした矢先、突然電話が鳴った。「こんな時間にあれは忘れもしない昨年四月十日の午前二時半、幸子がべ

奥さん、 当分家に泊るようになると思うけど、 奥さんの為に る音がして、夫の俊介が、腰が九十度程も曲った老婦人を伴 んだろう、と幸子がぼんやりと考えていると、車のドアが閉 前の電話からまだ一時間半しか経っていない。一体どうした しら、と思いつゝ時計を見ると午前四時を少し過ぎていた。 は急いで家を飛び出して行った。こんな時間にどうしたのか 奥さんが言うから、俺ちょっと行って来るわ」と言って俊介 うと「こんな時間にどうしたんだろう」と言いながら宮田さ 器を俊介に渡しながら、「宮田さんの奥さんからですよ」と言 丁度起きて来たようです、少々お待ち下さい」と言って受話 トヨからだった。「旦那さんはいらっしゃいますか」「あら、 話の音で目が覚めた。急いで電話口に出て見ると先程の宮田 ですぐ眠ってしまった。どれ位経っただろう、何度も鳴る電 んだろう、と思いながら幸子はベットに入った。遅かったの す」と言って電話は切れた。こんな時間に、どうしたと言う まだ寝ておりますが」「そうですか、じゃあ又後でお電話しま 杉村さんの奥さんですか、私宮田トヨですが、旦那さんいら 恐るく受話器を取り「杉村でございます」と言うと「もしく が、もしかしたら悪い報らせかも知れない」と思いながら、 って部屋の入口に立った。「お母さん、悪いけど、宮田さんの んの奥さんに向い「母さん、どうした」と声を掛けた。「あの、 っしゃいますか」と言う老婦人の緊張した声がした。「主人は 『ご相談したいことがあるので来て下さい』と、宮田さんの

> 少し休んで下さい」と言って、幸子も二階に上がって行った。 入って行った。まだ春先の夜明け前だ。「まだ早いですから、 ヨは曲った腰をゆさくゆすりながらゆっくりと幸子の部屋に ー、奥さん。ご迷惑ばかりお掛けして」と言いながら宮田ト 内した。時計は午前五時になろうとしていた。「すみませんね 遠慮なく使って下さい」と幸子は宮田トヨを自分の部屋に案 えベットメーキングをし直した。タンスと洋ダンスそして机 けしますけど、お世話になります」と挨拶した。「少し綺麗に トを空け渡す覚悟をした。「宮田トヨです。奥さんご迷惑お掛 部屋があるって言うの。と幸子はぶつぶつ文句を心の中で言 るのー」どうしたの、こんな時間に、だいたいどこにそんな 布団を敷いて、俊介の隣で寝るのは久し振りだった。 本当はお泊め出来るような部屋じゃなくて恥かしいのですが と戸棚が六畳の部屋を埋め尽していた。「お待たせしました、 しますからお待ち下さいね」と言いながら、シーツを取り替 いながらも宮田さんの奥さんの為に、自分の使っているベッ 部屋用意してやってくれないか、悪いな」「えーっ。家に泊

そうだったの、実は 最初の電話は午前二時半にあったのよ。家に来ればいいよって連れて来たんだけど、悪いなー」「あゝ」、公な時間に開いている所なんてあるわけないし、取り敢えず、以な時間に開いている所なんであるわけないし、取り敢えず、民宿かホテルにでも連れて行って下さいと言うんだけど、こ民宿かホテルにでも連れて行って下さいと言うんだけど、こ民宿かホテルにでも連れて来るというにいる。

眠ってしまった。 んないよ」そう言いながら俊介は早くもいびきをかきながら り合っただけで、個人的につき合ったわけではないから、分 するような人だとは知らなかったしなー、だいたい仕事で知 用の出来る人だと思ったからだとさ。夫の夏彦さんがDVを すよ。その電話が午前四時だから驚いちゃうわよね、どうな でお電話します』と言って掛けて来たのが、さっきの電話で っているんだか」「そうだったのか、まだ早いから、少し休め」 『ご主人は』と言うので、『まだ寝てます』と言ったら『又後 「こんな時間になんで家に電話をして来たのか聞いたら、信

事だったが、「大丈夫、おいしいよ」と宮田さんの奥さんは食 い婦を長年やって来た人に食べてもらうには恥しいような食 とうございます」幸子はいつもながらの朝食を準備した。賄 何の遠慮もいりませんので、気楽になさって下さい」「ありが にはベットに入ります」「じゃあ、ここでもそうして下さい。 それは大変ですね、何時にお休みになるんですか」「毎晩十時 は午前二時半になれば目が覚めてその後寝れません」「あら、 しはお休みになれましたか」「お陰様で少し休めました」「私 に点いていた。「お早うございます」「お早うございます。少 べてくれた。 幸子が朝食の準備に階段を下りてゆくと、居間の明りが既

詳しく話して下さい」「はい、解りました」 ところで宮田さん、今日はどんな用件で来られたのですか。 日を教えて下さい」「はい。宮田トヨ八十四才。生年月日は昭 来られたのですか」「はい、私です」「じゃあお名前と生年月 が来て、名刺を出しながら挨拶した。「今日はどなたの問題で りました。生活安全課の近藤です」と言って、私服の警察官 所を作ってくれた。俊介と幸子もテーブルに着いた。「遅くな どうぞ」と言って置いてあったイスを畳み、車イスが入る場 体を向けただけだった。「狭くてすみません。車イスのまヽで 言っても机がビッシリ並び、身動きするのも難かしそうな狭 服の女性が片隅のテーブルに案内してくれた。こちらに、と 被害届けを出しに来ました」「こちらにどうぞ」とブルーの制 宮田トヨの車イスを押しながら生活安全課に行った。「DVの うございました。右の奥ですって、行きましょう」と幸子は 言うと「生活安全課になります。右の一番奥です」「ありがと れて行ってくれた。「DVの被害届けを出したいのですが」と 係の人が車イスを押してスロープを上り、案内係の前まで連 の六。水島アパート一の五です」「ありがとうございました。 和五年六月十日です」「住所はどこですか」「函館市堀田町三 い部屋だったので、椅子から立ち上がり、テーブルの方に身

を函館中央署に連れて行った。石段の所でブザーを押した。 と宮田トヨ ったわけでもないのに『死んでもいいからタバコが吸いたい』 「夫夏彦は肺濃症と云う病気で入院しておりました、まだ治

俊介は、DVの被害届けを出しに行かないと、

決心をしたのです。 そして杉村さんに電話をしました」 「そう まで充分尽して来ましたのでもう勘弁してもらおうと別れる ろく考えました、私も今年八十五歳になりますが、老い先短 たね、どんなに怖かったか、それでどうしたいのですか」「い れはそれは恐ろしくてしょうがありません」「本当に大変でし されたり、髪の毛をわしづかみにして引きずり廻したり、そ と転ばすこともあります、起き上ろうとするところを蹴とば 夏彦さんはトヨさんをどのようにして転ばすんですか」「坐っ 止めてあるそうです」「あゝそうですか。わかりました、夫の の所で転んで背骨を骨折しました。手術して三本のボルトで ません」「その腰はどうしたのですか」「この腰は去年、玄関 る私を転ばすんです。私はこんな体ですからなかく起き上れ て行け。お前なんか出て行け』と叫びながら椅子に座ってい めました。毎日午後四時からお酒を飲み始め、『お前なんか出 のように吸いたいだけタバコを吸い、浴びる程お酒を飲み始 てくれません」「それでどうなりましたか」「その日から以前 村さんに食べさせたいと漬物を漬けたので、取りに来て下さ 何でこゝに居るんだ、さっさと帰れ』と怒り出しました。『杉 てみると杉村さんの旦那さんが居たものですから『おまえは ている私の後に立ち、私の肩に両手をかけて揺さぶり椅子ご い老人ですから恐怖の毎日を過すのはご免です。 夏彦には今 いと私が電話を掛けたのです』といくら説明しても夫は解っ

と言って主治医を説得し強引に退院して来ました。家に入っ

えー、だいたい解りました。まだ何かありますか」「夫の酒乱 三一八八ですね、ありがとうございました杉村さん、ところ だって」「じゃあ言いますよ、四七の三一八八です」「四七の さんの家にお願いします」「電話番号は」「お母さん電話番号 ましょう。ところでどちらに連絡をすればいいですか」「杉村 うですね、それでは警察の方から夏彦さんに連絡を取ってみ 出て来ましたので、荷物を取りに行きたいのですが」「あゝそ 毒だと、とうく今日まで来てしまいました」「もう我慢の限界 学校を卒業する迄我慢しよう、いや結婚する時片親では気の は若い頃からでした、いつ別れようか、と思いつゝも、娘が 首を吊りましたか」「いえ、じゃまだ、と言っていつの間にか でした。今思い出しても身震いがします」「それで夏彦さんは 朝起きる度、夫が首を吊って死んでやしないかと恐怖で一杯 ちつけ太いロープをぶら下げて首を吊る準備をしました。毎 る時夫の夏彦が『死んでやる―』と言って玄関の所に釘を打 たものです」「他にはどんなことをされましたか」「はい、あ 前から飲んでいました。飲めば酒癖が悪く、よく息子と逃げ 十歳になります」「以前からお酒を飲んでいたんですか」「以 く夏彦さんの生年月日は」「昭和十年七月二十五日生れ今年八 で宮田トヨさん、杉村さんとはどう言うご関係ですか」「すご でしょうか」「忘れるところでしたが、着替えも何も持たずに です」「本当に大変でしたね」「そうくお願いがあります」「何 ロープを片付けて無くなってました」「それは良かったですね

情いて下さい。 した。それが又不思議な出会いなんです。 でバッタリ会いました。それが又不思議な出会いなんです。 でバッタリ会いました。ところが今年の二月の末に、国立病院が、その後函館に転勤になってからはお会いすることも無くが、その後函館に転勤になってからはお会いすることも無くが、その後函館に転勤になってからはお会いすることも無くが、その後函館に転勤になってからはお会いすることも無いでバッタリ会いました。それが又不思議な出会いなんです。そこででバッタリ会いました。それが又不思議な出会いなんです。 でバッタリ会いました。それが又不思議な出会いなんです。 でバッタリ会いました。それが又不思議な出会いなんです。 でバッタリ会いました。それが又不思議な出会いなんです。

東場に入れようとしたら、誰の車だか解らないけど、ぶつけた生に診てもらおうと国立病院に来たのです。丁度私の内科先生に診てもらおうと国立病院に来たのです。丁度私の内科の診療日でもありましたから一緒に主人の車に乗せてもらって来ました。私は玄関で車を下り、車イスに乗って待ち合いをの方へ行ったところで杉村さんに呼び止められました。『あるが悪いと言うので診てもらいに来たの。私も内科の診療日だったので一緒に乗せてもらって来たんだわ』『ところで父さんは』『そう言えば遅いね、どうしたんだろう』と言って玄関の方を見ると夫の夏彦がふらふらしながら入って来ました。『あれさんが『どうした父さん』と近寄って行くと、苦しそうな呼吸をしながら、『あー、あんたか、久し振りだなー、困ったことになっちゃったよ』『どうしたの、父さん』『今車を駐たことになっちゃったよ』『どうしたの、父さん』『今車を駐けていたのであると、誰の車だか解らないけど、ぶつけを見ると大の夏彦が呼吸をすると胸が苦しいと申しますので病院の夫の夏彦が呼吸をすると胸が苦しいと申しますので病院の夫の夏彦が呼吸をすると胸が苦しいと申しますので病院のたりにないます。

まだ新車じゃないか。具合が悪くて集中出来なかったんだなたらいいだろう』『どれ、どの車、俺が見てやるから』と杉村たらいいだろう』『どれ、どの車、俺が見てやるから』と杉村たらいいだろう』『どれ、どの車、俺が見てやるから』と杉村たらいいだろう』『どれ、どの車、俺が見てやるから』と杉村てしまってさ、とんでもないことになってしまった、どうしてしまってさ、とんでもないことになってしまった、どうしてしまってさ、とんでもないことになってしまった、どうしてしまってさ、とんでもないことになってしまった、どうしてしまってさ、とんでもないことになってしまった、どうしてしまってさ、とんでもないことになってしまった、どうしていまってさ、とんでもないことになってしまった。どうしていまってさいだった。

『そうだよな、じゃあ、その話は診察終ってからにしよう、うかだよ、もし使えば、次の年から保険料は結構上るからね』理代もそんなにかゝらないと思う、それより保険を使うかどる時ぶつかったんだから、傷はそれ程でもないよ。だから修一、もっと慎重に運転すれば良かったのに』『父さん、駐車す

私のアパートに寄ってくれて、車の修理と保険のことについ私のアパートに寄ってくれて、車の修理と保険の件で話しす。それから又病院に戻り、夫と車の修理と保険の件で話し私の診察が終るのを待って、アパートまで送ってくれたので私の診察が終るのを待って、アパートまで送ってくれたので私の診察が終るのを待って、アパートまで送ってくれたのでは、自子達を家に置いて来るから、後で又来るよ』そう言って杉良子達を家に置いて来るから、後で又来るよ』ぞのよいからさ』『解った。俺、丁度レントゲンを撮りに行かなきやないからさ』『解った。俺、丁度レントゲンを撮りに行かなきやないからさ』『解った。俺、

買物も大変だろうと私の所にも度々足を運んで下さいました。 何から何まで大変お世話になりますので、時々コンビニに一 ように主人を見舞い将棋の相手をしてくれていたようです。 に呼ばれました。酒もタバコも禁止です。ナース室のすぐ向 膿を少しづつ注射器で吸い取ると言われたそうで、私も病院 か」「主人の病名は、肺濃症だそうです。毎日肺に溜っている あきれて物が言えませんでした」「その後、どうなったのです 行って遊んで来たそうです。どれ程心配したか知れないのに、 ですか」「はい。入院すれば行けなくなるからとパチンコ屋に 来ました、どこに行ってたと思いますか」「どこに行ってたん 言ってくれたので待つことにしました。するとやがて帰って から、必ず帰って来ると思うよ、もう少し待ってみたら』と 杉村さんに電話しました。 『主人が戻って来ないんです。 どう した』と丁寧な電話でびっくりしました。間もなく主人から、 村の家内です。沢山おみやげをいたゞきありがとうございま んが家に帰るとすぐ、今度は奥さんからお礼の電話です。『杉 て戸棚の中からお菓子等を袋につめて持たせました。杉村さ と思いましたが、冷蔵庫にあった肉や魚、ヨーグルト、そし て報告してくれました。大変世話になったので、何かお礼を いの一人部屋でした。一人で退屈だろうと杉村さんは毎日の しましょう』『母さん、今日中に入院しなければならないんだ っても待っても帰って来ません、どうしたのか心配で心配で 『入院することになった』と電話がありました、ところが待

課の近藤さんは「市役所のDV被害の係にも行ってみると すっきりしたー。どうもありがとうございました」生活安全 した、長いことご苦労さまでした、気をつけてお帰り下さい」 ましょう、日時が決まったら連絡します。よく話してくれま 夏彦さんには『荷物を持ち出したい』と都合の良い日を聞き でしたから」「そうでしたか。わかりました。いい人にめぐり か。考えたら解るでしょうに、馬鹿ですよね。夫の夏彦に万 にもなるこんな腰の曲った女を誰が相手になどするもんです からって男と女の関係になるわけがない、だいたい八十五歳 ないのですが、嫉妬なのでしょうか。杉村さんと一緒に居た になるんですね」「そうです、何もやましい事など一つもして をするようになったのです」「なるほど、それが後々大変な事 か、おいしいタラコが手に入ったから取りに来て、とか電話 あるかのような気さえして、漬け物つけたから取りに来てと と感心しながら、信用を深めて行きました。自分の身内でも らお礼の電話があるんです。こんな夫婦はなかく居ないなー、 緒に行ってもらって、 おみやげを持たせるとすぐ又奥さんか いゝ」と教えてくれた。 合えて良かったですね。ありがとうございました。ご主人の イスしてもらってました、何しろ杉村さんは、その道のプロ 一の事があったら、どうすれば良いか等、多くの事をアドバ 「胸につかえてた事、一気にしゃべってしまったら、あゝ、

宮田トヨが杉村家に逗留第一日目は、このようにして過ぎ

おくけど、俺達は離婚を勧めたことなんて一度も無いからね 早めに出かけますから用意してゝ下さいね、母さん、言って 来ましたよ。明日十時に来て下さい、と言うことでしたから、 館ですから」「はいく解りました」「弁護士さんからも連絡が 所へ行きましょう」「はい」「明後日はNPOのウィメンズ函 さんの奢りだった。「母さん、明日は市役所のDV被害の係の れていないのだ。手続きが終って時計を見ると十一時半を廻 求められた。宮田トヨはたどたどしくサインをした。書き馴 の人が逐一事情を書き、読み上げてそれでよければサインを 持ち出せなかったので年金証書の再発行をお願いすると、係 右の一番奥だった。中央署と同じような事を何度も説明した。 ました」社会保険庁は混んでいた。年金証書の再発行の係は、 続きに行きましょう。 朝食が済んだらすぐ出かけるよ」 「解り やあお願いします」「明日は社会保険庁に年金証書の再発行手 なものだから、再発行してもらった方がいいよ」「そうか、じ 鑑」「年金証書は」「持って来てない」「年金証書はすごく大事 手続きに毎日付き合わざるを得なくなった。「母さん、何何持 と幸子は日常の自分達の生活を差し置いて宮田トヨの諸々の スに乗せて目的の係の所まで押して行き介助する。杉村俊介 て行った。俊介が車を運転し、妻の幸子が、宮田トヨを車イ っていた。帰路スーパーに寄ってお弁当を買った。宮田トヨ って来たの?」「健康保険証とゆうちょ銀行の通帳、そして印 「はい、解ってます。私の方から弁護士さんを頼んで下さい

> ヨは何度もそう答えた。 もいいんだよ」「いや決心は変らない」と俊介の言葉に宮田トとお願いしました」「母さん、今からでも離婚を思い留まって

う。そうしないと荷物は持ち出せません」「母さん、どうする。 安全課の近藤さんとも調整し、夫夏彦の立ち会いの上、宮田 ました」娘さんの言葉通りになった。都合のよい日時を生活 ら、費用は発生するんです」「そうですか、ありがとうござい 掛らないと思ってました」「いえ、一度動き始めてる訳ですか 取り下げても費用は変りません」「変らないんですか、費用は 私が父を説得しますから。みっともなくてしょうがありませ 市に住む娘さんから、『強制退去命令を取り下げてください。 な仏壇等を持って来ないとアパートにも移れないし。お願 費用も別に掛るんだって」「仕方が無いね。私のタンスや小さ と、「家庭裁判所の方から強制退却命令を出してもらいましょ 目だって言い始めたんだって」「いやく困ったもんだね。どう さんが、早く荷物を持って出て行けと言ってたのに、いざ都 トヨは自分のタンス、小さな仏壇、食器棚などを、運送会社 ん』との電話で強制退去命令の取下げの手続きを取りました。 します」。数日の後、弁護士から連絡があった。「島根の浜田 しよう」「弁護士さんに相談しよう」俊介が弁護士に相談する 言い始めました」「母さん、父さんが荷物を持って行っちゃ駄 合の良い日を打ち合わせる段になったら、持ち出させないと 警察の生活安全課の近藤さんから電話があった。「宮田夏彦

同生活の後、ようやくアパートでの一人暮しが始まった。好市役所でロックを掛けてもらった。杉村家での一ヶ月半の共元気でいて下さい」とお互い挨拶するのを俊介は見ていた。「俺が悪かった。戻ってくれ」と何で言わないんだろうと、「俺が悪かった。戻ってくれ」と何で言わないんだろうと、「俺があかった。戻ってくれ」と何で言わないんだろうと、「他が悪かった。

きな料理も出来た。

職婚の調停を前に、娘と息子の「両親の離婚についての同意書」の作成が必要となった。息子の代筆で文書の作成が幸された。あなた方を信用していないのです。私がいくら『私ました。あなた方を信用していないのです。私がいくら『私ました。あなた方を信用していないのです。私がいくら『私ました。あなた方を信用していないのです。私がいくら『私ました。あなた方を信用していないのです。私がいくら『私書には理解出来ないのですが、あの方達はキリストの精神で達には理解出来ないのですが、あの方達はキリストの精神で達には理解出来ないのですが、あの方達はキリストの情神では、とうでは、おいいのですが、おいいのですが、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またが、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、またいでは、ま

た。やっと離婚に辿りつけたと宮田トヨ本人弁護士そして杉のか疑問が残った。七度目の調停で、夫夏彦は離婚に同意しと、娘も前から言ってくれてます」と言ってたのは何だった「田トヨが幸子に「『母さん、いつ離婚してもいいからね』

村夫妻が喜んで弾んだ声で語りあっていた。夫の夏彦と弁護村夫妻が喜んで弾んだ声で語りあっていた。一体何と言うた。荷物を持ち出す時と同じパターンだった。「一体何と言うた。荷物を持ち出す時と同じパターンだった。「一体何と言うた。荷物を持ち出す時と同じパターンだった。「一体何と言うた。荷物を持ち出す時と同じパターンだった。「一体何と言うた。荷物を持ち出す時と同じパターンだった。「一体何と言うた。荷物を持ち出す時と同じパターンだった。手の夏彦と弁護力が水の泡と消えた。「お役に立て戦争の不知を取りません、負担に思わったが「弁護士さんが悪いながらも皆果然としてしばらく立ち上ないで下さい」と言いながらも皆果然としてしばらく立ち上であることも出来なかった。

年連れ添ってもこんなものなのかねー、とっくに冷めていた宮田トヨと関って一変した杉村夫妻の生活も元に戻り、慌た宮田トヨと関って一変した杉村夫妻の生活も元に戻り、慌た宮田トヨと関って一変した杉村夫妻の生活も元に戻り、慌たったが、何と哀れな事になったことか。最悪の結末だった。しかし宮田トヨは俊介の「母さん、葬式には行かないの」としかし宮田トヨは俊介の「母さん、葬式には行かないの」としかし宮田トヨは俊介の「母さん、葬式には行かないの」としかし宮田トヨは俊介の「母さん、葬式には行かないの」としかし宮田トヨは俊介の「母さん、葬式には行かないの」としかし宮田トヨは俊介の「母さん、葬式には行かないの」といいで、俊介や幸子の前でも涙、通夜にも告別式にも出席しなかった。俊介や幸子の前でも涙、通夜にも告別式にも出席しなかった。俊介や幸子の前でも涙、通夜にも告別式にも出席しなかった。俊介や幸子の前でも涙ーの表示に戻り、慌た宮田トヨと関って一変した杉村夫妻の生活も元に戻り、慌た宮田トヨと関って、対対をいまして、

束はしてない。第一家族のことだけでも沢山なのに、何で他 万円では足りないと思うし、青森の弟さんだって、そんな約 墓は、弟の墓に入れてもらうことになってるから」とようや 家も困っていた。「葬儀の費用は互助会に二十四万円あるし、 た。「それは困りましたね。どうしたらいいんでしょう」と大 せん」と俊介は宮田トヨの借りているアパートの大家に話し 捕されるのなんて真っ平ごめんだもの」俊介の気持は宮田ト して使うことは出来ないんだよ、娘さんにでも訴えられて逮 あった時、母さんの通帳から病院の費用や葬式費用を引き出 としないので「それなら、これ以上母さんの面倒を見ること きどうするか、ちゃんと書いておいて下さいよ」「具合悪くな した。「母さん、元気なうちに、母さんに万一の事が起ったと てやったんだ」と言う。トヨの話を聞いた俊介は早速切り出 頼まない、杉村さん達に頼むから心配しなくていゝ』と言っ 私が面倒見なきゃないのかい』と言うから『あんたになんか 母親を責め立てた。そして「『母さん、あんたに何かあったら、 く母さんが言うのを聞いた俊介は「母さん、今どき、二十四 は出来ません、俺達は全くの赤の他人、母さんに万一の事が ヨには届かなかった。「こう言う訳で保証人を止めざるを得ま ってからでいゝ」「母さん認知症にでもなったら大変でしょう」 「いや大丈夫だ」と一向に俊介のアドバイスを受け入れよう 葬式の後トヨの娘が「母さんが父さんを殺した」と言って

> 返事も来なかった。 しまの心配までしなきゃないの、俺達は本当の姉弟ではな人の墓の心配までしなきゃないの、俺達は一です。お母さんに万一の事が起きた時、肉親のあいまの他人です。お母さんに万一の事が起きた時、肉親のあいただと言ってたよ。母さん勝手に決めてもだめだ、ちゃんいんだと言ってたよ。母さん勝手に決めてもだめだ、ちゃん人の墓の心配までしなきゃないの、俺達は本当の姉弟ではな人の墓の心配までしなきゃないの、俺達は本当の姉弟ではな

と云うことなのかしら」と幸子は俊介に語りかけた。

俊介は毎朝犬の散歩をしながら 新聞のテレビ欄を宮田トとの一つも言わないんだ。届けるの止めて、自分で新聞を取るように言おうかな」と俊介が時々幸子に話した。幸子はトヨから買物をしたいと頼まれた時 折を見て穏やかに言った。ある日「この頃母さんテレビ欄の新聞届けてもありがとた。ある日「この頃母さんテレビ欄の新聞届けてもありがとるように言おうかな」と俊介が時々幸子に話した。幸子はトヨから買物をしたいと頼まれた時 折を見て穏やかに言った。「母さん、すみませんね。うちのお父さんは即実行の人だから母さんの気を損ねるような事言ってることは本当のことなれ、母さん。うちのお父さんが言ってることは本当に困るんだから。でも母さんの気を悪くさせたらごめんなさいね」んだから。でも母さんの気を悪くさせたらごめんなさいね」「うん、いゝんだ。とに角あんたも大変だなー」

「今朝母さんの所に行った時『お母さんは何時に起きた?』

それ以来病院でも一度も姿を見ていない。強引に鳥取浜田の どこかでちゃんと睡眠取れてるんじゃない」「そうなんだなー り固定してしまったんだ」「テレビ見ながらコックリしてたし そしたら『あれ、本当にそうだいね』と言ってたよ。だいた 寝たい時に寝、自分の好きなものを好きなだけ食べ、誰から アパートで悠々と独り暮しを楽しんでるんじゃない、自分の たからこそ、母さんからの電話を受け取って、そのお蔭で今 と聞くから『七時過ぎに起きたよ』と言ったんだ。すると『い い婦をやってた習慣なんだろうなー、所謂体内時計がすっか い午前二時半に電話をよこすなんて普通じゃないよ、長年賄 も邪魔されずに、見たいテレビを見たいだけ見られてる母さ 施設に入れられたのかも知れないと幸子は哀れに思った。 んこそ一番幸せじゃないの」「母さんにそう言ったんだ俺も、 いもんだいね、そんな時間まで寝てるなんて』と言うんだよ」 「あら、そんなこと言ったの?私が夜中の二時半まで起きて 宮田トヨが引越したのは、それから間もなくのことだった。

選 評

竹 中 征 機

く読ませて頂いた。 た時代の相違を感じさせ大変興味深 集まった。 テランといった年齢層が、思わぬ生き 本 年 度 は 年代は四十代の若い方とべ 五. 名 \mathcal{O} 方 0 七 編 \mathcal{O} 作 品 が

印象を刻銘に記している。 け入れるい 八月十五日の私」はポツダム宣言を受 その頃の学徒が、それをどうとらえ ・わゆる有名な玉音放送の

先ず、

菊地政義さんの「昭和二十年

未来を感じさせた。 傷兵と看護婦の逢引きのことなどは、 を伺わせる雰囲気が良く読み取れた。 にとって口に出せないが明るい 時に戦時体制 心に刻んだのか興味深く読んだ。 大人にとっては「神国」の崩壊と同 待 岬 からの解放だった。 0 啄 木一 いずれも、客観に 家墓地付 · 兆 し 近の 若者

し、感情に溺れない筆致に感心させ

0

心なり

情況

をし

っか

り伝

え共感や

文章の大切なこととは読者に自分

感動を呼びさます事にある。今回はそ

が変わる自分。しかし。それに対応す 片岡美智子さんの 連れ添いが亡くなって、次々と住居 「デイサー ピ こス」

> の点、 る。

> > 内容が良か

ったということであ

る逞しさが身につく様子が文章 通常、私も含め要介護要支援とか 生き生きと描かれている。 ナの中 لح

あっても避けて通れない道であるこ が、それは身近なことでこれから誰で いう世界は無縁のことと思いがちだ

とが、良くわかった。 目と文筆家の冷静な視線を以て見事 片岡さんは、そのあたりを体験者 0

に描いた。

しゴム(もう消しゴムなんかいらな てやまない。 い)」は亡き祖母を思う心が胸を打 また欠端一機さんの「置き忘れた消

した。 あり文意を汲み取るのにとても苦労 しかし、肝心の所で文章に曖昧さが

るが、大変な力作だったが 次に荒美子さんの 驚愕 .の嵐」 課題 が であ

だったが、次の点が弱かったため、 に一石を投じ、深層をえぐる良い 立った。 内容においては、 現代の高齢化社会 材料

分読者に意がつたわらなか っった。

口何時、何処で誰が何を等の文章作法 □無用なマスの空白が多

ないと、 化を是非お薦めしたいと思い、 四それぞれの 三会話のみで時空を進行させること。 内容に良いものがあるだけに、 人間関係が分からない。 関係を小出 しに説 今回は 小説

の愛を告白している。ただ別れ 簡文の作品 清水牧子さん「貴方への手紙」 で、素直に男女間 のか て生き は書 つて

佳作にとどめた。

な高 とが惜しまれた。愛は弾むままで書く る理由がはっきりしない にぶりし か伝わってこなか ため、

戦を期待したい。れば花」と言われるように。再度の挑してかみしめてほしい。例えば「秘すより抑制されて初めて伝わることと

吹く風

取り出した本から落ちた いたずらに ふうーと一息かけたら 古いA4サイズの新闻纸 大きく用けた窓の外に

飛んで、庭石の上に ふありと落ちた

頬 杖ついて 眺めていたら

庭石を守るように新闻纸が

ピタリとはりついて、何となく

暖めているように見えた

心が穏やかになって行く

寒い寒い日だったから一

不思議だなあ

感情もないそれぞれに 己が「心」 動かされている

だけど―

美 保

145

梅 村

オトシメル・カモシレナイ、 悪意を持ってすぐ側の車道へと飛ばし風は魔法使い風は魔法をい

その新闻には、どんな記事が書かれてた?「シンブンシ」ハ クルマノシタジキ

世界は?日本は?日本は?

四れでしまった・・・・・思わず、「おかえり!」と外から運ばれて、元のさやへ外から運ばれて、元のさやへ戻の真ん中で、ざあっと塵があがり

そう思ってる向に

ちいさいまんま ちいさいまんま 大人なのに 私の心は

私を乗てた私のとうさん

十八のときだった

そんな私を私は心の病気で とうさん乗てた

启る方法 あったのに探していた とうさん私を見なかった

とうさん自分のことばかり

高 田

枝 寿

子

そう言ったお前と縁 切ったからなどうさん言った 離婚はお前のためだからな

役いてしまうときがある子 供のように私 は今でも

考える 産まれてきてよかったのかなって

ちいさいまんま

私の心は

自分―じぶん…

自分って 自分って 誰が決めるの?

どこからどこ迄が 自分?

私は どう写っていますか

私は どう思っていますかあなたの目に

自分のことを

心と体に 忠実に! 剱密に心と体に付き合って来た! 今の今迄

誠実に!

自分じゃない 自分―

掛 公

恵

玉

けれど 人は 人は―

十分 強いよって! 写るのは 心じゃない

自分じゃないのか! 見い出した自分は 自分の写真を 見詰めてみる幼き頃の

その目は 私を見詰めている

ここに いるよ」―と。「あなたは

真っ直ぐに

選評

鷲谷 峰雄

言葉で詩作をするのです。 今回は31 篇の応募がありました。 計は文学として、詩でしか表現できない分野です。この領域を感性で探るのでい分野です。自分の感性で選んだ新鮮ない分野です。

入選「吹く風」

梅村美保

由に飛びまわるだろう。風そのものに命新聞紙に命があれば、風を利用して自

うことができたのですから。か。それが、いっときでも、自由を味わことが、どんなに心がうきうきするものことが、どんな問紙であっても命を持つ

動かすこともできる

があれば、新聞紙を自分の思いどおりに

聞紙が飛んできて元の場所へおさまっぽして、また風が起こって庭石から新

れば、やがて心もめばえてくるのでしょるで心があるようにです。 自由な命があるいて外気の寒さをふせいでくれた。 まこの詩の良さは新聞紙が庭石にはり

佳作「アダルトチルドレン」

禹田 枝寿子

私は大人なのに、心はちいさいままなのだ。私の心を開放して、とうさんとののだ。私の心を考える。でも、私は開放しきれなかったかも知れない。とうさんは十れなかったかも知れない。とうさんは十れなかったかも知れない。とうさんとのを探していて私を見なかった。この父をを探していて私を見なかった。この父を見る眼は深いです。

生ではなく私のものだからです。人生はとうさんとの行き掛かりが私の人生そとうさんとの行き掛かりが私の人生そとうさんとの行き掛かりが私の人生そとうさんとの行きからです。でも、生きていかなければならない。自分の人とは他人の人

からです。悲哀もあるけれど、悦びの原石でもある

い方に詩を感じました。 「私の心はちいさいままだ」という言

佳作「自分じゃない 自分」

自分という人間の謎を追い詰めると、自分という人間の謎を追い詰めると、ただし、見い出しても、もう自分ではなる。自分じゃない自分を見い出したい。る。自分じゃない自分を見い出したい。とが不備という人間の謎を追い詰めると、

たとえば、写真で幼い自分を見詰めているみるが、その目は今の私を見詰めている目でもある。そのときの自分の孤立感は目でもある。そのときの自分の孤立感はの意識から抜けきれない。
それは「自分って誰か」に戻るしかないのだろう。ここにポエジーがありました。

佳

作

海水の混じりし汗を流しつつ昆布の根をば休みなく切る

国宝の中空土偶は玻璃越しに古代微笑で聢と立ちをり

入

選

歌

短

Щ 県

庸 美

選

緞帳が上がり拍手の湧くが如打ち上げ花火散るその瞬間

険しくも芯すもの手にすると挑む我が娘の十五の春 花の咲く前線ようやく北にきて松前城下は万朶の明りに

雨に濡れし樹の幹陰翳ふかまりて神造りたまいし彫刻のごと

かき氷しゅらしゅらしゅらと降り積もりミゾレも降りて夜店賑わう

満開のサボテン軒に置きたれば株分け欲しいと見知らぬ人の

関 崎 島 沼 裕美子 美智子 京 清 子

中

中

水

岡 繁 雄

石

開

光 彦

竹

田

Ш 洋

子

圓

洋 子

大

滝

選評

ì

花火散るその瞬間とが如打ち上げ

とかはぶきたい。

をかはぶきたい。
とかはぶきたい。
とかはぶきたい。
とかはぶきたい。

で聢と立ちをり国宝の中空土偶は玻璃越しに古代微笑

の範囲ではあるまいか。 語の「で」は「にて」としたいが、認容 下の句の捉えかたが善い。第四句の口

海水の混じりし汗を流しつつ昆布の根

をば休みなく切る

なく」とし、結句も「休まずに切る」で的に感じ取られるので、第三句は「拭ふ何とか採りたい。原作通りではやや散文生活感のある労働の歌かと思うので

は如何

花の咲く前線ようやく北にきて松前城はイ

下は万朶の明かりに

とし、結句の「に」は取りたい。 上の句「ようやくに桜前線北にきて」

娘の十五の春険しくも志すもの手にすると挑む我が

し語調を強めに。
替えて「十五の春に挑む我が娘よ」と少さんを思う歌に。第四句、第五句を入れさんを思う歌に。第四句、第五句を入れる。

りたまいし彫刻のごと雨に濡れし樹の幹陰翳ふかまりて神造

の歌には作者なりの感じ方がある。「草木萌え」の素直な歌も善いが、こ

欲しいと見知らぬ人の満開のサボテン軒に置きたれば株分け

他の歌も作者の思いが伝わってくる。「出し置くに」とし、結句は「が」に。原作のままでもとも思うが第三句を

りミゾレも降りて夜店賑わうかき氷しゅらしゅらしゅらと降り積も

昨年、選にもれた歌を再度推敲された明年、選にもれた歌を再度推敲されたい。「霙」は削り氷に蜜をかけた飲物とい。「霙」は削り氷に蜜をかけた飲物と解釈すれば、「蜜をかけられ」としたい。「ミゾレも降りて」が、冬の季語だとすれば、夜店とは合わずこの歌は採れない。上の句と下の句の焦点が割れてしまうからである。推敲するか、没にするかはからである。推敲するか、没にするかはからである。推敲するか、没にするかは

時は選者冥利につきるのだが。の作品が採れないかと歌が訴えてくる言っても今回は添削をして仕舞った。こして添削をしないことにしている。とは以前にも書いたが、入選の歌は原則と

選

者

詠

次 々 と問 V かくる妻に 孫の言ふ 「お ぢ ١, ちや 6 は前 か ら無 口 だ つ た

٧

Ø

ユー手渡すに ライスと言ふ十六歳 の気兼

ね

アクセントなく話す孫 「大学生となり又会ひたし」 ح

東京

0

五

島

軒

0

ランチ

0

メニ

才

ム

男性 の平 均 寿 命は八十一歳再び孫と会ふ 日 0 あ ŋ Ŕ

向 き違 ^ 印 刷 機 動 く工 場に 孫を一度も入れしことなき

> 山 県

庸 美

俳

句

入

選

熊 澤

三太郎選

抜殻を残して蝉の遠出かな

作

佳

東京の子の手を引きて蝉時雨 秋立つ日老々介護の日を重ね

散策の塀より出でし萩の花 よれよれも手放しがたき夏帽子 遠足の静まりかへる校舎かな

大聖樹湾岸に灯の吹き溜まり

秋鮭の鮨漬け終えて先ず煙草

葯

地

政

義

竹

田

光

彦

富

樫

進

山 洋

子

員

々木 克 子

佐

清 佐 辰 水 藤 宮 清

理

春

法 雄

選

評

抜殻を残して蝉の遠出かな

面白い句になりました。蝉の雄は腹面面白い句になりました。蝉の雄は腹面に発音器があって、それで鳴きます。雌なって地上に出るまでに七年ほどもかかって地上に出るまでに七年ほどもかかると云われています。私たちが聞く蝉のると云われています。この句は、それ等のよっ、脱皮して「遠出」するに至った蟬でれ、脱皮して「遠出」するに至った蟬でれ、脱皮して「遠出」するに至った蝉のると云われています。この句は、それ等のと云われています。この句は、それ等のと云われています。この句は、それ等のと云われています。この句は、それの根ななと云われています。

秋立つ日老々介護の日を重ね

句表現に多少難点があります。「秋立つ選句とさせていただきました。ただこのています。それが句にも現れたことで入作今「老々介護」のことが取沙汰され

思います。この「日」は意味が違いまもあります。この「日」は意味が違いますがどうも重複がいけない。「秋立つや」としたらどうでしょう。

東京の子の手を引きて蝉時雨

「東京の子」が面白いのです。云うまでもなく、東京は過密都市で一千万の人口ですからね。蝉の生まれる余地さえないのかも知れません。東京に生れ育ちつあるどなたかのお子さんが夏休みでいているのが蟬時雨と云うんだよ」と教がているのです。冒頭の句にも云いましたが、自然の生命の営みを教えているのたが、自然の生命の営みを教えているのです。

作

毎年カナダのハリファックスから運**大聖樹湾岸に灯の吹き溜まり**

日」とありますが「日を重ね」の「日」 す。大西洋の北東部から太平洋の極東日 た大きな樅の木のクリスマスツリーで 本の函館へ一万八千キロの旅をしてき ばれ贈られて来る大聖樹を詠んだ句で

です。樹の高さは二十メートルほど、電の大聖樹が送られることになったようの大聖樹が送られることになったとの変流などの事で姉妹都市になったとのなどが共通しているとか、その他学術をなどが共通しているとか、その他学術

が行われたと云います。気候や風土そしす。昭和五十七年に姉妹都市提携の調印

クリスマスファンタジー」と銘打っていした。観光パンフレットには「はこだてて多くの人に親しまれるようになりまて多くの人に親しまれるようになりま

球の数は五万個だそうです。

溜まり」と表現したことがとても面白いも停泊しています。その煌めきを「吹きいます。港に船が停泊するように大聖樹います。港に船が停泊するように大聖樹の中七は「湾岸に灯の」と表現して

遠足の静まりかへる校舎かな

「遠足」は春の季語です。歳時記には、「遠足」は春の季語です。いつも賑やかなものを詠むのではなく遠足でみな出払ものを詠むのではなく遠足でみな出払ってしまった「静まりかへる校舎」を詠嘆していることですね。なるほどこれも「遠足」の一光景です。、歳時記にはを舎が、その日誰もいない森閑とした校舎が、その日誰もいない森閑とした校舎が、その日誰もいない森閑とした校舎が、その日誰もいない森閑とした校舎が、その日誰もいない森園とは春季と云っている空虚感。

よれよれも手放しがたき夏帽子

説明無用の句です。いい句ですね。や 説明無用の句です。いい句ですね。や 記明無用の句です。いい句ですね。や 記明無用の句です。 れているのが「手放しがたい」んですよ。 ない。汗ばんで「よれよれ」に、くたびない。汗ばんで「よれよれよれいでした。 私は造りませんでした。 私のは、 おは造りませんでした。 私のは、 おいちでする。 やれないか」とせがまれたことがあります。 私は造りませんでした。 私のは、 おいちですね。 やれなれの登山帽でしたけれど。

散策の塀より出でし萩の花

「萩」はふさふさと、ながながと、しだ「萩」はふさふさと、ながながと、しだいことの捉え方もいいと思います。「秋ひとつ。「散策の塀」と云う何事でもなひとつ。「散策の塀」と云う何事でもないことの捉え方もいいと思いますね。 よくこのような景に出会いますね。

秋鮭の鮨漬け終えて先ず煙草

面白い句だなぁと思いましたけれど、面白い句だなぁと思いました。どうしてこんな云やはり選句しました。どうしてこんな云い方になったからです。まず「秋鮭」ですとがあったからです。まず「秋鮭」ですとがあったからです。まず「秋鮭」ですいます。他に歳時記になってみな夏です。「鮭」だけでいいのです。秋の季語です。「鮭」だけでいいのです。秋の季語です。「鮭」だけでいるできる。というでは、いましたけれど、面白い句だなぁと思いましたけれど、面白い句だなぁと思いましたけれど、

た。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。とは云うものの、この句は「鮨漬けた。そのような意もあってこの句をいた。そのような意もあってこの句をいたた。そのような意もあってこの句をいたた。そのような意もあってこの句をいたら、はじめはこれはいけないと思いました。

「鮭飯鮓漬け終へて先づ」上五と下五を直してみて、

でもすればどんなものでしょうか。「鮭飯鮓漬け終へて先づ安堵して」と

海霧晴れて函館夜景よかったねじり

万緑やこんなところに捨てサイロ

言ひ返す代りに草矢打つ妻よ

父と子の心を乗せて奴凧

虎杖を噛い めばひもじき頃のこと

者 吟

選

熊 澤 Ξ

> 太 郎

Ш

柳

池 さ

入

選

佳

作

アド

ij

ブ

の下手なわ

た

L

0

白 V

画 布 隠

してた老

いを写真が

盗

4

撮

h

春夏秋冬胸

の小

部屋に花を活け

これ 運命と思えば か らも優 12 L 穏 ١, P 人 か になるつもり 15

日

々

平

和 夫

婦

で

酒

を

嗜

h

で

犬石

恭子

白井

靖孝

佐藤

理

レミヤが

付い

た金券蚊帳

の外

砂

利道で

聞

く人

生

0

応

援

歌

野﨑 麗舟

水島 悦子

本間 口 豊 総子

浜

子

岩本

真穂

選評

入選

春夏秋冬胸の小部屋に花を活け

るのだが、中七の「胸の小部屋」が、作日常生活をそのまま素直に詠ってい

品を際立たせている。

その通り。 出柳は心のつづりであり、生活の詩で

新鮮な感性の世界がそこに有る。

隠してた老いを写真が盗み撮り

のが良い。

ている。 して、ユーモアたっぷりの作品に仕上げ あっけらかんと自分自身をさらけ出

作者の人柄が感じられるようでもあ

幅の軸でもあると言えよう。 まさに川柳は笑いの文学でもあり、一

アドリブが下手と白い画布の組み合アドリブの下手なわたしの白い画布

誰でもが、そう簡単に思いつく事では

わせが絶妙で成功している。

ない。うまいの一語に尽きる。

これからも優しい人になるつもり

佳作

現在の心境をきっぱり表現している る。そんな人達がうじゃうじゃ居る。 そんな中で、人生を達観したような心 境になれるのは素晴らしい。

運命と思えば心穏やかに

ている。
この作品にも又、澄み切った心が見え

激動の世の中を人生という旅をして、

きな心になった事である。たどり着いたのが全てを受け入れる大

どり着けないのが現実である。ヒト科の動物なかなかこの心境にた

砂利道で聞く人生の応援歌

止めた感性が素晴らしい。
ある。否絶対に応援歌なのであると受けながら自分自身への応援歌のようでもながら自分自身への応援歌のようでも

作品である。
をう思わせるに充分の

作者は、常日頃五感をはたらかせてい

日々平和夫婦で酒を嗜んで

わせている。 一切とも穏やかな光景。一日一日に充分 に見えるようで、落ち着いた雰囲気を漂 に見えるようで、落ち着いた雰囲気を漂

プレミヤが付いた金券蚊帳の外

な風刺を効かせて成功している。の恩典も無かった。「蚊帳の外」に痛烈いミヤ券だったが、自分とは無関係で何レミヤ券だったが、自分とは無関係で何

こに数句佳句を取り上げておく。数に制限があり入賞出来なかったが、こ

筋トレの帰りも歩き足がつる
エンブレム東京五輪の赤い恥
エンブレム東京五輪の赤い恥

選 者

吟

みな愛想笑い して いる疑似平和

三角も四角もい ら ぬ丸く生き 平和って何だつくづく老介護

走ってるつもりにゴールまだ遠い

耳栓をするりと抜けた一

語は死

池

さ と し

審査員紹介(*本紙各部門受賞作品の掲載順)

函館文学学校講師

対

馬

俊

明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安

東

璋

ノンフィクション 函館文学学校講師

『海光』同人

竹

中

征

機

詩

北海道詩人協会理事

道南歌人協会顧問 北海道アララギ地方編集委員

函館俳句協会会長

俳

『ホトトギス』同人

川柳

函館川柳社主幹

短歌

函館金曜詩会代表

鷲 谷 峰

雄

県 庸 美

Щ

熊

澤 三太郎

池

さとし

あとがき

『市民文芸』第五十五集をお届けします。

六歳で逝去された作家・宇江佐真理さんが『市民文芸』で入 今回は、「宇江佐真理追悼特集」と題し、昨年十一月に六十

承をいただき、掲載いたしました。 宇江佐さんが投稿されて 選された作品の中から小説と文芸評論を一作ずつご遺族の了 いた頃からよく御存知の安東先生には追悼文を寄せていただ

きました。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆十七編、小説十編、文芸評論一編、ノンフィクション七編 詩三十一編、短歌六十五首、俳句六十四句、川柳六十三句、計

となりました。今後とも、より多くの市民の方に参加してい りましたが新規の応募者も増え、バラエティに富んだ作品集 一百五十八点となりました。例年よりも作品数はやや少なくな

にしていきたいと考えております。 ただけるように応募方法を工夫し、 最後になりますが、各審査員の先生方にはご多用中にもか 内容もより充実したもの

たことを心より厚くお礼申し上げます。 かわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りまし

函館市民文芸 — 第五十五集

函館市五稜郭町 26 - 1 発行日 平成28年3月19日 編集・発行 函館市中央図書館指定管理者 RR 函館グループ ℡(○一三八)三五―五五〇○

五稜郭の桜と函館市中央図書館